新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 284 集

県内遺跡発掘調査報告書Ⅶ

本ノ木・田沢遺跡群総括報告書

２０１９

新　潟　県　教　育　委　員　会

県内遺跡発掘調査報告書Ⅶ

本ノ木（もとのき）・田沢（たざわ）遺跡群総括報告書

２０１９

新　潟　県　教　育　委　員　会

本ノ木・田沢遺跡群周辺の地形

本ノ木・田沢遺跡群 遠景（西から）

本ノ木・田沢遺跡群 遠景（北から）

本ノ木遺跡 近景（南から）

本ノ木遺跡 第 1 次調査の様子

本ノ木遺跡 第 2 次調査の様子

本ノ木遺跡
第 1・2 次調査出土土器（押圧縄文土器）

本ノ木遺跡 第 1 ・ 2 次調査出土石器

本ノ木遺跡 基本層序（6 トレンチ）

本ノ木遺跡と卯ノ木南遺跡の遺跡間接合資料

本ノ木遺跡 列石状遺構

本ノ木遺跡 立石状遺構

本ノ木遺跡 山体崩落堆積物検出状況
〈 國學院大學考古学研究室提供 〉

崩落堆積物直上出土のハの字爪形文土器

本ノ木遺跡　Ｂ地点出土の押圧縄文土器群

本ノ木遺跡 Ｂ地点押圧縄文土器群に伴う石器群

中林遺跡 出土石器
〈 東北大学考古学研究室所蔵 長岡市立科学博物館撮影 〉

田沢遺跡 近景（南東から）

田沢遺跡 第 1 次調査の様子〈 東北大学考古学研究室提供 〉

田沢遺跡 第 1 次調査出土遺物
〈 東北大学考古学研究室所蔵 長岡市立科学博物館撮影 〉

田沢遺跡 近景（北東から）

田沢遺跡 基本層序（7 トレンチ）

田沢遺跡 第 2 ～10 次調査出土遺物

田沢遺跡・壬遺跡から望む信濃川・清津川の合流点
（2016 年 6 月15 日撮影。信濃川右岸に自然堤防が形成されている。）

壬遺跡 出土土器（円孔文土器・複製品）
〈 國學院大學博物館所蔵 長岡市立科学博物館撮影 〉

無文土器

隆起線文土器

円孔文土器

石器

壬遺跡 出土遺物
〈 國學院大學博物館所蔵 長岡市立科学博物館撮影 〉

序

本書は、十日町市・津南町等が保存を目的として発掘調査を実施してきた本ノ木・田沢遺跡群の調査成果を、両市町教育委員会から依頼を受けて作成した総括報告書です。

現在、空前の縄文時代ブームとして遺跡・出土品が報道されています。全国に数多くの縄文時代遺跡がありますが、時期別では縄文時代の開始時期にあたる草創期は遺跡数が最も少ないのが現状です。本県でも同じ傾向ではありますが、十日町市・津南町が位置する信濃川上流域の清津川流域では、縄文時代草創期の遺跡が数多く確認されており、昭和30年代から大学等の発掘調査が行われたことで全国的にも重要な地域と認識されてきました。

平成20年を前後して本遺跡群は、地元教育委員会や大学等による保存を目的とした精緻な調査が行われ、それぞれ遺跡の発掘調査報告書が刊行されたことで、各遺跡の歴史的価値が示されました。一方で、遺跡群としての歴史的評価を示す総括報告書の刊行が必要とされてきましたが、遺跡が複数の自治体にまたがることから、十日町市・津南町からの依頼もあり、県が作成・刊行することといたしました。

本書をつうじて十日町市・津南町に所在する貴重な埋蔵文化財が認識され、県内のみならず、全国的視野で縄文時代草創期の歴史的価値を研究する資料として活用されることで、埋蔵文化財の理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後になりますが、調査に際して多大な御協力と御援助を賜りました文化庁、十日町市教育委員会、津南町教育委員会、調査指導委員会・ワーキンググループの委員の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成31年２月

新潟県教育委員会
教育長　池　田　幸　博

例　言

1　本書は、平成30年度に新潟県教育委員会が文化庁国庫補助事業として実施した本ノ木・田沢遺跡群の総括報告書である。

2　本書は文化庁との協議を経て、執筆項目・内容を定めた。執筆は、加藤　学（新潟県教育庁文化行政課　主任調査員）、滝沢規朗（同　副参事）、髙橋保雄（同　文化財調査員）、石原正敏（十日町市教育委員会　参事･課長補佐）、笠井洋祐（同　主査）、佐藤雅一（津南町教育委員会　参事）、佐藤信之（同　文化財専門員）、今井哲哉（同　文化財専門員）があたり、編集は加藤が担当した。執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章　滝沢規朗　　第Ⅱ章　髙橋保雄　　第Ⅲ・Ⅵ章　加藤　学

第Ⅳ章　佐藤雅一・佐藤信之・今井哲哉　　第Ⅴ章　石原正敏・笠井洋祐

3　本書に掲載した図面・写真は、次の機関からの協力・提供を受けた。

東北大学、國學院大學、十日町市教育委員会、津南町教育委員会、長岡市教育委員会

4　図書館等（著作権法第31条第１項に規定する図書館等をいう。）の利用者は､その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。

5　本書の作成において、下記の方々から御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く感謝申し上げる。（敬称略　五十音順）

岡本東三　　鹿又喜隆　　工藤雄一郎　　小林達雄　　谷口康浩　　長井謙治　　山内多模子

山内ひみ子

目　次

第Ⅰ章　序説
1　本書の目的 …… 1
2　本書作成の経緯 …… 1
A　十日町市・津南町の取り組み …… 1
B　総括報告書作成の必要性と意義 …… 3
3　報告書刊行に係る調査体制と調査指導委員会 …… 4
A　調査体制 …… 4
B　調査指導委員会 …… 4
第Ⅱ章　遺跡群の位置と環境
1　位置 …… 5
2　地理的環境 …… 6
A　地形と地質 …… 6
B　津南段丘の形成 …… 6
C　津南段丘とローム層 …… 7
D　石材環境 …… 8
3　歴史的環境 …… 9
A　草創期遺跡の分布 …… 9
B　周辺の遺跡 …… 12
第Ⅲ章　調査・研究史
1　芹沢長介・山内清男による発掘調査 …… 16
A　本ノ木遺跡の発見 …… 16
B　本ノ木遺跡の第１次調査 …… 16
C　本ノ木遺跡の第２次調査 …… 17
D　中林遺跡の調査 …… 19
E　田沢遺跡の調査 …… 20
2　本ノ木論争 …… 20
A　本ノ木論争の背景と出土層位の理解 …… 20
B　渡来石器をめぐる議論 …… 21
C　発掘調査報告書の刊行と本ノ木論争の今後 …… 23
3　本ノ木遺跡の第３～12次調査 …… 24
A　第３次調査 …… 24
B　第４次調査 …… 24

C　第５～７次調査 ……24
D　第８～12次調査 ……26
4　壬遺跡の調査 ……27
5　田沢遺跡の第２～10次調査と報告書の刊行 ……28
6　卯ノ木南遺跡の調査 ……28
7　屋敷田Ⅲ遺跡・駒返り遺跡等の調査……29
第Ⅳ章　本ノ木遺跡
1　遺跡の立地 ……31
2　基本層序 ……32
3　遺構と遺物 ……33
A　遺構 ……33
B　遺物 ……34
4　編年的位置付け……37
5　古環境と遺跡 ……39
A　本ノ木遺跡の古地形変遷 ……39
B　地史変遷と古環境の関係 ……41
6　歴史的価値 ……42
第Ⅴ章　田沢遺跡・壬遺跡
1　遺跡の立地 ……43
2　基本層序 ……43
3　遺構と遺物 ……46
A　遺構 ……46
B　遺物 ……46
4　編年的位置付け……47
5　古環境と遺跡 ……48
6　歴史的価値 ……49
第Ⅵ章　総括
1　遺跡群の編年的位置と年代 ……54
A　本ノ木遺跡の位置付け ……54
B　遺跡群の編年的位置付け ……56
2　遺跡群の歴史的意義 ……61
A　遺跡群周辺の環境 ……61
B　遺跡立地と生業 ……63
C　開地遺跡と洞窟遺跡 ……66
D　遺跡群の歴史的意義 ……68

3　遺跡群の保存と活用 ……69
A　保存と活用の基本的な考え ……69
B　本遺跡群の保存と活用 ……69

《引用文献》 ……71

挿 図 目 次

第１図　遺跡群の位置…… 5
第２図　十日町・津南地域の表層地質…… 6
第３図　十日町・津南地域の地質層序…… 6
第４図　津南地域の段丘模式断面図…… 7
第５図　信濃川流域の段丘面分布図…… 7
第６図　津南段丘群の地質区分と
主な指標テフラ…… 8
第７図　草創期の遺跡分布…… 10
第８図　草創期の土器文様の変遷…… 12
第９図　本ノ木遺跡　第１次調査の様子…… 16
第10図　本ノ木遺跡　第１次調査の断面図…… 17
第11図　本ノ木遺跡　第１次調査後の
芹沢の編年…… 17
第12図　本ノ木遺跡　第２次調査で
検出された配石遺構…… 18
第13図　本ノ木遺跡　第２次調査の様子…… 18
第14図　中林遺跡　出土石器…… 19
第15図　中林遺跡調査後の芹沢の編年…… 19
第16図　田沢遺跡　第１次調査の様子…… 20
第17図　佐藤達夫が示した文化の渡来経路…… 22
第18図　本ノ木遺跡の形成過程…… 25
第19図　壬遺跡　調査の様子…… 27
第20図　屋敷田Ⅲ遺跡の遺物…… 29
第21図　本ノ木遺跡周辺の地形…… 31
第22図　津南段丘の構成模式図と
主要な組成テフラ…… 31
第23図　基本層序堆積状況と
ゾーン区分対比図…… 32
第24図　A・B層の堆積状況 …… 32
第25図　本ノ木遺跡の調査区…… 33
第26図　列石状遺構…… 33
第27図　立石状遺構…… 34
第28図　主要な草創期土器群と出土分布図…… 35
第29図　押圧縄文土器期の主要石器群と
出土分布図…… 36
第30図　層序対比と主要出土遺物との関係…… 37
第31図　第１・２次調査出土の遺物…… 38
第32図　本ノ木遺跡の変遷図…… 39
第33図　尖頭器石器群活動期の古地形想定図… 39
第34図　山体崩落期の古地形想定図…… 40
第35図　押圧縄文土器活動期の古地形想定図… 40
第36図　本ノ木遺跡の地史変遷と
土器群の年代値…… 40
第37図　卯ノ木低地の主要花粉化石群集の
層位分布…… 41
第38図　卯ノ木南遺跡隣接地泥炭層の
花粉化石群集…… 42
第39図　田沢遺跡・壬遺跡の調査区…… 44
第40図　田沢遺跡・壬遺跡における遺物分布… 45
第41図　壬遺跡における土器の
層位的出土状況…… 48
第42図　田沢遺跡　第１次調査出土資料…… 50

第43図　田沢遺跡　第２～10次調査出土資料… 51
第44図　壬遺跡　出土土器…… 52
第45図　壬遺跡　出土石器…… 53
第46図　新潟県内における草創期の遺跡分布… 57
第47図　本ノ木・田沢遺跡群における
道具の変遷…… 58
第48図　久保寺南遺跡　出土資料…… 60
第49図　卯ノ木南遺跡　出土資料…… 60

表 目 次

第1表　信濃川上流域の草創期遺跡 …… 11
第2表　エリア別の遺跡分布 …… 12
第3表　時期別の遺跡分布 …… 12
第4表　本ノ木・田沢遺跡群における
調査の履歴…… 30

第Ⅰ章　　序　説

1　本書の目的

本書は、十日町市と中魚沼郡津南町が国史跡を目指している本ノ木・田沢遺跡群の総括報告書である。十日町市には田沢遺跡や壬遺跡、津南町には本ノ木遺跡や卯ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡など著名な遺跡が多く、それぞれ発掘調査が行われている。これらの調査成果については、各自治体・機関により詳細な情報がまとめられた発掘調査報告書が刊行されている［田沢遺跡：笠井・石原ほか2018、鹿又ほか2018、壬遺跡：小林編1983ほか、本ノ木遺跡：小林・岡本・佐藤2016、佐藤・佐藤・今井2018］。

各遺跡の歴史的価値・評価は発掘調査報告書等で詳細にまとめられているが、遺跡群全体を対象とした報告書は刊行されておらず、国史跡を目指すにあたって大きな課題である。このため、発掘調査報告書等が刊行された十日町市田沢遺跡・壬遺跡、津南町本ノ木遺跡を遺跡群という視点で捉え、その歴史的な価値をまとめて総括報告書を刊行して両自治体が取り組む国史跡指定の一助とすることを目的とした。

2　本書作成の経緯

A　十日町市・津南町の取り組み

（1）調査指導委員会の立ち上げ（平成19年～20年）

日本一の大河である信濃川流域の十日町市と津南町は、全国屈指の縄文時代草創期遺跡密集地である。学史的に著名な遺跡が多いことから、平成19年12月の十日町市･津南町文化財審議会合同研修会において、信濃川支流にあたる清津川流域の縄文時代草創期遺跡群の保存を求める発言が委員からあった。これを受けて市町では、内部の調整を経て平成20年３月から具体的な協議を行い、国指定史跡を目指すことで一致し、平成20年９月に信濃川中流域草創期遺跡群調査指導委員会（その後、信濃川上流域草創期遺跡群調査指導委員会に改称。以下、「委員会」という。）の設置準備会を開催した。

設置準備会では國學院大學小林達雄名誉教授の指導を踏まえ、構成する遺跡や諸課題、課題解消に向けた作業スケジュール等について検討を行った。その結果、十日町市・津南町と二つの自治体に分布する遺跡を群として捉えて保護措置を図ること、対象遺跡を絞り込み、おおむねの目安として平成21～24年度に範囲内容確認調査を実施して平成25年度に申請を目指すこと、その後も調査等を継続して保護する遺跡を拡大することで一致した。当面、確認調査を実施する対象遺跡として十日町市は壬遺跡・田沢遺跡・中林遺跡・一里塚遺跡・狐森遺跡など、津南町は卯ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡・本ノ木遺跡・屋敷田Ⅲ遺跡・駒返り遺跡などが候補とされた。

（２）委員会設置後の主な取り組み

平成21年度から委員会が開催され、十日町市・津南町では情報共有しながら様々な課題に対応することとした。主な課題として、十日町市では田沢遺跡の状況確認（範囲･内容や過去のトレンチ位置など）、津南町では昭和31･32年に調査が行われた本ノ木遺跡の発掘調査報告書の刊行や遺跡内容確認が挙げられた。十日町市では平成21年度から範囲確認調査に着手し、調査成果が蓄積されていく。津南町では本ノ木遺跡出土品の所有関係の手続き等を迅速に行って報告書刊行作業に着手するとともに、平成21～25年度まで本ノ木遺跡の発掘調査を実施して大きな成果が得られた。

（３）平成26～29年度の取り組み

十日町市田沢遺跡の調査は継続中であったが、平成26年度以降は国史跡指定に向けた具体的な協議が行われるようになる。以下では、総括報告書作成に至る経緯に係わる部分等を中心に記述する。

平成26年度：個々の遺跡の調査に加え、遺跡群として歴史的評価が重要となる。ただし、複数の市町村にまたがる遺跡群であるため、県と十日町市・津南町で作業分担を行うこととした。想定される遺跡群の評価として、縄文時代草創期において、環境・生業の変化等を要因に人間の活動拠点が移動する様相が把握できる等が挙げられたが、調査中の遺跡もあることから早急な作成は困難な状況にあった。

平成27年度：再度、各遺跡の調査進捗状況や価値付けについて検討が行われた。十日町市では壬遺跡が調査済み、田沢遺跡は調査継続中であるが、中林遺跡は範囲・内容の確認調査に３か年程度要するため、いずれかの時期に国史跡に向けた調査を実施することとした。津南町でも同様に本ノ木遺跡の調査等の目途は立っているものの、何度か調査が行われている卯ノ木南遺跡は残存状況・歴史的価値付けなどを踏まえた取り扱いが課題とされた。これらを踏まえ、本ノ木遺跡の報告書刊行見込みとなる平成29年秋頃を一つの目途に、国史跡に向けた具体的な事務手続きに着手することとした。

平成28年度：６月７日に文化庁水ノ江調査官から現地で、①各遺跡の報告書作成にあたり遺跡形成時の旧地形を復元すること、②遺跡の広がりと遺存率を求めることという指導に加え、③委員会の下部組織としてワーキンググループを編成し、遺跡群の評価の一助としてはとの提案があった。①②は発掘調査報告書に盛り込むこととし、③は委員会と同様の事務局・オブザーバーとし、國學院大學文学部谷口康浩教授、国立歴史民俗博物館工藤雄一郎准教授から指導いただくこととなった。

ワーキンググループ第１回作業は平成29年１月20日に行った。その結果、旧石器時代～縄文時代草創期における遺跡群の変遷と信濃川の流路等を含めた地形の変遷が追える点も重要であり、自然環境と人々の営みである遺跡と地形の変化が明確に把握できる全国的にも稀有な事例、とされた。

また、文化庁から遺跡群の歴史的評価を示す総括報告書が必要で、複数の市町村にまたがる場合に都道府県が作成した事例があると紹介され、本遺跡群についても新潟県での作成が提案された。

平成29年度：６月14・15日には文化庁森先技官から、各遺跡の保存状況等を勘案して将来にわたり保護すべき遺跡の範囲や、古環境の復元に有効な自然科学分析についての指導を得た。これらを踏まえて、津南町では本ノ木遺跡の国史跡を目指すこととし、卯ノ木南遺跡は順次情報の収集等を継続することとした。また、十日町市では田沢遺跡と壬遺跡が調査で明らかになった段丘境で遺跡名を分けるが、保護する範囲に空白を設けないこととした。

７月20日には第２回ワーキンググループを行った。各遺跡の実年代、古環境の分析データが他地域に比べて格段に多く、自然環境と人々の営みが明確に把握できる全国的にも稀有な遺跡群であることが改めて

認識された。各遺跡の捉え方として十日町市田沢遺跡と壬遺跡は、それぞれ別々に周知化されているが、実体は連続的に広がることが明らかになったため一体的に捉えた方が認識しやすいとされた。津南町の卯ノ木南遺跡は、本ノ木遺跡出土石器と接合関係が確認できるなど極めて重要であるが、調査途中のため将来の史跡指定を見据えて継続調査することとした。

また、改めて文化庁から県が総括報告書を作成することの提案を受けた。この要因については平成26年10月31日『適正な埋蔵文化財保護行政を担う体制等の構築について』（報告）をもとに、広域行政の責務として、域内の埋蔵文化財を総体的に捉えた上で、保存する遺跡を正しく価値付けする作業は市町と連携しつつ県が主導することが望ましく、市町が各自で報告することだけではその価値付けにも不統一が生じることが考えられ、整備・活用等を含めた今後の施策にも影響が出るおそれがあるためである。

B　総括報告書作成の必要性と意義

前項での記述のとおり、複数の市町にまたがる保存目的の遺跡調査総括報告書を県が刊行することについて想定していなかったが、文化庁からの提案を検討した結果、県が総括報告書を作成するにあたって下記のように整理し、刊行することとした。

文化庁が設置した埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会による『適正な埋蔵文化財行政を担う体制等の構築について』（報告）－これからの埋蔵文化財行政に求められる体制－「第３章　地方公共団体における埋蔵文化財行政を担う体制について　２都道府県の役割（１）都道府県の業務」として、「広域の地方公共団体として、域内の市町村が適切な埋蔵文化財保護行政を行うために必要な助言や市町村との連絡・調整及び市町村では対応できない大規模な発掘調査の実施等が挙げられる」とある［文化庁2014　pp.15］。また、同報告の「ウ　保存・活用事業に係る業務」では、史跡指定等における都道府県の役割として、「埋蔵文化財を総体的に評価し、その価値に応じた保護措置を自ら取ることが望まれる」とある［文化庁2014　pp.16］。

本ノ木・田沢遺跡群の発掘調査は、旧石器時代～縄文時代草創期の知識や発掘調査能力に長けた埋蔵文化財専門職員が配置されていることに加え、史跡指定後の保護・活用を適切かつ効率的に行うには基礎的自治体である各市町が実施すべきものである。一方で、広域にまたがる遺跡群の総括報告書の市町作成事例は、県内では前例がない。このため役割分担の困難さや、どちらか一方の市町が作成した場合に歴史的価値付けに若干の不統一感が生じることが想定された。しかし、そもそも隣接する市町村に所在する遺跡の歴史的な価値を認識せずに、域内の遺跡を評価することはできない。そのため、将来は複数の市町村にまたがる遺跡群であっても、県は主導をするものの当該自治体が連携を深めて総括報告書を刊行することが望ましいと考えるが、前述のように本県では前例がないため一定の指針も欠く。総括報告書作成に係わる指針作成についても一定期間が必要であり、市町が目指す国史跡指定に向けた意見具申作成に影響が出ることが予想されたため、県が総括報告書を刊行することを検討することとした。

十日町市・津南町と協議した結果、県による作成・刊行を求められ、平成30年４月９日付け十教文第10号により十日町市教育委員会教育長から、平成30年４月９日付け教委第88号で津南町教育委員会教育長から、それぞれ新潟県教育委員会教育長へ「（仮称）信濃川上流域草創期遺跡群総括報告書について（依頼）」が提出された。これに基づき、県では平成30年４月11日付け教文第75・76号で了承すると回答した。

3　報告書刊行に係る調査体制と調査指導委員会

A　調査体制

新潟県教育委員会では、十日町市教育委員会・津南町教育委員会の依頼を受け、文化庁国庫補助金（県内遺跡発掘調査等）を受けて本ノ木・田沢遺跡群総括報告書の作成を行った。報告書作成にかかる調査体制は以下のとおりである。

総　　括　牛腸　　明（新潟県教育庁文化行政課長）
管　　理　平田美由紀（新潟県教育庁文化行政課長補佐）
調査指導　滝沢　規朗（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）
調査担当　加藤　　学（新潟県教育庁文化行政課主任調査員）
調 査 員　髙橋　保雄（新潟県教育庁文化行政課文化財調査員）

B　調査指導委員会

本書は上記の体制で、信濃川上流域草創期遺跡群調査指導委員会での指導を経て刊行することとした。

指導委員　小林　達雄（國學院大學名誉教授）
指導委員　岡本　東三（千葉大学名誉教授）

オブザーバー	文化庁文化財部記念物課　（平成30年10月から文化財第二課）		
		水ノ江和同（文化財調査官）	平成21～29年度
		森先　一貴（文化財調査官）	平成29～30年度
	新潟県教育庁文化行政課	澤田　　敦（埋蔵文化財係長）	平成21～26年度
		滝沢　規朗（埋蔵文化財係長）	平成27～29年度
		加藤　　学（主任調査員）	平成29・30年度
事 務 局	十日町市教育委員会	石原　正敏（文化財課参事・課長補佐）	
		笠井　洋祐（文化財課主査）	
	津南町教育委員会	佐藤　雅一（文化財班参事）	
		佐藤　信之（文化財班文化財専門員）	
		今井　哲哉（文化財班文化財専門員）	

（１）平成30年度第１回指導委員会（平成30年４月27日）

総括報告書の記述項目・内容の検討を行い、了承を得た。主な合意事項として、①既に各遺跡の報告書で成果があるため内容を的確にまとめることとし、個人の研究視点は不要。②データが乏しい項目（例えば洞窟遺跡との関連等）は簡単に触れる程度とする。

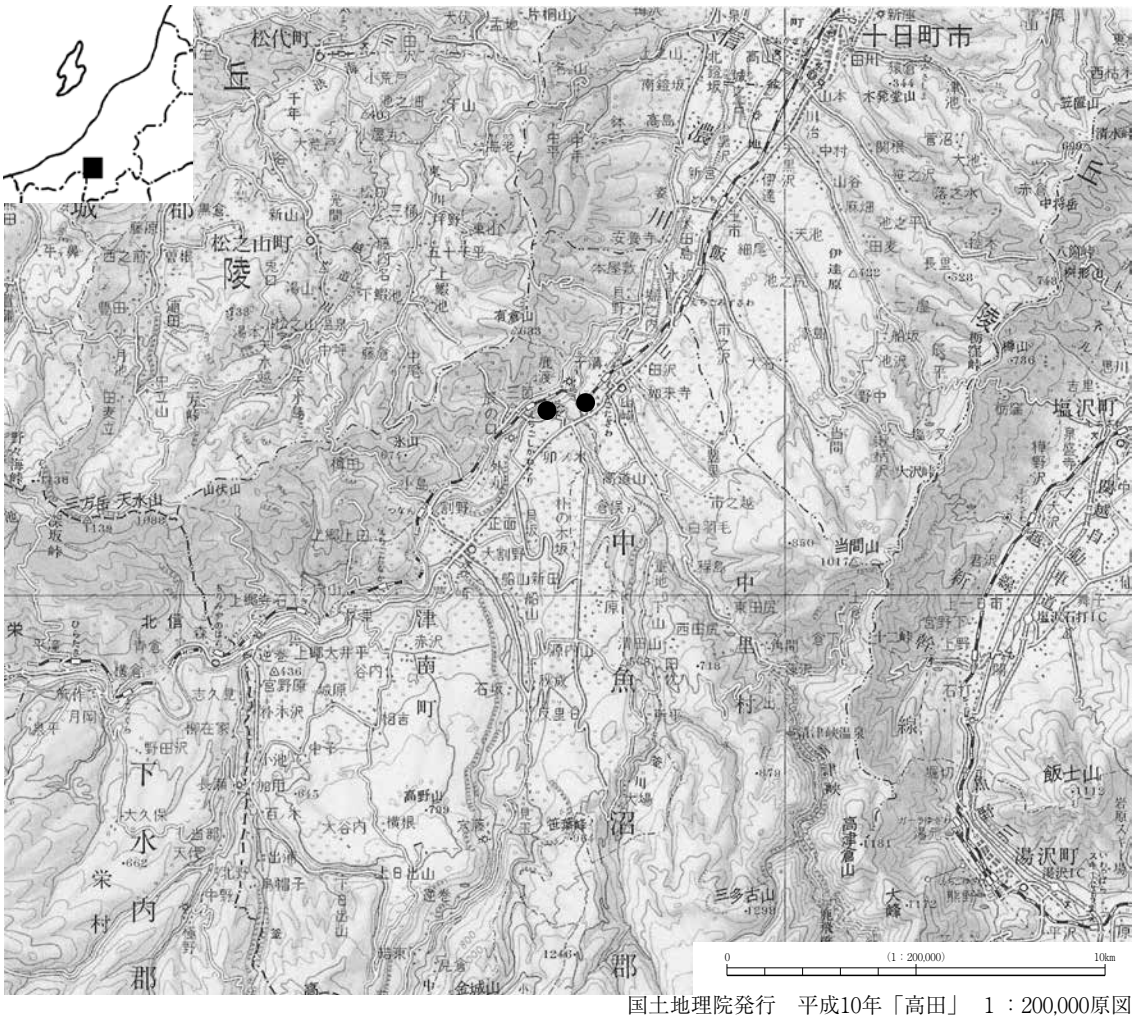
（２）平成30年度第２回指導委員会（平成30年11月16日）

これまでの検討結果を経て、平成30年10月末までに各執筆分担者で作成後、仮編集を行った。仮編集段階のものを委員会で確認し、指摘事項等を修正後に平成30年12月３日に印刷・刊行の手続き移行した。

第Ⅱ章　　遺跡群の位置と環境

1　位置

本ノ木・田沢遺跡群が所在する十日町・津南地域は、新潟県南部に位置する（第１図）。東は南魚沼市・湯沢町、北は小千谷市・長岡市・柏崎市、西は上越市に接し、南は長野県栄村と延長30km以上の県境をなす。人口は62,955人（十日町市53,235人、津南町9,720人／2018年10月現在）を数え、面積は760.6㎢（十日町市590.39㎢、津南町170.21㎢）である。この地域は、中世以降、「妻有郷」と呼ばれており、近代以降は中魚沼郡の郡域を構成している［中里村史専門委員会1988］。気候は日本海側の内陸中山間部に位置することから津南町の高地を除き、夏期は高温多湿、冬期は北西からの季節風による多雪地帯である［津南町史編さん委員会1985］。



国土地理院発行　平成10年「高田」　1：200,000原図

第１図　遺跡群の位置　（左：本ノ木遺跡、右：田沢遺跡・壬遺跡）

2　地理的環境

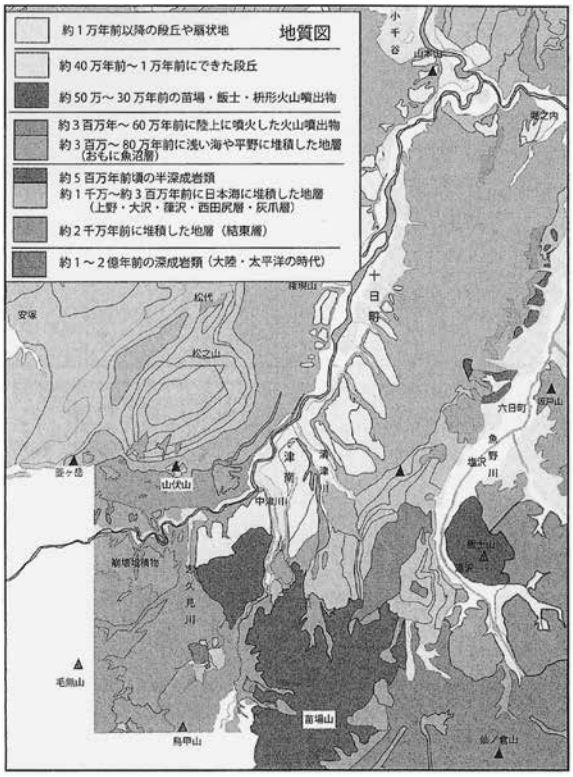
A　地形と地質

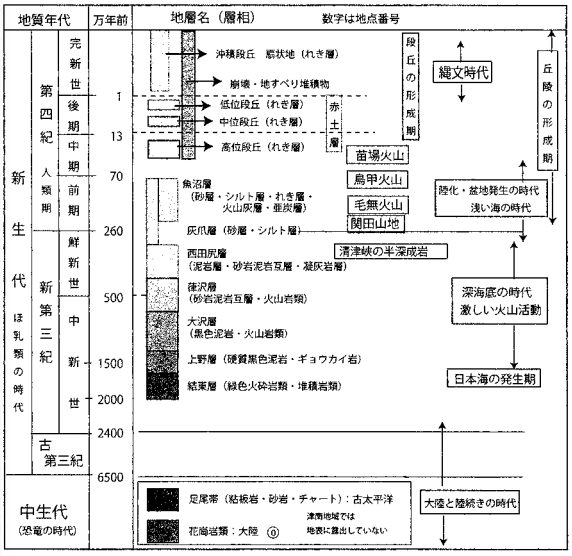
当地域は、北北東から南南西に延びる十日町盆地の南部にあたる。十日町盆地は北東部と南西部がすぼまる紡錘形をなしており、この盆地を日本最長の信濃川が南南西から北北東方向に縦走し、南から志久見川・中津川・清津川などの中小河川と合流して北流する。

この地域の地形・地質は、信濃川流域に広がる段丘群と両側の丘陵部に特徴付けられる（第２・３図、巻頭図版２）。東側の魚沼丘陵は、約2,000万年前に堆積した火砕岩や堆積岩、約1,000万年～300万年前に深い海に堆積した堆積岩や火山岩、その上位には約300万年～80万年前に堆積した浅い海や陸の堆積岩（魚沼層）、南部では約50万年～30万年前に苗場山などの噴火による溶岩や火山噴出物が分布する。一方、西側の東頸城丘陵は主に約300万年～80万年前に堆積した浅い海や陸の堆積岩（魚沼層）が分布する［卜部･渡辺2013］。

B　津南段丘の形成

当地域では、約40万年前以降、魚沼層が堆積した範囲で隆起運動を開始する。これにより、信濃川の流





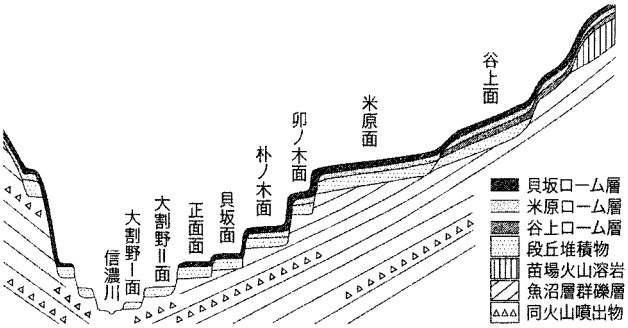
第３図　十日町・津南地域の地質層序
［卜部・渡辺2013］

第２図　十日町・津南地域の表層地質
［卜部・渡辺2013］

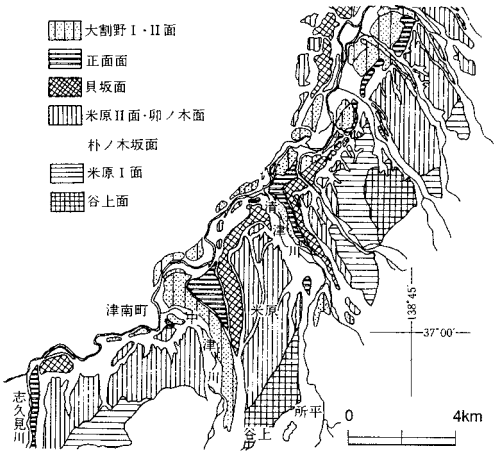
路の固定化、魚沼丘陵の隆起、魚野川のある低地帯の形成が顕著になったとされる。これに合わせて信濃川流域では、川による段丘形成が開始され、魚沼層の隆起活動に伴う断層の活動が顕著となる。この活動で褶曲構造を形成していく中で、十日町市・津南町の断層帯が形成されたとされる［卜部・渡辺2013］。褶曲構造・断層の発達により、信濃川は現在の位置に固定化され、この地域は左岸の東頸城丘陵と、右岸の魚沼丘陵に二分された。信濃川は向斜軸の谷の部分に沿って流れ、津南段丘は地層の傾斜が緩い右岸側に形成された。さらに志久見川・中津川・清津川が南から注ぎ込み、日本最大級の河岸段丘群を形成した。

津南段丘群は、第４・５図のように９～12面が確認されている。段丘は信濃川右岸の清津川と中津川の間が最も発達し、段丘群配置が標識的であることから、この区域の集落名が冠されている［津南町史編さん委員会1985］。上位から谷上面（標高450～600m）、米原面（標高340～520m）、卯ノ木面（標高300～350m）、朴ノ木坂面（標高250～400m）、貝坂面（標高230～380m）、正面面（標高210～370m）は更新世の中期から後期、大割野Ⅰ面（標高210～400m）、大割野Ⅱ面（標高200～260m）は完新世に形成した段丘である。なお、近年では、米原面をⅠ・Ⅱ、朴ノ木坂面をⅠ・Ⅱに細分し、貝坂面と正面面の間に道尻手面、正面面と大割野Ⅰ面の間に本ノ木面が設ける12面区分が採用されている。

本遺跡群を構成する本ノ木遺跡・田沢遺跡・壬遺跡は、信濃川と清津川の合流点付近の低位段丘上に立地する。清津川を挟み左岸に本ノ木遺跡、右岸に田沢遺跡・壬遺跡が立地する。本ノ木遺跡は本ノ木面に立地し、標高は上位段丘面で215m、下位段丘面で208m、田沢遺跡・壬遺跡は正面面に立地し、標高208mである。



第４図　津南地域の段丘模式断面図
［信濃川段丘グループ1968］

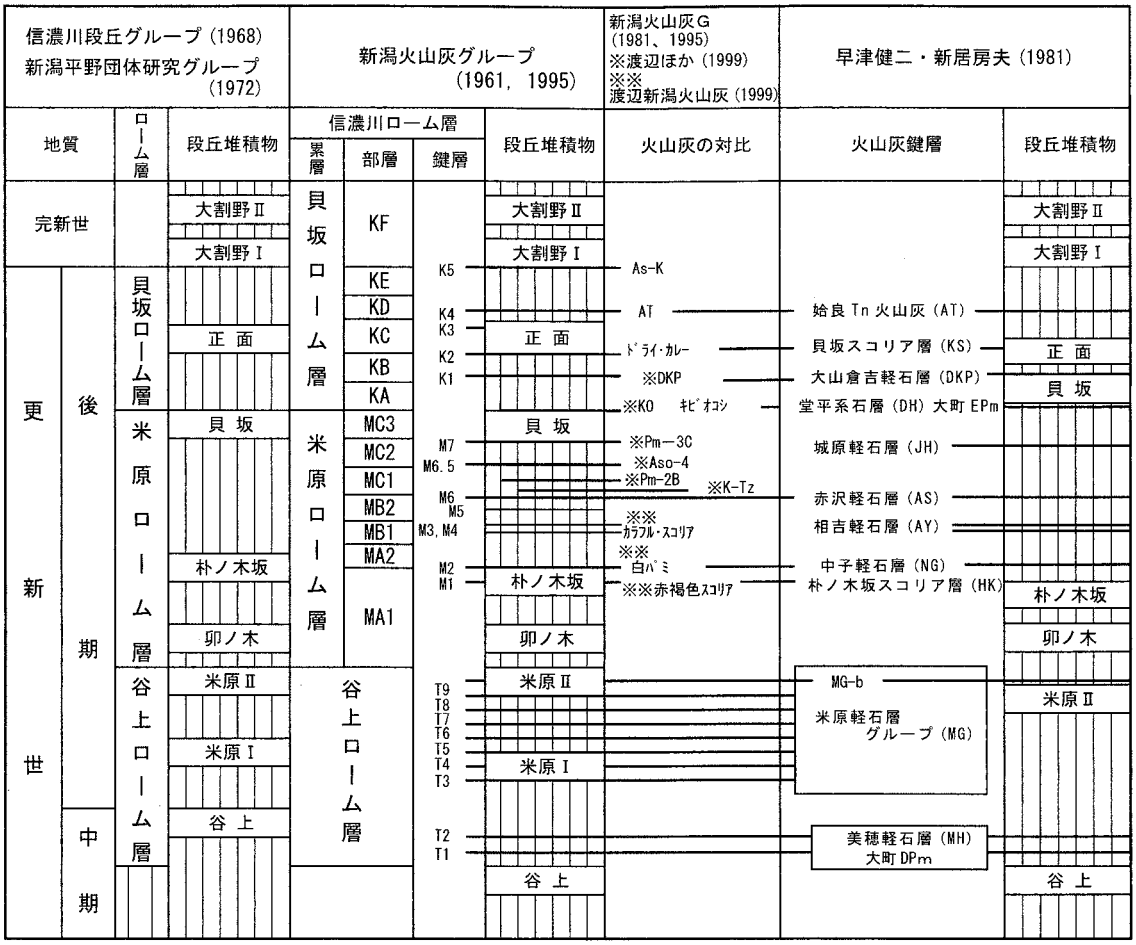


第５図　信濃川流域の段丘面分布図
［信濃川段丘グループ1968］

C　津南段丘とローム層

信濃川段丘グループ［1968］は、津南地域の段丘とローム層の関係を最初にまとめて以来、相互の関係を明らかにしてきた。魚沼層群の上に堆積する風成ロームは、上位から谷上ローム層、米原ローム層、貝坂ローム層に大別されている。これらのローム層の給源火山は、谷上ローム層は下半部が飯士火山（南魚沼市）、上半部が飯綱火山（長野県長野市・信濃町・飯綱町）または黒姫火山（長野県信濃町）、米原ローム層は飯綱火山・黒姫火山・妙高火山（妙高市）、貝坂ローム層は黒姫火山・妙高火山と推定されている［新潟火山灰グループ1981］。これらのローム層には、広域テフラが介在する。

第６図は、ローム層と段丘堆積物の層序比較である。これによれば20層以上の広域テフラが確認されている。主な指標テフラは、約4.7万年前の大山倉吉軽石（DKP）、約2.5万年前の姶良丹沢火山灰（AT）、約1.3～1.4万年前の浅間草津火山灰（As－K）がある（いずれも未較正年代値）。DKPは谷上面から貝坂面まで、ATとAs－Kは正面面まで堆積している［渡辺2000］。また、テフラの堆積年代及びローム層の層厚から推定される段丘の形成年代は、谷上面は約40万年前、米原Ⅰ面は14～30万年前、米原Ⅱ面・卯ノ木面は15～16万年前、朴ノ木坂面は13～14万年前、貝坂面は約10～５万年前、正面面は約３万年前、大割野Ⅰ・Ⅱ面が12,000年前である［渡辺2000］。



第６図　津南段丘群の地質区分と主な指標テフラ　［渡辺2000］

D　石材環境

当地域における縄文時代草創期の石器には、凝灰岩・珪質頁岩・頁岩・黒色頁岩・砂岩・黒曜石・チャート・無斑晶ガラス質安山岩などが利用される。特に在地石材である凝灰岩・無斑晶ガラス質安山岩・頁岩・黒色頁岩が多用されるほか、遠隔地石材である珪質頁岩・黒曜石・チャートも搬入される。

在地石材は、魚沼丘陵の基盤層を構成する約2,000万年前以降に堆積した結束層（緑色火砕岩類・堆積岩類）、上野層（硬質黒色泥岩・凝灰岩）、約1,000万年～300万年前にやや深い海に堆積した大沢層（黒色泥

岩・火山岩類)、葎沢層（砂岩泥岩互層・火山岩類)、西田尻層（泥岩層・砂岩泥岩互層・凝灰岩層)、約300万年～80万年前に浅い海や陸に堆積した灰爪層（砂層・シルト層)、魚沼層（砂層・シルト層・礫層・火山灰層・亜炭層)、約50万年～30万年前に噴火した苗場火山群に求めることができ［卜部・渡辺2013]、この地域を流れる信濃川、支流の志久見川・中津川・清津川で良質な頁岩や無斑晶ガラス質安山岩を採集できる（第２・３図)。

佐藤信之［2018］によれば、志久見川流域には毛無山由来の無斑晶ガラス質安山岩が分布する。無斑晶ガラス質安山岩は長野県栄村の千曲川沿岸にも産地があり、中津川には多孔質安山岩やデイサイトなどが分布する。清津川では、上流域で上野層や大沢層に黒色や灰色の頁岩が分布し、特に芝倉沢には白色の凝灰岩中に黒色の頁岩が狭在し、珪質化しているものがある。また、魚沼層群中にも無斑晶ガラス質安山岩や黒色頁岩が含まれる。これらのほかに、魚沼市破間川流域の鉄石英や碧玉、糸魚川市姫川流域の蛇紋岩類、長野県和田峠・星ヶ塔などの黒曜石、犀川流域のチャート、須坂地域のドレライトなどが、本遺跡群に搬入されている。

3　歴史的環境

A　草創期遺跡の分布

（1）遺跡分布の地域区分

十日町市中里地域・津南町の草創期遺跡群は、第７図・第１表のとおり46を数え、全国有数の集中地域である。小熊博史・立木宏明［1994・2001］によれば、新潟県内には草創期の遺跡は143か所あるが、このうち52か所（全体の35.6％、津南町38、十日町市中里地域14）が信濃川上流域に分布する（第46図)。佐藤雅一ほか［2018］では、その分布を大きくＡエリアとＢエリアに分けている（第７図)。

Ａエリアは、信濃川と清津川の合流点付近を中心とする地域で、37遺跡（80％）が確認されている。Ａエリアは３つの小範囲に分けられる。Ａ１エリアは４遺跡で、隆起線文土器とそれに伴う尖頭器石器群が出土した久保寺南遺跡（11)、尖頭器の製作遺跡である貝野沢田遺跡（８）などが分布する。Ａ２エリアは信濃川と清津川の合流点付近に分布する範囲で、20遺跡を数える。縄文時代開始期の研究史上著名な本ノ木遺跡（24)・中林遺跡（３)・田沢遺跡（１)、早期押型文土器の標式遺跡である卯ノ木遺跡（25)、類例の少ない円孔文土器をはじめ多様な草創期の土器群が出土した壬遺跡（２）などが分布する。本書は、このエリアに広がる遺跡群の総括報告書である。Ａ３エリアでは10遺跡を数える。細石刃石器群と大型尖頭器石器群が出土した正面中島遺跡（29)、室谷下層式土器が出土した堰下遺跡（34）などがある。このほかＡエリアには、押圧縄文土器が出土した中田Ｂ遺跡（14)、爪形文土器が出土した中田Ｄ遺跡（16)、局部磨製石斧の出土した原水無遺跡（14）がある。

Ｂエリアは長野県境である信濃川と志久見川の合流点付近に位置する地域で、８遺跡が確認される。高位段丘上（米原Ⅱ面）のＢ１エリアと、志久見川沿いに広がる中位段丘上（正面面）のＢ２エリアに細分される。

第7図　草創期の遺跡分布　［笠井・石原ほか2018、佐藤ほか2018］をもとに作成

（2）段丘面ごとの分布

津南段丘は現在、12段以上に細分されている［信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ2002］が、ここでは従来から認識されている10段丘で記述する。第２表のように草創期遺跡が立地する段丘を見ると、Ａエリアでは上位段丘の米原Ⅱ面に１遺跡、中位段丘の朴ノ木坂面に１遺跡、貝坂面に11遺跡、正面面に13遺跡、低位段丘の本ノ木面に３遺跡、大割野Ⅰ面に８遺跡が確認される。中位から低位段丘に立地する傾向にあるといえる。エリア別に見ると、Ａ１エリアは低位段丘の本ノ木面・大割野Ⅰ面、Ａ３エリアでは中位段丘に立地する。Ａ２エリアは、両者の中間的な傾向を示す。Ａエリアとは対照的に、Ｂエリアでは中位から高位段丘に立地する傾向が見られる。高位段丘（米原Ⅱ面）のＢ１エリアでは５遺跡、中位段丘（正面面）のＢ２エリアでは３遺跡がある。

№	遺跡名	立地	段丘名称	標高（m）	細石刃	縄文草創期					縄文早期				石器
						土器無	無文	隆起線文	爪形文	多縄文	撚糸文	押型文	沈線文	条痕文絡条体	
1	田沢	信濃川、清津川合流点右岸の低位段丘上	正面	208				○	○	○		○		○	有舌尖頭器･尖頭器･半月形石器･石斧･掻器･石錐・石核など
2	壬	信濃川、清津川合流点右岸の低位段丘上	正面	207			○	○	○	○		○	○	○	石斧･石鏃･有舌尖頭器･尖頭器･掻器･削器･石鏃・矢柄研磨器など
3	中林	信濃川、清津川合流点右岸の低位段丘上	正面	211		○						○			有舌尖頭器･有肩尖頭器･尖頭器･掻器･彫器･礫器・石斧
4	一里塚	信濃川、清津川合流点右岸の低位段丘上	正面	212				○		○	○	○		○	有舌尖頭器・尖頭器・削器
5	干溝	信濃川右岸の段丘上、信濃川との比高約40m	正面	206	○			○			○	○		○	尖頭器・石斧
6	小丸山	信濃川右岸の段丘上	大割野Ⅰ	194				○	○	○	○	○	○	○	尖頭器・掻器
7	おざか清水	信濃川右岸の段丘上	大割野Ⅰ	197				○	○	○	○	○	○	○	尖頭器・石斧・船底状石核
8	貝野沢田	信濃川左岸の段丘上	本ノ木	187		○									
9	土橋	信濃川左岸の段丘上	本ノ木	188		○							○	○	尖頭器
10	久保寺	信濃川左岸の段丘上	大割野Ⅰ	177		○									尖頭器・石斧
11	久保寺南	信濃川左岸の段丘上の自然堤防	大割野Ⅰ	176				○							石槍・石斧・掻器・削器・石核・有溝砥石など
12	古城	信濃川右岸の段丘上	正面	220		○									局部磨製石斧
13	向田	信濃川右岸の段丘上	正面	225		○									半月形石器
14	原水無	信濃川右岸、七川支流の水無川最上流部の右岸	米原Ⅱ	450		○									石斧
15	中田Ｂ	清津川、釜川合流点付近、左岸の段丘上	正面	281						○					
16	中田Ｄ	清津川、釜川合流点付近、左岸の段丘上	正面	294					○						
17	家ノ上	清津川左岸の段丘上	正面	234				○							尖頭器
18	駒返り	清津川左岸の段丘上	正面	230		○		○	○					○	尖頭器・掻器・削器
19	屋敷田Ⅱ	清津川左岸の段丘上	正面	230										○	有舌尖頭器
20	屋敷田Ⅲ	清津川左岸の段丘上	大割野Ⅰ	213			○	○				○		○	有舌尖頭器･半月形石器･削器･石錐・石匙・石斧・両極石器など
21	屋敷田Ⅰ	清津川左岸の段丘上	貝坂	230								○		○	有舌尖頭器
22	堂屋敷	信濃川右岸の段丘上	貝坂	232		○				○		○		○	有舌尖頭器・尖頭器
23	別当Ａ	信濃川右岸、七川支流の水無川最上流部の右岸	正面	239		○							○	○	尖頭器・掻器
24	本ノ木	信濃川右岸の低位段丘上。清津川との合流点近く	本ノ木	214					○	○		○		○	尖頭器・ノッチ形石器・不定形石器
25	卯ノ木	信濃川右岸の段丘上	大割野Ⅰ	210					○	○		○			尖頭器・不定形石器など
26	卯ノ木南	信濃川右岸の段丘上。卯ノ木遺跡に隣接する	大割野Ⅰ	210					○	○		○	○		尖頭器・有舌尖頭器・石鏃・石斧・削器など
27	辰ノ口	信濃川左岸の段丘上	大割野Ⅰ	210		○									尖頭器
28	泥坂	信濃川と釜堀川の合流点付近。段丘先端部	貝坂	257					○	○				○	
29	正面中島	信濃川右岸の段丘上	正面	250	○	○					○	○		○	尖頭器・掻器・削器
30	正面ヶ原Ｄ	信濃川右岸の段丘上	正面	250					○			○	○	○	
31	貝坂桐ノ木平Ｄ	信濃川・中津川右岸の段丘上	貝坂	272				○							
32	貝坂桐ノ木平Ｂ	信濃川・中津川右岸の段丘上	貝坂	282		○						○		○	掻器・彫器・細石刃様石器・不定形石器
33	貝坂桐ノ木平Ｃ	信濃川・中津川右岸の段丘上	貝坂	284		○				○		○		○	
34	堰下	信濃川・中津川右岸の段丘上	貝坂	275		○				○					石斧
35	寺田上Ａ	信濃川・中津川右岸の段丘上の先端部	貝坂	270		○				○	○	○	○	○	尖頭器・掻器・削器・彫器・石斧
36	堂尻	信濃川・中津川右岸の段丘上	正面	260				○				○			
37	小坂平	信濃川右岸の段丘上	朴ノ木坂	338		○						○	○		有舌尖頭器
38	大原北Ⅱ	信濃川・中津川右岸の段丘上の縁辺	米原Ⅱ	419		○									有舌尖頭器
39	城原屋敷添	信濃川・志久見川右岸の段丘上	米原Ⅱ	460		○									不定形石器
40	上原Ｅ	信濃川・志久見川右岸の段丘上	米原Ⅱ	461	○			○							
41	胴抜原Ａ	信濃川・志久見川右岸の段丘上	米原Ⅱ	431					○			○	○	○	有舌尖頭器
42	胴抜原Ｂ	信濃川・志久見川右岸の段丘上	米原Ⅱ	435				○							尖頭器・有舌尖頭器・石斧
43	六町尻ノ池東Ａ	信濃川・志久見川右岸の段丘上	米原Ⅱ	447		○									有舌尖頭器
44	しぐね	信濃川・志久見川右岸の段丘上	正面	290		○									木葉形尖頭器・掻器
45	宮ノ脇	信濃川・志久見川右岸の段丘上	正面	300		○									有舌尖頭器・尖頭器
46	北林Ｃ	信濃川・志久見川右岸の段丘上	正面	316				○						○	石斧・両面加工尖頭器・掻器・削器・楔形石器

第１表　信濃川上流域の草創期遺跡　［笠井・石原ほか2018］に加筆

（3）時期ごとの分布

旧石器時代終末から縄文時代草創期の遺跡と段丘の関係を第３表に示した。この時期の資料は、細石刃石器群、隆起線文土器群以前の大型尖頭器石器群・無文土器群、隆起線文系土器群、爪形文系土器群、多縄文系土器群に分類でき、おおむねこの変遷で捉えられる。

細石刃石器群は、高位段丘の米原Ⅱ面に１遺跡、中位段丘は正面面の３遺跡など、合計４遺跡がある。大型尖頭器石器群及び無文土器群は、高位段丘に４遺跡、中位段丘に15遺跡、低位段丘の本ノ木面に３遺跡、大割野Ⅰ面に２遺跡がある。低位段丘の５遺跡は、信濃川が離水した頃に低位段丘面へ進出したこと示す。草創期後半～終末の多縄文系土器群は、中位段丘の貝坂面で３遺跡、正面面で３遺跡、低位段丘の大割野Ⅰ面で３遺跡があり、低位段丘に立地する傾向が強い。

段丘＼エリア	Ａ１	Ａ２	Ａ３	Ａ	Ｂ１	Ｂ２	その他	合計
谷　上　面								
米 原 Ⅰ 面								
米 原 Ⅱ 面				1	5		1	7
卯 ノ 木 面								
朴ノ木坂面			1					1
貝　坂　面		5	6					11
正　面　面		8	3	2		3		16
本 ノ 木 面	2	1						3
大割野Ⅰ面	2	6						8
大割野Ⅱ面								
合計	4	20	10	3	5	3	1	46

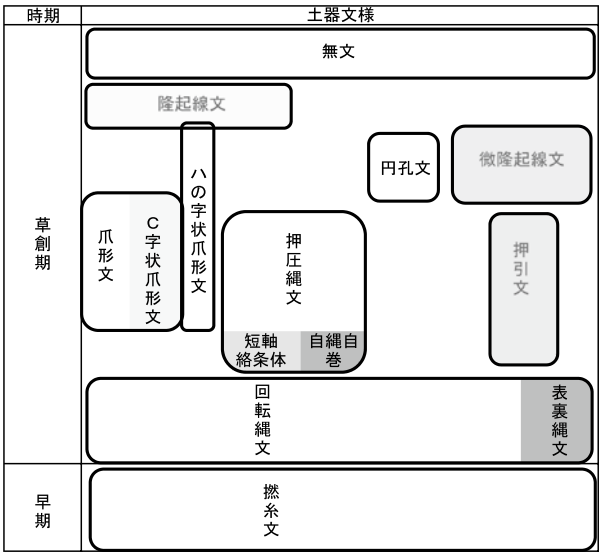
第２表　エリア別の遺跡分布

段丘＼時期	細石刃	隆起線文以前	隆起線文	爪形文	多縄文	合計
谷　上　面						
米 原 Ⅰ 面						
米 原 Ⅱ 面	1	4	2	1		8
卯 ノ 木 面						
朴ノ木坂面		1				1
貝　坂　面		6	3	2	5	16
正　面　面	3	8	6	3	3	23
本 ノ 木 面		3				3
大割野Ⅰ面		2	4	5	5	16
大割野Ⅱ面						
合計	4	24	15	11	13	67

第３表　時期別の遺跡分布

Ｂ　周辺の遺跡

当地域では、研究史の早い段階から旧石器時代や縄文時代草創期の研究が盛んに行われており、段丘や広域テフラとの関係等も踏まえ、編年観が検討されてきた。佐藤雅一［2001］は、草創期をⅠ期：隆起線文土器以前の当地域における土器出現期の段階、Ⅱ期:隆起線文土器の隆盛時期、Ⅲ期:押圧縄文土器群による多様な文様と文様構成が安定する段階、Ⅳ期：縄文原体の多様化と回転縄文の安定普遍化した段階に区分した。爪形文土器の編年的位置は不確定であるが、その施文技術や文様構成から隆起線文土器群の系譜上で捉え、時期的にはⅡ



第８図　草創期の土器文様の変遷
［佐藤・渋谷2014］をもとに作成

期終末段階からⅢ期前半段階まで存続する可能性を想定している。また、草創期から早期前葉における土器文様の変遷概念図（第８図）が示されている［佐藤･渋谷2014］。これらの編年観をもとに、細石刃石器群段階から縄文時代早期の遺跡の概要を記述していく。

（１）細石刃石器群

13,000～14,000年前（未較正年代値）の浅間草津火山灰（As-K）の前後から出土する石器群である。一里塚遺跡（４）、干溝遺跡（５）、小坂平遺跡（37）などがあり、正面中島遺跡、上原Ｅ遺跡（40）でまとまった資料がある。

上原Ｅ遺跡は高位段丘の米原Ⅱ面に立地し、２つの遺物集中範囲から2,500点を超える石器が出土している。細石刃核は白滝型、ホロカ型など北方系細石刃石器群の様相を示す。また、白滝型細石刃核に特徴的な打面の擦痕はホロカ型にも認められる。２つの種類の細石刃核は、同一集中部、同一層準から出土しており、同一石器群として捉えられる可能性が高い。石材は、黒曜石60%、頁岩31%で、黒曜石の使用頻度が高い。黒曜石の産地分析では、秋田県男鹿産と信州産が同定されており、集団が南下・北上した経路上に位置付けられている［佐藤2003］。

正面中島遺跡は正面面に立地し、８か所の遺物集中範囲が検出され、３か所の北方系細石刃石器群、４か所の大型尖頭器石器群から構成される。両者で出土層位・レベルに差は見られないが、平面分布は重ならず、石器の接合関係もない。石材選択が異なることも踏まえ、細石刃石器群と大型尖頭器石器群に分離される可能性が示されている［佐藤・佐野2002］。

（２）草創期Ⅰ期（隆起線文土器以前／大型尖頭器石器群・無文土器段階）

大型尖頭器石器群は、細石刃石器群の新しい段階に出現し、土器出現期と関係すると考えられる。大型尖頭器や局部磨製石斧が伴うことが特徴的で、「神子柴･長者久保石器群」などと呼ばれる。第１表では24遺跡を数えるが、尖頭器や局部磨製石斧の単独出土が多い。

この段階の遺跡は、本ノ木遺跡・中林遺跡・古城遺跡（12）・向田遺跡（13）・原水無遺跡（14）・堂屋敷遺跡（22）・別当Ａ遺跡（23）・辰ノ口遺跡（27）・貝坂桐ノ木平Ｂ遺跡（32）・貝坂桐ノ木平Ｃ遺跡（33）・寺田上Ａ遺跡（35）・小坂平遺跡・大原北Ⅱ遺跡・城原屋敷添遺跡（39）・しぐね遺跡（44）などがある。このうち、本ノ木遺跡・中林遺跡・貝坂桐ノ木平Ｂ遺跡・正面中島遺跡・寺田上Ａ遺跡で資料的なまとまりが見られる。本ノ木遺跡・中林遺跡の詳細は、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ章を参照されたい。

正面中島遺跡では、As-K層の前後で大型尖頭器石器群が検出された［佐藤・佐野2002］。貝坂桐ノ木平Ｂ遺跡は貝坂面に立地し、先刃掻器、彫器などからなる小規模な石器群である。大型の先刃掻器が旧石器時代から縄文時代への過渡期の指標石器であること、小坂型彫器は旧石器時代から縄文時代草創期初頭まで存続すること、細石刃技術と関連する石核があることから、土器出現期に位置付けられている［佐藤・石坂2002］。寺田上Ａ遺跡は信濃川と中津川の合流点右岸の貝坂面に立地する。尖頭器と掻器を主体とする石器群であるが、石刃技術は存在せず、掻器には幅広の不定形な剝片が用いられる［佐藤・岡ほか1998］。

この段階に位置付けられる隆起線文土器段階以前の無文土器は、壬遺跡下層で確認されており、屋敷田Ⅲ遺跡（20）でもその類例が指摘されている。詳細は、第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ章を参照されたい。

（３）草創期Ⅱ期（隆起線土器段階）

この地域では最も安定的に認められ、15遺跡で確認されている。田沢遺跡・壬遺跡・屋敷田Ⅲ遺跡・久保寺南遺跡・干溝遺跡・北林Ｃ遺跡（46）などで資料が充実する。田沢遺跡・壬遺跡・屋敷田Ⅲ遺跡につ

いては、第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ章を参照されたい。

久保寺南遺跡は、信濃川左岸の大割野Ⅰ面に立地する。この段丘面ではAs-Kが堆積しておらず、その降灰年代より新しいとされる。21個体の隆起線文土器には、胴部にＴ字状のモチーフを持つ隆起線文土器の口端部と胴部最大径に小波状の加飾隆起線文などが共伴している。これらの土器群とともに、尖頭器の製作に関連する資料が多数出土した（第48図）［佐藤・笠井2001］。

干溝遺跡は信濃川右岸の正面面に立地する。隆起線文土器の集中区からは、４個体の隆起線文土器が出土し、このうち１個体は復元個体である。器形は、口唇端部が若干へこんで外反し、胴部下位に最大幅を持ち、底部は丸底と推定される。文様は口縁部直下から17条前後の横位の隆起線文（施文幅約７mm均等）、胴部最大径の下位は１～３条を単位とした鋸歯状の幾何学文様となる（第47図）。周辺の遺跡や小瀬ヶ沢洞窟との比較検討により、細い隆起線による多条化からなる特徴は、隆起線系土器群の新しい段階に位置付けられている［佐藤・石坂ほか1994、佐藤1999］。

北林Ｃ遺跡は志久見川右岸の正面面に立地する。微隆起線文土器に分類される土器55点と、これに伴う局部磨製石斧、両面加工尖頭器、掻器などが出土した。干溝遺跡と同じく隆起線文土器群の最も新しい４期に位置付けられている［佐藤ほか2011］。

（４）草創期Ⅲ期（押圧縄文土器・爪形文土器・押引文土器段階）

爪形文土器は、押圧縄文との併用が多く見られる。佐藤雅一［2001］は、編年的位置を不確定としながらも、その施文技術や文様構成から隆起線文土器群の系譜上で捉え、Ⅱ期終末段階からⅢ期前半段階までの存続を想定している。壬遺跡・小丸山遺跡（６）・おざか清水遺跡（７）・中田Ｄ遺跡（16）・駒返り遺跡（18）・本ノ木遺跡・卯ノ木遺跡・正面ヶ原Ｄ遺跡（30）・胴抜原Ａ遺跡（41）などで認められる。

押圧縄文土器は、新潟県内で安定的に広域に分布する。当地域では、卯ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡・本ノ木遺跡・壬遺跡・小丸山遺跡などで認められる。中でも、卯ノ木南遺跡の資料（第49図）は、標識的な資料であり、「卯ノ木南式」と呼ばれている。本ノ木遺跡の資料は、「本ノ木論争」において、尖頭器石器群との共伴関係が議論された資料である。

押引文土器は、阿賀町小瀬ヶ沢洞窟遺跡の櫛目文土器に類似し、棒状工具や篦状工具を引くことにより生じる沈線文である［佐藤・渋谷2014］。おざか清水遺跡で注目され、卯ノ木南遺跡の押引文、小瀬ヶ沢洞窟遺跡の櫛目文土器が抽出されている。それらの観察から同一土器群と認識し、押引文土器と巻簾状文の二系譜があるとされる。編年的位置は草創期後半押圧縄文土器段階の山形県一ノ沢洞窟に対比しており［佐藤・石坂ほか1994］、当地域ではおざか清水遺跡のほか、卯ノ木南遺跡・寺田上Ａ遺跡などで認められる。

次に、主な遺跡を紹介する。卯ノ木遺跡は信濃川右岸の大割野Ⅰ面に立地する。同じ段丘上で道路を挟んで南西に卯ノ木南遺跡、東の一段上位に本ノ木遺跡がある。1956年の発掘調査では押圧縄文土器を中心に77点が出土［中村1963］し、1997年の発掘調査では卯ノ木第１群土器としたハの字爪形文土器（第47図）、ハの字爪形文＋押圧縄文土器、押圧縄文土器が出土している。卯ノ木第１群土器と小丸山第一群土器の比較では、ハの字爪形文の欠落から卯ノ木第１群土器が古く、小丸山遺跡第一群土器が新しいとされている［佐藤ほか1999］。卯ノ木南遺跡は、３次にわたる調査で卯ノ木遺跡と同じように押圧縄文土器群が出土しており、当地域における標式資料となっている。詳細は、第Ⅲ章を参照されたい。

小丸山遺跡は、信濃川と清津川の合流点から約２km下流の信濃川右岸の大割野Ⅰ面に立地する。押圧縄文土器、押引文土器のほか、少数の爪形文土器、絡条体圧痕文土器などの草創期土器群が出土している。

押圧縄文土器と押引文土器の垂直分布から、押引文土器の上層に押圧縄文土器が分布する傾向を捉えている［佐藤ほか1994］。絡条体圧痕文は原体の種類で、自縄自巻と短軸巻き絡条体に分類され、押圧縄文土器は縄の太いものと細いものが存在し、内面には条痕状の調整がはっきりと観察できるものと調整がないものがある［佐藤・石坂ほか1994］。

おざか清水遺跡は信濃川右岸の大割野Ⅰ面に立地し、爪形文土器・押圧縄文土器・絡条体圧痕文土器・押引文土器が出土した。草創期の遺物包含層と推定されるⅢ層（暗褐色土層）、Ⅳ層（黄褐色砂質ローム層）では、押引文土器はⅢ層からⅣ層にかけて安定的に出土し、押圧縄文土器はこれよりやや高いレベルで出土した。押引文土器は内面調整の有無から２個体と推定されるが、いずれも口縁は外反し、端部断面は指頭状を呈する。押引文は横走密接多条構成をとり、幅約2.5mmの棒状工具を鈍角で浅く器面に押し当てて一定の幅で引く手法である［佐藤ほか1994］。

寺田上Ａ遺跡は、中津川右岸の貝坂面に立地する。土器は、①口唇部に面を持つ平縁で、筒状の器形を呈する。②口縁直下に密接二条一帯の押引横帯文が巡る。③沈線（棒状工具）による斜格子目文を器面上半に配する。④土器胎土に植物繊維を混入するなどの特徴があり、押圧縄文土器段階に対比されている。石器群は、尖頭器と掻器を主体とする［佐藤・岡ほか1998］。

（５）草創期Ⅳ期（室谷下層式段階）

室谷洞窟下層の室谷第Ⅰ群土器とされる土器群であり、２段階に大別されている。古段階の文様は押圧縄文を特徴とするものである。新段階は押圧縄文の手法は乏しく、口唇部と段の部分に列点状に加えるだけで回転縄文が主な文様となり、羽状や菱形状のモチーフが発達するものである［谷口1996、小熊2006］。

当地域では、信濃川と中津川の合流点右岸の貝坂面に立地する堰下遺跡で確認されるのみである。出土した２点は、いずれも器形の屈曲する部分に列点を横位に施している。列点は米粒を縦に置いたような形状を示し、わずかに右に傾いている［佐藤・石坂2002］。

（６）早期

早期の遺跡は、撚糸文土器群段階でやや少なくなるものの、多くの遺跡が存在する。草創期の遺跡群に引き続き、県内で最も分布が集中する地域である。撚糸文土器は、干溝遺跡・おざか清水遺跡などの６遺跡で出土しており、干溝遺跡では資料が充実する［佐藤･石坂ほか1994］。押型文土器は多くの遺跡が見られ、21遺跡を数える。卯ノ木遺跡や干溝遺跡に資料の充実が見られる。卯ノ木遺跡は、1956年の発掘調査で約700点の押型文土器が出土し、「卯ノ木式」の標式遺跡となっている。楕円文、格子目文、山形文などがあり、推定復元された９個体は砲弾型尖底深鉢の器形を呈する［中村1963］。

沈線文系土器群はおざか清水遺跡、土橋遺跡（９）・別当Ａ遺跡・寺田上Ａ遺跡など10遺跡を数えるが、第７図・第１表に掲載していないものも含めるとさらに多くなる。いずれも破片資料で、貝殻沈線文系土器が主体である。条痕文系土器群、絡条体圧痕文土器は、干溝遺跡・土橋遺跡・堂尻遺跡（36）・屋敷田Ⅲ遺跡・貝坂桐ノ木平Ｂ・Ｃ遺跡など、22遺跡を数える。

第Ⅲ章　　調査・研究史

1　芹沢長介・山内清男による発掘調査

A　本ノ木遺跡の発見

1956（昭和31）年に中村孝三郎が卯ノ木遺跡の発掘調査を行った際、津南町在住の石澤寅二・広田永徳らにより１段上位の段丘面で尖頭器が採集され、本ノ木遺跡が認識された。そして、石澤の採集資料に当時最古と推定されていた押圧縄文土器が含まれていることが樋口昇一により確認され、山内清男に伝えられた。その後、石澤は、山内の共同研究者であった芹沢長介と手紙のやり取りを行った。芹沢の助言を受けた石澤は、1956（昭和31）年11月３日・９日に本ノ木遺跡の試掘調査を行い、「ポイント・石片を含む良好な文化層が、ローム層中に存在するらしいこと」を把握した。なお、石澤の調査では、今日の調査と比べても遜色ない記録がとられている［小林・岡本・佐藤2016］。

B　本ノ木遺跡の第１次調査

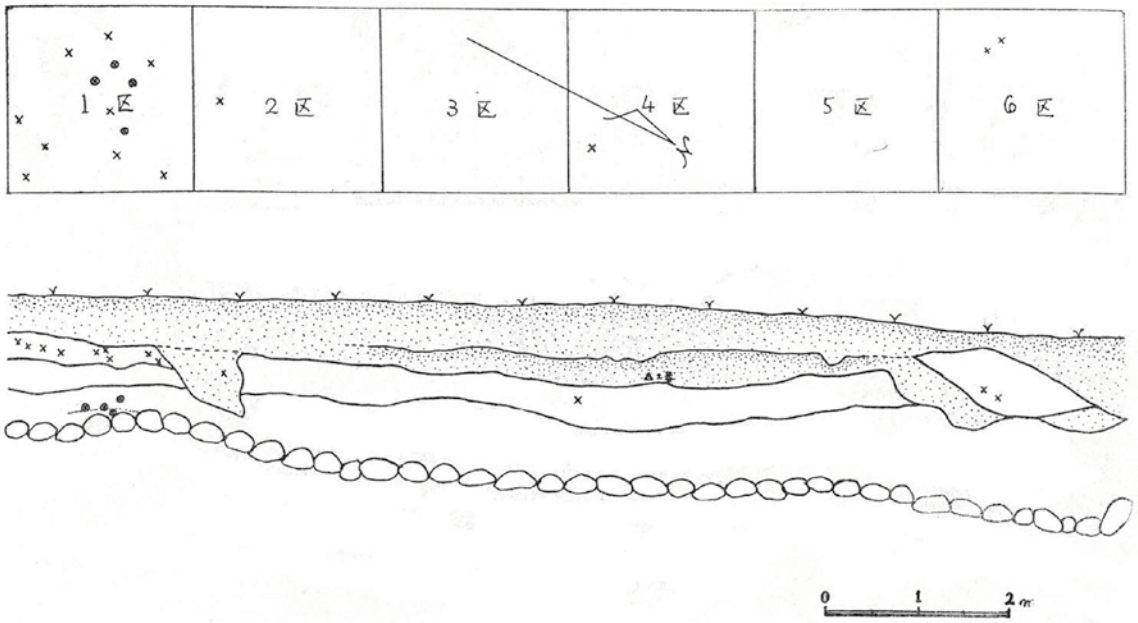
石澤の試掘調査により、良好な文化層がローム層中に存在すると察した芹沢は、1956（昭和31）年12月５日～７日に発掘調査を実施した。積雪をかき分けての調査となり、「冬の陣」と呼ばれる（第９図）。調査費は山内の科学研究費が充てられたが、山内自身は京都大学での集中講義のため参加していない。

芹沢と中山淳子により「予報」として公表された調査成果［芹沢・中山1957］によれば、尖頭器210点・ノッチ形石器９点･不定形石器28点と多量の剥片が出土した（第31図）。そして、尖頭器製作時の調整剥片

第９図　本ノ木遺跡　第１次調査の様子

が多数出土しており、器種組成が単純であることから「石器製作場か特殊な居住地」とした。

これらの石器群とともに表土下層の黒色土から押圧縄文土器１個体が出土したが、土器とともに出土した尖頭器を「黒色土に持ち上げられたもの」とし、石器群と土器が異なる年代であるとした。すなわち、尖頭器石器群と土器が同一層序から出土したのは二次堆積の結果とし、両者は共伴しないとした。そして、本来の出土層位を基盤層である礫層直上とし、ここを生活面と捉えた（第10図）。礫層の形成後、ローム層が堆積しはじめた頃の「上部洪積世の末期」に遺跡が形成されたとし[芹沢1957b]、尖頭器石器群を無土器時代の所産とした。



第10図　本ノ木遺跡　第1次調査の断面図

編年的位置付けについては、尖頭器石器群を長野県馬場平遺跡・中ッ原Ｂ遺跡との共通性を指摘したうえで「細石器」以前に、押圧縄文土器を縄文早期の稲荷台式に併行させた（第11図）［芹沢1957a］。一方、「土器に伴う石器の有無をも検討すべき」としていることから、押圧縄文土器に伴う石器群の実態が明らかでなかったことがわかる。

		関東を中心とした編年	海南町
古墳文化			
弥生文化			
縄文文化	晩期	杉田 鳥台 安行Ⅲ（a）	? 小茶平B、盆尻B、
	後期	安行Ⅱ 安行Ⅰ 曽谷 加曽利B（Ⅱ、Ⅰ） 堀之内（Ⅱ、Ⅰ） 称名寺	(中) 盆尻K
	中期 加曽利E（Ⅳ、Ⅲ） 諸磯・阿玉台 玉鋼台 勝坂 藤内（a、b） 隆帯浜山 花積	盆尻C 反口 上野 亀岡 卯ノ木平 神山	
	草創期	茅山 子母口 田戸Ⅱ 田戸Ⅰ 三戸 平坂 稲荷台 夏島 井草・大丸	堤ノ脇 小茶平B 樋田 卯ノ木 （本ノ木BⅠ） ?
無土器文化		細石器 ポイント 切出形 ナイフブレイド ブレイド 礫核	? 宮/原・本ノ木 ? 福山・小茶平 (中) ?

第11図　本ノ木遺跡
第1次調査後の芹沢の編年

C　本ノ木遺跡の第２次調査

山内は、1957（昭和32）年８月20日～９月３日に、芹沢・中山による第１次調査成果の事実確認を行うために発掘調査を実施した（第13図）。芹沢は、この調査に参加していない。

調査成果は、山内の論文［山内1960、山内・佐藤1962］と新聞記事等で公表された。第２次調査では、トレンチを第１次調査と一部重複するように設定し、ほぼ同様の層序と遺物が確認された。山内は、尖頭器の未成品が多く、土器や石鏃といった日用品が少ないことから、「石器製作址」と位置付けた。そして、遺物は表土の下部に多く、黄色土（芹沢のいうローム層）中に潜り込むこともあるとした。本来の遺物包含層は「黄色土上部及び表土下部」で、ここに河原から持ってきた平らな自然石がまとまっており（第12図）、木炭の細かい粉末が散在すること等から、黄色土上部から黒色表土下部を生活面と考えた。一方、芹沢が礫層直上から出土したとする遺物は、水田耕作時にあけられた穴に少量落ち込んだものとし、「段丘の礫層との関連は全くない。」とした。芹沢説を「人工物が再堆積した証拠は無い」と否定し、押圧縄文土器と石器が共伴すると評価した上で「本の木式土器時代の石器製作所」と結論付けた。

第12図　本ノ木遺跡　第２次調査で検出された配石遺構

また、本ノ木遺跡の資料のうち、細長い尖頭器が折れて出土することに着目した。中でも接合すると「全長30cm余りになる」であろう尖頭器（第31図13）について、「こんなに長い細い槍が実用になるだろうか。すぐ折れるのが関の山である。」とした。そして、木や骨の軸に差し込む植刃としての利用を想定し、「石槍は槍としてでなく、ナイフとして用いられる」可能性を示した。植刃のほか、草創期に特徴的に見られる断面三角形の鑽、矢柄研磨器等の起源を大陸に求め、これらを「渡来文物」と呼んだ［山内1960･1969、山内・佐藤1962］。山内［1932］は、本ノ木遺跡の調査以前から、土器・石鏃・磨製石斧等の新石器時代の特徴が、縄文土器の最も古い段階に大陸からもたらされたと予想していたが、ユーラシア大陸との型式学的な対比から縄文文化の起源を紀元前3,000年とし、その根拠として渡来石器を取り上げたのである。神奈川県夏島遺跡における放射性炭素年代測定（1959年）以降、長期編年の立場をとっていた芹沢との間に、埋め難い見解の相違が表出することとなった。

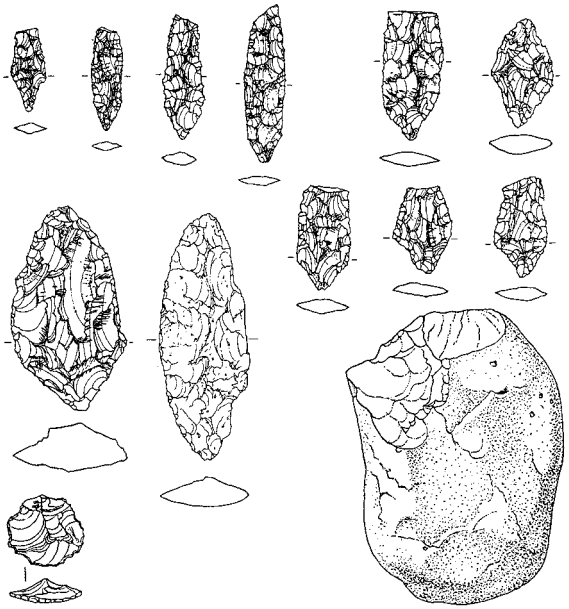
第13図　本ノ木遺跡　第2次調査の様子

D　中林遺跡の調査

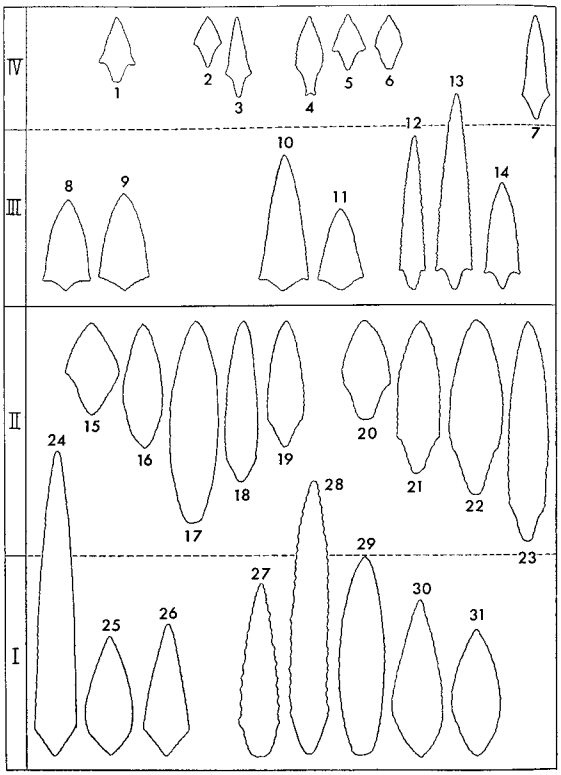
第２次調査に参加できなかった芹沢は、本ノ木遺跡の石器群の位置付けの再検討を目的とし、1965（昭和40）年９月５日～16日に中林遺跡の調査を行った。芹沢の論文［芹沢1966］で公表された調査成果によれば、有舌尖頭器・有肩尖頭器・木葉形尖頭器・掻器・彫刻刀形石器？・石核と多数の未成品・剥片等が出土し、土器は伴わなかったとされた（第14図）。そして、これらの出土状況と堆積状況は「本ノ木遺跡の状態とまったく同一であると言ってよい。」とした。

ただし、本ノ木遺跡の状況と完全には一致しているとはいえない。本ノ木遺跡では礫層直上に芹沢がいう「本来の遺物包含層」があり、その上をロームと砂の互層が覆っている。一方、中林遺跡では、礫層の直上にシルトと砂の互層があり、その上に「プライマリーな遺物包含層」がある。すなわち、芹沢の記載をそのままに捉えれば、中林遺跡の出土層位が本ノ木遺跡より上位といえる。

また、芹沢は中林遺跡の調査後に尖頭器の位置付けを大幅に変更した。本ノ木遺跡の調査直後には「細石器」以前の無土器時代に位置付けていたが、中林遺跡の報告段階では「細石器」以降の有舌尖頭器石器群に位置付けた。変更の理由を「発掘当時はまだ日本における有舌尖頭器文化が明らかにされていなかったので、本ノ木の尖頭器が有舌尖頭器のなかに含まれようとは考えていなかった」とした。この見解の変更は、1958（昭和33）年に調査された北海道立川遺跡で有舌尖頭器が発見されたことを契機に、本州各地で有舌尖頭器の発見が相次いだことによると考えられる。有舌尖頭器はそれ以前から「いくつか発見されていたのに、私たちが気づかないでいただけであった」とし、本ノ木遺跡にも有舌尖頭器が含まれることを指摘した。



第14図　中林遺跡　出土石器（S＝１：３）



有舌尖頭器の編年（Chronology of Tanged Points）
1, Sone. 2, 3, Hashidate. 4—6, Kosegasawa. 7, Ichinosawa.
8, 9, Kamikuroiwa. 10, 11, Yanagimata. 12—14, Kosegasawa.
15—19, Nakabayashi. 20—23, Hokkaido. 24—26, Naruka. 27—31, Motonoki.

第15図　中林遺跡調査後の芹沢の編年［芹沢1966］

そして、有舌尖頭器の変遷をⅠ段階～Ⅳ段階に区分し、Ⅰ段階に本ノ木遺跡、Ⅱ段階に中林遺跡、Ⅲ・Ⅳ段階に小瀬ヶ沢洞窟を位置付け、Ⅲ段階に古手の隆起線文土器が伴うとした（第15図）。この変遷においても、本ノ木遺跡の尖頭器を「有舌尖頭器が出現しはじめた時期の所産」とし、土器と石器群の共伴関係を改めて否定した。そして、尖頭器と土器の関係、有舌尖頭器と木葉形尖頭器の関係を探ることを課題とした。

また、本ノ木遺跡に関する山内説［山内1960、山内・佐藤1962］への疑問を投げかけた。本ノ木遺跡の押圧縄文土器は、室谷洞窟下層［中村・小片1964］の土器に対応するとし、ここに尖頭器は伴わず三角形の石鏃がいくつも伴出することを指摘した。そして、同じ文化層に含まれるように見えても、「層位がのちに攪乱をうけていたのではあるまいかという疑問をもつのが当然のことであろう。」とし、「問題の層が、はたして第一次的なものであるかどうか、これを発掘によって正しく認定すること」が必要とした。

E　田沢遺跡の調査

1965年の中林遺跡の調査中に、石澤寅二は田沢遺跡（当時は「中林Ｂ地点」と呼ばれる。）で１点の有舌尖頭器を採集した。その後、1968（昭和43）年には、郷土史家である島田靖久が隆起線文土器を採集した。このことを知った芹沢は、有舌尖頭器と隆起線文土器の関係を探ることを目的に、８月に資料調査を行い、10月21日～11月２日に発掘調査を行った（第16図）（第１次調査）。調査の結果、隆起線文土器や無文土器200点以上、有舌尖頭器・木葉形尖頭器・石錐・打製片刃石斧・掻器が出土した（第42図）。石器群は、中林遺跡の報告（第15図）［芹沢1966］でⅢ段階に位置付けた有舌尖頭器の一群よりも、神子柴・長者久保石器群との関連が強いと考え、この石器群に伴う「隆帯文」「細隆起線文」をともに含む隆起線文土器を「田沢式」とした［芹沢・須藤1968］。

第16図　田沢遺跡　第１次調査の様子

2　本ノ木論争

A　本ノ木論争の背景と出土層位の理解

本ノ木遺跡をめぐる芹沢と山内の見解の相違から発展した議論は、「本ノ木論争」と呼ばれることになる。二人の旧石器時代の終末から縄文時代の起源に関する歴史観の相違が、調査所見の差異として表れたといえる。芹沢自身、「縄文土器の起源、いわゆる「植刃」の真偽、細石刃文化の存否、後期旧石器および前期旧石器の認定、関東ローム層の年代等、あらゆる面にわたって根本的な見解の相違がみられ」、二人の「対立は、そのような溝の彼岸と此岸とを象徴的に表現している」［芹沢1966］とする。小林達雄［1975］

がいうように「本ノ木論争の真の根源は、単に層位的事実の解釈のみに由来するのではなく、実は石槍と土器を時期的に画然と区別する芹沢に対して両者が共伴すると考える山内の所説から出発した縄文時代草創期の文化論の対立」であり、論争の核心はここにあるといえる。そもそも、資料の蓄積が十分でない中、あらかじめ歴史観を設定したことが解釈レベルでの見解の相違を生み出したといえよう［橋本1988］。

「本ノ木論争」は、その後、多くの研究者に取り上げられた［林1973、小林1975、麻生1985、橋本1988、島立1988、白石1990、栗島1986・1991、岡本2015・2017］。林　謙作［1973］は、「山内は再堆積した尖頭器が、問題の土器と本来の共伴関係にあると誤認したのである。その原因は、山内が層序に恣意的な解釈をくわえた、あるいは層の形成過程･堆積状況に綿密な注意をはらわなかったところにある。」とし、生活面と判断する材料のひとつとした「河原から持ってきた石塊」（礫）を自然堤防の頂部から移動してきた「玉石」であるとした。一方、「河原から持ってきた石塊」（礫）について、小林達雄［1975］は「配石遺構」と評価し（第12図）、その検出状況から「事実は山内の解釈に近いのではなかろうか」とする。

岡本東三は、後の國學院大學の調査所見を踏まえ、「包含層を誤認したのは山内ではなく、芹沢であったことは明らかである。」とした［岡本2015］。また、芹沢は本ノ木遺跡と中林遺跡における遺物の出土状況と堆積状況は「まったく同一」としたものの、「本ノ木遺跡の原位置は５層（シルトと砂の互層）の下、中林遺跡ではⅣ層（シルトと砂の互層）の上」であり、検証が必要である［岡本2017］。

このような層位認識の相違に基づく議論が展開する中、小林達雄［1986］は芹沢とも山内とも異なる見解を提示した。草創期の尖頭器が出土する遺跡に土器をもつ遺跡ともたない遺跡の新旧の段階があるとし、本ノ木遺跡も「二つの異なる新旧の時期に分離される可能性が大きい」とする。この考え方を白石浩之［1990］は「第３の考え方」、岡本東三［2015］は「槍・層分離論」と呼んでいる。

B　渡来石器をめぐる議論

山内は、新石器時代の特徴が縄文土器の最も古い段階に大陸からもたらされたと考え［山内1932］、植刃・断面三角形の鑽・矢柄研磨器等を「縄紋文化渡来の時期を示す石器」［山内・佐藤1962］とした。

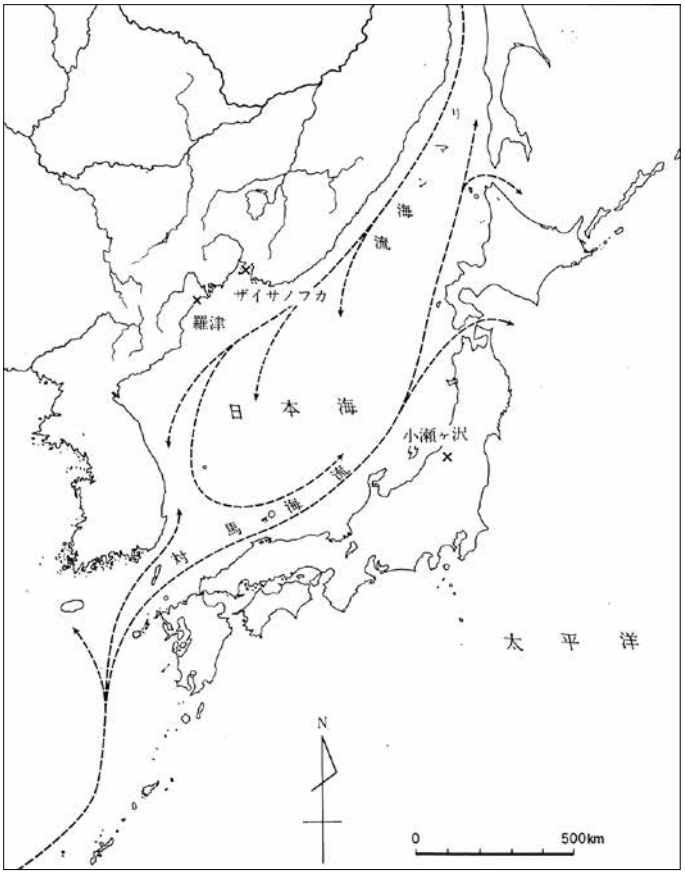
一方、芹沢［1965］は、本来の「植刃」は「はじめから組みあわせることを前提として、短く薄く、主として長方形につくられ、鋭利な刃部は片側辺にかぎられる」とし、山内・佐藤が「植刃」としたものを「尖頭器の欠損品にすぎない」とした。山内･佐藤と芹沢の間には、同一の石器について、目的的な生産物であるのか、副次的な生産物であるのか、根本的な理解の相違が表出することとなったのである。

佐藤達夫［1974］は、小瀬ヶ沢洞窟出土の窩紋土器・箆紋土器・爪形紋土器を古い段階に位置付け、対岸のザイサノフカや羅津貝塚との共通性を指摘した。その上で、日本海の海流を利用して「直接的に大陸から列島に至った」と渡来経路に言及した（第17図）。

岡本東三［1979］は、神子柴・長者久保石器群の分析を行い、その流入経路を想定した。日本列島を大陸文化をとりまく周辺地域とし、大陸→半島部→島という経路で文化が流入すると考えた。そして、具体的に①シベリア→カラフト→北海道ルートと、②沿海州→（日本海）→裏日本ルートを提示している。

稲田孝司［1986］は、山内が円鑿形石斧と対比したシベリアのイサコヴォ期の年代を、放射性炭素年代測定に基づいて日本と同じ頃かそれ以前とした。そして、神子柴石器群について、大型の石斧の系譜が旧石器時代の石斧とつながらないこと、石刃技術をもつこと、分布が東北日本に偏在することから、文化の

起源が北方にあるとした。さらに「大陸に生れた神子柴型石斧とその要素が、北海道で神子柴文化としての体裁をととのえ、本州に入ってきたものと推測」し、起源と流入経路に言及した。その後、稲田［2018］は、これとは異なる見解を示している。湧別技法と神子柴石器群の関係性について検討し、「信越地域の湧別集団と在地集団の両者が現にもつあるいは潜在的に保有する道具類を発展させて新たな神子柴石器群を誕生させた可能性」を指摘した。そして、信越地域を神子柴石器群誕生の有力候補地の一つと考えた。



第17図　佐藤達夫が示した文化の渡来経路

栗島義明［1986］は、山内が一貫して「渡来石器」とした石器の形態学的検討を行った。特に、植刃の詳細な分析を行っており、本ノ木遺跡に代表される大形厚手で加工が粗雑なものと、小瀬ヶ沢洞窟に代表される小型薄手で調整剥離が精緻なものに分類されることを指摘した。そして、極めて細身の尖頭器が植刃の素材であるとし、共伴関係の検討から、隆起線文土器終末から爪形文土器の段階に位置付けられる石器とした。本ノ木遺跡の尖頭器石器群は、ハの字爪形文が併用される押圧縄文土器に伴うとし、この範囲に収まると考えた。また、植刃と同様に「渡来石器」とされた断面三角形の鑽、半月形石器、矢柄研磨器も隆起線文土器の新段階前後に位置付けられるとした。一方、それらの分布状況の検討から、佐藤達夫［1974］が示した日本海横断ルートで「渡来石器」の系統を一律的に理解できないことを指摘した。また、押圧縄文土器には石鏃が必ず伴うことから、本ノ木遺跡の特異性を指摘し、遺跡の性格（生産活動）の差を反映するとした。栗島はその後も、湧別技法による細石刃石器群、石斧、石槍、有舌尖頭器が更新世末に日本海の対岸地域に存在することを指摘し、日本列島で独自に出現、発達した可能性は考えられないとする［栗島2010］。神子柴石器群に伴う土器についても、大陸側と同様に「板作り」であることを指摘し［栗島2005］、大陸との関係性に言及した。

島立　桂［1988］は、1970～80年代に増加した資料の検討等を踏まえ、「本ノ木遺跡の石器群は、神子柴系石器群に後続し、隆線文段階の石器群に先行」し、ここに「土器は伴うが、文様構成、器形等は、現在のところ明らかでない。」とする。一方、「典型的な多縄文土器の石器群は槍先形尖頭器をほとんど伴わず、本ノ木段階の石器群との相違点はかなり大きい」としつつ、「縄の圧痕の施された土器は、隆線文土器出現以前から存在する可能性」を指摘した。そして、「流入経路、流入時の姿、セット関係が全く判明しないまま、「渡来石器」として前面に押し出しても、事態は好転しない」と、「渡来石器」という枠組みで検討することの問題点を指摘した。加えて、本ノ木段階の尖頭器石器群に断面三角形の鑽、矢柄研磨器は共伴し

ないことが強調され、植刃や半月形石器もないとした。栗島と同様の資料で検討しつつ、異なる結論が導き出されたといえる。

安斎正人は［1996・2002］、沿海州に発した「神子柴・長者久保文化」が北海道に渡来し、以後、順次青森を経由して長野に至り、さらに九州地方まで南下したという従来の「文化伝播論」は、説明原理としての有効性を失ったとした。そして、最終氷期最寒冷期以後の温暖化に伴っていちはやく森林が回復していった北海道南西部において細石刃石器群に組み込まれた石斧は、沿海州、アムール川下流域、サハリン、北海道北部を通って北方より伝播したとみなすよりも、津軽海峡の南側にいた集団（長者久保石器群）との交流の中で受容されたと考え、大陸渡来説を批判した

その後、「渡来石器」という枠組みでの議論は、しばらくは低調となる。このことは、草創期の遺跡が次々に発掘調査され、当該期の実態が急速に把握された時期に相当することと無関係ではなかろう。着実に新資料が蓄積されていく一方、新たな手法による研究が展開されていく。

橋詰　潤［2007］は、小瀬ヶ沢洞窟の植刃の破損痕跡に着目した分析を展開する。「植刃」の長さに関しては顕著な斉一性は認められないことから、形態的斉一性の高い「植刃」を抽出することは困難とした。そして、刺突具に特有の破損痕跡があることから、「植刃」の製作のために存在したのではなく、少なくとも一部は尖頭器の破損品であると考えた。同様の視点は、沢田　敦［2013b］によって追認された。衝撃剥離の可能性が高い縦溝状剥離、彫器状剥離の比率等の破損痕跡の比率が植刃と石鏃・有舌尖頭器・棒状尖頭器（断面三角形の鑽）で共通しており、植刃も刺突性の道具と考えた。そして、大陸の事例と比べると厚手で異質であることを指摘した。矢柄研磨器についても、大陸との関連が想定されるが、経由したと考えられる北海道での分布が希薄であり、渡来説を否定的に捉えた。

橋本勝雄［2012・2018］は、本ノ木遺跡に代表される厚手で粗雑な加工の「植刃」は「①肉厚で植刃器への装着には適合しないこと、②刺突具に特有の衝撃剥離が観察されること」から「刺突具の破損品」と考えた。一方、小瀬ヶ沢洞窟に代表される薄手で精緻な加工のものについては、「（単体の）ナイフとしての二次的な使用を必ずしも否定するものではない。」［橋本2012］とし、慎重に評価した。また、遺構出土資料の分析をとおして、いわゆる「渡来石器」（植刃・断面三角形の鑽・矢柄研磨器）が草創期後半に盛行することを指摘し、「縄文文化渡来の時期を示す石器」という評価にはあたらないとした［橋本2018］。

以上のように、近年では「渡来石器」が慎重に扱われ、大陸との関係を否定的に捉える論調が増えているが、その評価については十分な結論が得られていない。また、植刃については新たな研究動向により、尖頭器の破損品とみられることが多くなっている。ただし、「植刃」が、目的的な生産物であるのか、副次的な生産物であるのか、山内・佐藤と芹沢の根本的な理解の相違に対する十分な結論は、いまだ見出されていないのが現状である。

C　発掘調査報告書の刊行と本ノ木論争の今後

これらの議論を経た今日もなお、「本ノ木論争」に終止符は打たれていない。その要因の一つは、第１次・第２次調査とも、正式な報告書が長らく刊行されず、第三者が検討するのに資料上の制約があったことが一因であった。

第１次・第２次調査資料は、山内清男から整理作業を指示された岡本東三が借用していた。その後、山

内清男・佐藤達夫の逝去もあり紆余曲折を経たが、40年にわたって岡本が資料を保管してきた。その後、2008年に資料の再整理に関する話が持ち上がった。2009（平成21）年７月７日には、岡本東三・新潟県教育委員会・津南町教育委員会による三者協議が行われ、整理作業の方向性が確認された。同年９月９日には信濃川上流域草創期遺跡群調査指導委員会（委員長　小林達雄）が開催され、「①複数年かけて出土遺物と記録図面等の整理を行う。②整理終了後に、『報告書』を刊行する。③『報告書』刊行後は、地元に返還し公開する。」という方針が決められた。

再整理作業は津南町が事業主体となり、国庫補助事業として2010（平成22）～2015（平成27）年度に千葉大学考古学研究室（岡本東三研究室）で行われた。2016（平成28）年３月には『本ノ木遺跡第一次・第二次発掘調査報告書』が刊行され[小林・岡本・佐藤2016]、資料類は津南町に返還された。これを契機に、2017（平成29）年９月２日～11月５日に企画展「本ノ木－調査・研究の歩みと60年目の視点－」（於：津南町農と縄文の体験実習館　なじょもん）、2017（平成29）年10月14･15日にはシンポジウム「60年目の本ノ木遺跡」が開催された。これらにより、第三者が資料を検討する機会が提供されたことから、今後、新たな研究が展開されるものと期待される。

３　本ノ木遺跡の第３～12次調査

Ａ　第３次調査

2006（平成18）年８月17日～31日には、藤本　強を代表とする本ノ木遺跡発掘調査団による発掘調査が行われた［藤本ほか2007］。第１次･第２次調査のトレンチ位置の把握、堆積状況の確認と土壌の分析、新規調査区の自然堆積層中における遺物の出土状況の把握を目的として実施された。土器22点、石器6,380点が出土し、第１次調査のトレンチ位置と第２次調査のトレンチの痕跡を確認した。これらのトレンチを再発掘し、土層の堆積状況と遺物包含層が確認され、倒木痕や地層の反転現象が確認された。また、第１次調査で記録された土層断面が、そのままの状態で視認できた。調査とともに、各地の機関・個人所蔵の本ノ木遺跡関連資料を目録・記録化し、石器製作・石材利用の観点からの分析も行われた。

Ｂ　第４次調査

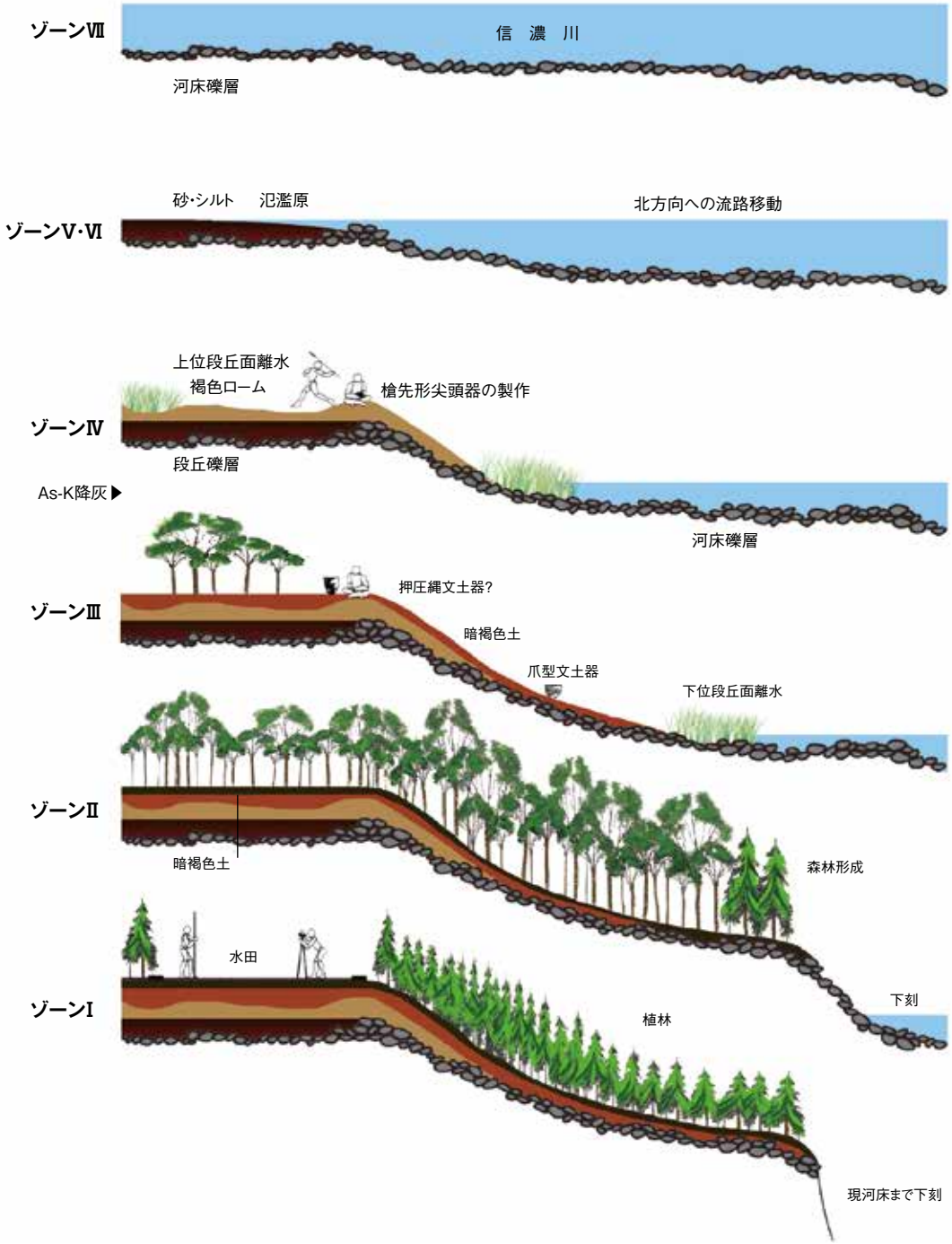
2006（平成18）年10月～12月には、農地拡張工事に伴う確認調査を津南町教育委員会が実施した。遺跡範囲の南端を確認し、ハの字爪形文土器や尖頭器等、草創期の遺物が少数出土した。縄文時代の陥穴であるＴピットを検出したほか、倒木痕を確認し、地層の反転現象が存在することを確認した。

Ｃ　第５～７次調査

津南町教育委員会と國學院大學は、旧石器時代終末期から縄文時代初頭にかけての様相と、その変遷過程の解明を目的とする調査を継続的に行うことを取り決めた。その一環で、本ノ木遺跡の第５～７次調査

が國學院大學（小林達雄・谷口康浩）によって行われた。

第５次調査［谷口・深澤ほか2010］は、2007（平成19）年８月17日～30日に、①遺跡の範囲・遺存状況の確認、②遺跡の年代・編年的位置の検討、③地史・微地形・遺跡立地・古環境の検討を目的として実施された。調査の結果、尖頭器石器群の分布範囲が把握され、そこが自然堤防上の微高地にあたることが明らかになった。石器群の出土層位は「褐色ローム層」にあるとし、浅間-草津火山灰（As-K）下位に相当する可能性を指摘した。そして、芹沢の所見を詳細に検討し、「水成層に厚く覆われた段丘礫層直上に生活



第18図　本ノ木遺跡の形成過程　［谷口・深澤ほか2010］をカラーに編集

※その後の調査で、As-K降灰とゾーンⅢの間で山体崩落が発生したことが想定されている。

面が残されたという状況はほとんど考えられ」ず、「遺跡の形成時期を段丘礫層の形成直後ではなく、本段丘面が離水して直後」と考えた。また、地史と層位の検討から、「尖頭器石器群と爪形文土器･押圧縄文土器が同時期になることはあり得ない」とした。そして、総合的な検討を通じて、地形面の形成過程と景観･環境の推移、遺跡形成のタイミングに関する仮説が示された（第18図）。

第６次調査［谷口・深澤・中村ほか2010］は、2008（平成20）年９月５日～10日に実施された。遺跡の主体部の調査は行わず、下位段丘面と崖線部を中心に調査された。この調査では、基盤層と想定していた礫層の下位から黒色土が確認され、この礫層（ニセ礫層）が再堆積土であることが判明した。なお、第５・６次調査では、ニセ礫層の上面から爪形文土器を含む草創期の土器が出土した。

第７次調査［谷口・中村2013］は、2009（平成21）年９月３日～14日に実施された。第６次調査で課題となったニセ礫層の堆積状況の確認・検討、それに伴う地形形成史・遺跡形成史・古環境の復元を目的とした。ニセ礫層は厚いところで2.6mにも達し、信濃川に向かって厚くなっていくことが明らかになった（巻頭図版５）。また、卜部厚志の地質調査により、ニセ礫層が信濃川対岸からの崩落堆積物であると考えられた。そして、ニセ礫層下位からはAs-Kが確認されず、炭化物の年代測定が12,550 ^{14}C yr BP前後であることから、下位段丘面の離水時期をAs-K降灰以後、12,550 ^{14}C yr BP前後以前と推測した。遺跡の形成史や古地形の復元において重要な情報ということができる。

D　第８～12次調査

2009（平成21）年９月９日に開催された信濃川上流域草創期遺跡群調査指導委員会（委員長　小林達雄）の指導により、本ノ木遺跡・屋敷田Ⅲ遺跡・駒返り遺跡・卯ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡の範囲確認調査を実施することが決められた。その後、文化庁の指導により、本ノ木遺跡と卯ノ木南遺跡の確認調査を優先することとなり、本ノ木遺跡の範囲確認調査を2009（平成21）年～2013（平成25）年の５年にわたり（第８～12次調査）、津南町教育委員会で実施した［佐藤・佐藤・今井2018］。この調査では、遺跡の範囲と内容を確認することを目的としてトレンチが設定された。

調査により、遺跡のおおよその範囲を確認できた。第７次調査で発見した崩落堆積物は、Ａ地点の低地部（谷部）でも検出され､その下位の硬化黒色土層から両面加工石器が出土したことも重要な成果である。この成果と火山灰との層位関係の把握をとおして、押圧縄文土器群は崩落堆積物より上位かつAs-Kより上位から出土することが確認された。また､押圧縄文土器より下位のシルト層（Ⅵ層）から土器が出土し、As-Kの下層または介在する層位からの出土と判断された。ただし、出土層位（Ⅵ層）はAs-Kよりも下位にあたるが、土器付着物の年代測定は押圧縄文土器群に近い年代であった。すなわち、As-Kより新しい年代が得られたのである。As-Kの降灰層準が水成堆積であることから､再堆積の結果である可能性が指摘されているが、その評価については課題が残る。第９・10次調査では、配石と推定された列石状・立石状遺構が検出された。これは十日町市貝野沢田遺跡や東京都前田耕地遺跡で類例があり、遺構と捉えてよいと考えられる。この遺構は、記録を残した後、現地保存した。また、整理作業の過程で、本ノ木遺跡と卯ノ木南遺跡の間に石器の遺跡間接合が確認され、両遺跡の有意な関係性を探る重要な情報となった。

4　壬遺跡の調査

中林遺跡の発掘調査の前後に、石澤寅二・島田靖久・星野洋治は壬遺跡の存在に注目し、10年以上にわたって表面採集を続けた。三氏が採集した資料は相当量あり、そこに草創期の遺物が含まれていた。このうち、星野の採集資料を実見した小林達雄は、円孔文土器の存在に着目した。当時、栃木県大谷寺洞窟から１例発見されているのみで注意されていなかったことから、その性格を解明することを目的として國學院大學が発掘調査（第１次～第５次調査）を実施した（第39・40・41・44・45図）。

第１次調査は、1979（昭和54）年９月３日～13日に実施された。氾濫原に形成された自然堤防の礫層が確認され、その上に直接のってくる黄色砂質土層の下半部には無遺物層であることが明らかになった。６か所の遺物集中範囲（ユニット）を検出し、円孔文土器・隆起線文土器・爪形文土器・絡条体圧痕文の土器、石斧・石鏃・有舌尖頭器・掻器・有溝砥石・磨石・凹石等の石器が出土した。また、円孔文土器の器形は、「口縁が隅の丸い四角形に開き、底部も同様に隅丸方形になる」と考えられ、「それまで保有していた樹皮や獣皮の袋や植物繊維の編篭などの既存の容器の形を模した」可能性が指摘された［小林編1980］。

第19図　壬遺跡　調査の様子

第２次調査は、1980（昭和55）年９月21日～30日に実施された。３か所のユニットを検出したほか、ピット４、配石２、炉12が検出された。ただし、これらの遺構と草創期のユニットの直接的な関連性については慎重に判断された。遺物は、土器破片1,084点、石器（チップ・焼礫含む）1,689点が出土した。円孔文土器に関する情報が追加され、これに伴う石器群の組成（三角鏃・長脚鏃・石槍・局部磨製石斧）について、課題が指摘された［小林編1981］。

第３次調査は、1981（昭和56）年８月21日～30日に実施された。土坑状の遺構２基と集石１基を検出し、出土した草創期の土器338点、石器・剥片類569点は、自然堤防に沿うように分布した。この調査で特筆されるのは、円孔文土器が上位、隆起線文土器が下位から出土することが明らかになり、隆起線文土器→円孔文土器という変遷が確認されたことである。そして、他の遺跡の状況を踏まえ、円孔文土器が隆起線文土器段階の終末に位置付けられる可能性が示された。また、隆起線文土器より下位にも、これまで未掘の「下層土器群」の包含層が存在することも明らかになった（第41図）［小林編1982］。

第４次調査は、1982（昭和57）年７月24日～８月１日に実施された。この調査で特筆されるのは、火山灰分析が早津賢二・小島正巳によって行われ、浅間草津黄色軽石（As-YPK）が検出されたことである。隆起線文土器の下位から出土した「壬下層土器群」がAs-YPKにほぼ同じかわずかに先行するという所見が得られた［小林編1983］。すなわち、隆起線文土器群・円孔文土器群はAs-YPK以降ということになる。草創期の土器群と広域テフラの層位関係が判明したことは、画期的な成果であった。

第５次調査は、1986（昭和61）年７月24日～８月１日に実施された。隣接地に昆虫飼育所の建設が予定されたことを契機に、４次にわたる調査の未調査部分と、新たに範囲確認のための調査が行われた。主な調査区は、道路を挟んだ東側の田沢遺跡隣接地である。攪乱が著しかったものの、壬遺跡の東端がおおむね把握され、矢柄研磨器（有溝砥石）が多縄文土器に伴う可能性が指摘された［小林編1987］。

第６次調査は、送電線移転に伴う緊急調査で、1991（平成３）年３月17日～４月６日に中里村教育委員会（調査団長　小林達雄）が実施した。既調査区の北東側隣接地が調査対象であったが、早期・前期を中心とする調査となり、草創期の遺物出土は少数であった［青木ほか1992］。

５　田沢遺跡の第２～10次調査と報告書の刊行

田沢遺跡の保存目的の確認調査は､2009（平成21）年～2017（平成29）年に実施した（第２～10次調査）。調査面積は、実質178.2㎡（同じトレンチを複数年度調査しているため、年度ごとの累計よりも小さい面積となる。）である（第39図）。調査の目的は、①詳細な調査範囲が分からない第１次調査範囲を特定すること、②遺跡の広がりを確認するため新たな遺物集中範囲を探索すること、③遺跡の立地する範囲の地形や堆積土層を確認することであった。

この調査で、微地形が把握されるとともに、その変換点で草創期３か所、早期１か所の新たな遺物集中範囲が発見され、考古学・地質学・古環境学・年代学等による連携研究が行われた。第１次調査のトレンチ位置も確かめられ､遺跡のおおむねの広がりが把握された。同じ段丘上に立地する田沢遺跡と壬遺跡は、遺物の集中範囲をそれぞれ持っているものの、遺跡範囲は連続的に捉えられ、遺跡間に空白域が存在しないこともわかった。また、基盤層となる礫層直上から二次堆積資料と考えられる石器が出土したことは、土地利用の過程を知る上で重要な成果といえる。これらの調査成果は、2018年３月に十日町市教育委員会から報告書として刊行された［笠井･石原ほか2018］。また、同月には東北大学の研究グループにより、第１次調査の発掘調査報告書も刊行され［鹿又ほか2018］､すべての発掘調査報告書が揃った。なお､このほかに採集資料（石澤寅義・島田靖久コレクション）が紹介されている［菅沼・小熊2008］。

６　卯ノ木南遺跡の調査

卯ノ木南遺跡は、信濃川右岸の低位段丘面（大割野Ⅰ面）に立地する草創期後半～早期の遺跡である。軍艦状の微高地上（上段）に主要な活動痕跡が残され、その周囲（下段）には清水からの流水や信濃川の氾濫原が形成されていたと考えられている。

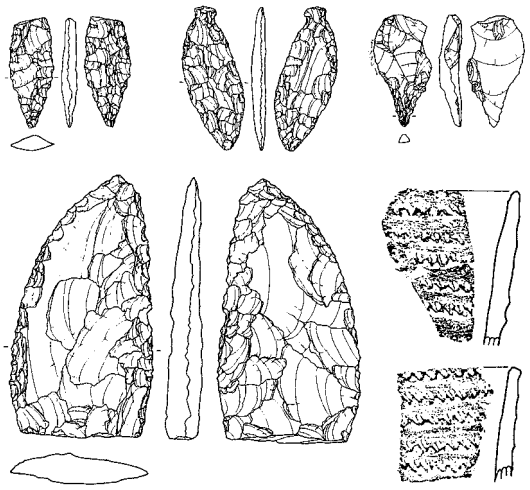
上段と下段の一部は、1991・1992（平成３・４）年に主要地方道小千谷十日町津南線の改修工事に伴い2,844㎡、1998年には個人の農機具小屋建設に伴い1,946㎡が発掘調査された。第１・２次調査では、下段から押圧縄文土器段階の袋状土坑23基と、その周囲にブロック22基、焼礫群が散在しており、50個体以上の土器が出土した。石器は、石鏃７点、尖頭器３点、有舌尖頭器１点、局部磨製石斧４点、篦状石器５点、打製石斧９点、磨製石斧２点、敲石３点等が出土している［桑原2017］。石刃技術は失われ、大形剥片･小

型剥片を素材とすることが特徴とされる［佐藤2003・2007・2008a、笠井2008］。これらの調査成果は、押圧縄文土器段階の特徴を端的に表している（第49図）。

その後、2009（平成21）年９月９日に開催された信濃川上流域草創期遺跡群調査指導委員会の指導により、2012・2013（平成24・25）年度に、卯ノ木南遺跡の確認調査が実施された。開発により軍艦状の微高地は残っていないものの、東側から南側にかけての範囲を対象に確認調査を実施した。調査の結果、押圧縄文土器の分布の広がりが確認され、草創期遺跡が残存することが確認された。また、南側の湧水点付近では泥炭層が確認され、放射性炭素年代測定により押圧縄文土器段階の堆積物であることが明らかになった［佐藤ほか2018］。調査は完結しておらず、今後の調査の進展が期待される。

7　屋敷田Ⅲ遺跡・駒返り遺跡等の調査

清津川左岸の屋敷田Ⅲ遺跡は、国道117号改築事業に伴い1993・1994（平成５・６）年に1,000㎡が発掘調査され、隆起線文土器を含む良好な資料群が出土した。中でも集中区６の出土状況は重要で、隆起線文土器とともに出土した有舌尖頭器・半月形石器・石匙・石錐は、隆起線文土器に伴う石器群の様相を端的に示すと考えられる重要な資料である（第20図）。



第20図　屋敷田Ⅲ遺跡の遺物　（S=１：３）

駒返り遺跡は、石澤寅義による採集活動により発見された草創期の遺跡で、隣接する字下り、字谷内田でも草創期の資料が採集されている。また、島田靖久採集資料は資料化されており、草創期資料を含む石器群と評価されている［菅沼2008］。2004・2005（平成16・17）年には、駒返り地内で町道建設に伴う確認調査が実施されたが、草創期資料は得られなかった。2009（平成21）年には、石澤寅義が「谷内田」と注記した家の上遺跡の確認調査が行われたが、草創期資料は確認されなかった。これらの確認調査を経た今日も、遺跡の中心位置を把握できていない。

草創期遺跡群の構成要素となる遺跡のほかにも、十日町市干溝遺跡・おざか清水遺跡・小丸山遺跡・久保寺南遺跡・貝野沢田遺跡、津南町卯ノ木遺跡・寺田上Ａ遺跡・しぐね遺跡・堂屋敷遺跡等、著名な草創期遺跡が調査され、当地域の資料が蓄積されている。また、十日町市一里塚遺跡（石澤寅義・島田靖久コレクション）［菅沼2008］等、採集資料の紹介もあり、発掘調査資料を補完している。これほど濃密に草創期の調査が行われた地域は全国的に見ても稀有であり、当期の様相を知る上で極めて重要な地域といえる。なお、久保寺南遺跡出土品は、2010（平成22）年に新潟県指定文化財（有形文化財）となっている（第48図）。

調査年月日			遺跡	調査種別 報告書・概報等	調査 面積	調査担当	文献
1956	昭和31	11月３日～９日	本ノ木	試掘調査		石澤寅二	小林・岡本・佐藤2016
		12月５日～７日	本ノ木	第１次調査	24.0	芹沢長介（明治大学）	芹沢・中山1957 小林・岡本・佐藤2016
1957	昭和32	８月20日～９月３日	本ノ木	第２次調査	280.0	山内清男（東京大学）	山内1960、山内・佐藤1962 小林・岡本・佐藤2016
		９月15日	**本ノ木**	**「新潟県中魚沼郡津南町本ノ木遺跡調査予報」**		**芹沢長介・中山淳子**	**芹沢・中山1957**
		９月21日	**本ノ木**	**朝日新聞 「誕生期のジョウ文文化」**		**山内清男**	
1960	昭和35	**６月**	**本ノ木**	**「縄紋文化のはじまる頃」**		**山内清男**	**山内1960**
1962	昭和37	**12月**	**本ノ木**	**「縄紋土器の古さ」**		**山内清男・佐藤達夫**	**山内・佐藤1962**
1965	昭和40	９月５日～16日	中林	確認調査		芹沢長介（東北大学）	芹沢1966
1966	昭和41	**３月25日**	**中林**	**「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」**		**芹沢長介**	**芹沢1966**
1968	昭和43	10月21日～11月２日	田沢	第１次調査	30.0	芹沢長介（東北大学）	芹沢・須藤1968、 鹿又・里村・木村2018
		12月	**田沢**	**「新潟県田沢遺跡の発掘調査予報」**		**芹沢長介・須藤隆**	**芹沢・須藤1968**
1979	昭和54	９月３日～13日	壬	第１次調査	114.0	小林達雄（國學院大學）	小林編1980
1980	昭和55	**２月20日**	**壬**	**第１次調査報告書**		**小林達雄（國學院大學）**	**小林編1980**
		９月21日～30日	壬	第２次調査	133.0	小林達雄（國學院大學）	小林編1981
1981	昭和56	**３月18日**	**壬**	**第２次調査報告書**		**小林達雄（國學院大學）**	**小林編1981**
		８月21日～30日	壬	第３次調査	88.0	小林達雄（國學院大學）	小林編1982
1982	昭和57	**３月31日**	**壬**	**第３次調査報告書**		**小林達雄（國學院大學）**	**小林編1982**
		７月24日～８月１日	壬	第４次調査	116.0	小林達雄（國學院大學）	小林編1983
1983	昭和58	**３月31日**	**壬**	**第４次調査報告書**		**小林達雄（國學院大學）**	**小林編1983**
1986	昭和61	７月19日～28日	壬	第５次調査	108.0	小林達雄（國學院大學）	小林編1987
1987	昭和62	**３月31日**	**壬**	**第５次調査報告書**		**小林達雄（國學院大學）**	**小林編1987**
1991	平成３	３月17日～４月６日	壬	第６次調査	184.0	小林達雄 （中里村教育委員会・調査団）	青木ほか1992
		９月１日～11月30日	卯ノ木南	第１次調査（緊急調査）	2844.0	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤2003・2007・2008a、笠井2008
1992	平成４	５月７日～７月30日	卯ノ木南	第２次調査（緊急調査）		佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤2003・2007・2008a、笠井2008
		３月30日	**壬**	**第６次調査報告書**		**小林達雄 （中里村教育委員会・調査団）**	**青木ほか1992**
1997	平成９	10月31日～11月12日	卯ノ木南	確認調査（土砂採取）	326.0	佐藤雅一（津南町教育委員会）	
1998	平成10	４月27日～７月５日	卯ノ木南	第３次調査	1946.0	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤2007b
2006	平成18	８月17日～31日	本ノ木	第３次調査	227.0	小林達雄（國學院大學）	藤本・小林・佐藤ほか2007 佐藤雅・佐藤信・今井2018
		10月23日～12月12日	本ノ木	第４次調査	62.3	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤雅・佐藤信・今井2018
2007	平成19	**３月31日**	**卯ノ木南**	**第３次調査報告書**		**佐藤雅一（津南町教育委員会）**	**佐藤2007b**
		８月17日～30日	本ノ木	第５次調査	44.0	小林達雄（國學院大學）	谷口・深澤ほか2010
2008	平成20	９月５日～10日	本ノ木	第６次調査	32.0	谷口康浩（國學院大學）	谷口・深澤・中村ほか2010
2009	平成21	９月３日～14日	本ノ木	第７次調査	20.0	谷口康浩（國學院大學）	谷口・中村ほか2013
		８月31日～９月16日	本ノ木	第８次調査	70.5	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤雅・佐藤信・今井2018
		９月３日～10月19日	田沢	第２次調査	31.6	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
2010	平成22	８月29日～９月21日	本ノ木	第９次調査	144.2	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤雅・佐藤信・今井2018
		10月20日～12月13日	田沢	第３次調査	13.0	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
2011	平成23	９月12日～10月13日	本ノ木	第10次調査	70.0	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤雅・佐藤信・今井2018
		９月14日～11月17日	田沢	第４次調査	35.0	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
2012	平成24	10月16日～11月１日	本ノ木	第11次調査	76.4	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤雅・佐藤信・今井2018
		９月12日～10月11日	卯ノ木南	第４次調査	173.5	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤雅・佐藤信・今井2018
		12月３日～12月５日	田沢	第５次調査	14.0	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
2013	平成25	10月29日～11月20日	本ノ木	第12次調査	28.6	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤雅・佐藤信・今井2018
		10月11日～11月６日	卯ノ木南	第５次調査	165.9	佐藤雅一（津南町教育委員会）	佐藤雅・佐藤信・今井2018
		12月３日～12月13日	田沢	第６次調査	15.0	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
2015	平成27	３月23日～３月31日	田沢	第７次調査	13.0	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
		12月７日～12月15日	田沢	第８次調査	15.0	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
2016	平成28	**３月26日**	**本ノ木**	**第１・２次調査報告書**		**岡本東三（千葉大学） 佐藤雅一（津南町教育委員会）**	**小林・岡本・佐藤2016**
		５月18日～11月25日	田沢	第９次調査	87.6	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
2017	平成29	６月５日～11月30日	田沢	第10次調査	44.5	笠井洋祐（十日町市教育委員会）	笠井・石原ほか2018
2018	平成30	**３月27日**	**本ノ木 卯ノ木南 家の上**	**第８～12次調査報告書**		**佐藤雅一（津南町教育委員会）**	**佐藤雅・佐藤信・今井2018**
		３月	**田沢**	**第１次調査報告書**		**鹿又喜隆（東北大学）**	**鹿又・里村・木村2018**
		３月30日	**田沢**	**第２～10次調査報告書**		**笠井洋祐（十日町市教育委員会）**	**笠井・石原ほか2018**
2019	平成31	**２月８日**	**本ノ木 田沢 壬**	**本ノ木・田沢遺跡群 総括報告書**		**加藤学（新潟県教育委員会）**	**本書**

第４表　本ノ木・田沢遺跡群における調査の履歴　（網掛けは報告書・概報の刊行履歴）

第Ⅳ章　　本ノ木遺跡

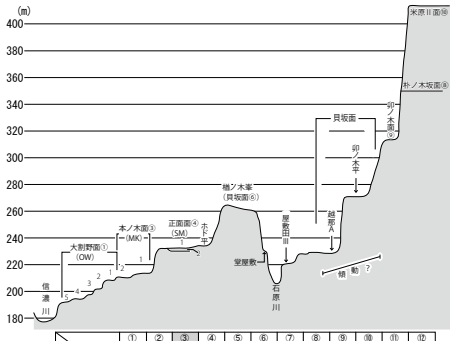
1　遺跡の立地

津南町は、東頸城丘陵と魚沼丘陵に挟まれた十日町盆地に位置し、低位段丘面から高位段丘面、急峻な山地や連なる岩壁、崩壊地形や浸食渓谷などの多様な地勢環境が形成され、中津川がつくり出す河岸段丘は特に顕著である。この河岸段丘は９～12段の段丘面で構成され、最上段に約40万年前に離水した谷上面、最下段に約10,000年前に離水した大割野Ⅱ面が認められる（第22図）。本遺跡群の対岸（信濃川左岸）には、河岸段丘の形成が見られず、地滑り地帯となっている。本遺跡の北側は急峻な地形が連なり、南側は緩やかに平坦面を持ちながら段を形成している（第21図）。

本遺跡は、信濃川と清津川の合流点付近の清津川左岸に立地する。周辺の段丘上には草創期遺跡が集中しており、本ノ木面に本ノ木遺跡、大割野Ⅰ面に卯ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡・屋敷田Ⅲ遺跡、本ノ木面よりも１段高い正面面に別当Ａ遺跡・下別当遺跡・屋敷田Ⅱ遺跡・駒返り遺跡・家の上遺跡・ヘツリ遺跡などが立地する（第21図）。本遺跡が立地する段丘面は、正面面と大割野面の間に位置付けてきたがあるが、降灰テフラの構成から本ノ木面と位置付けている（第22図）。

本ノ木遺跡には崖線が形成され、そこから緩やかな傾斜が続き卯ノ木・卯ノ木南遺跡が立地する段丘面へとつながっていく。遺跡から約70m北西側には、信濃川による浸食崖がそびえ立ち、崖際から信濃川現河床との比高差は約35mである。卯ノ木凹地帯には、「卯ノ木低地」が存在し、As-Kを含む堆積層が確認されている（第21図）。

第21図　本ノ木遺跡周辺の地形（S=１：40,000）
（「津南町全図」1：10,000原図）

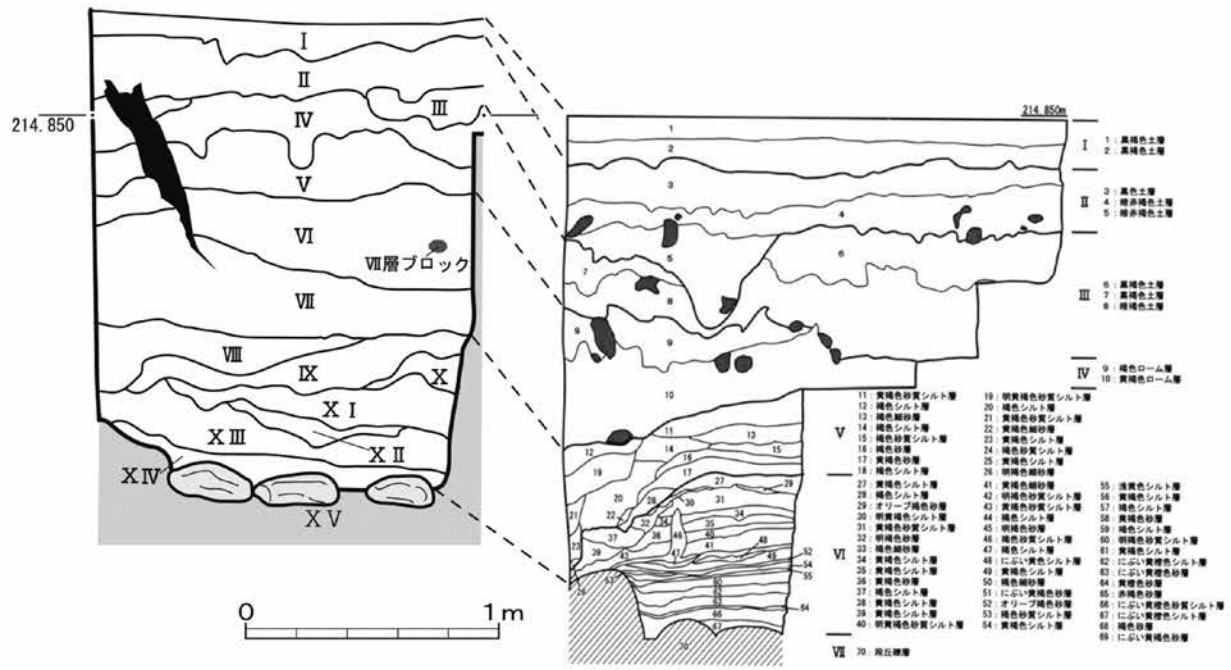


	① 大割野Ⅱ	② 大割野Ⅰ	③ 本ノ木	④ 正面	⑤ 貝坂Ⅱ	⑥ 貝坂Ⅰ	⑦ 朴ノ木坂Ⅱ	⑧ 朴ノ木坂Ⅰ	⑨ 卯ノ木	⑩ 米原Ⅱ	⑪ 米原Ⅰ	⑫ 谷上
離水期 cal BP（単位／万年前）	1	1	1.6	3.5	6	6	15	15	20	25	25	40
As-B			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
As-K					○	○	○	○	○	○	○	○
DKP					○	○	○	○	○	○	○	○
AT					○	○	○	○	○	○	○	○
Aso-4					○	○	○	○	○	○	○	○

第22図　津南段丘の構成模式図と主要な組成テフラ

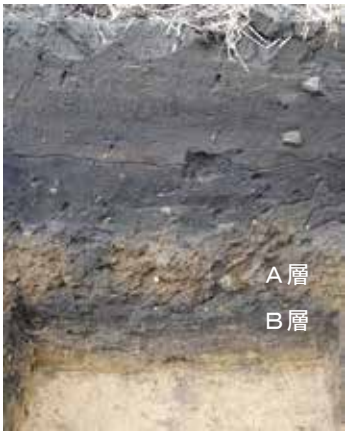
2　基本層序

基本層序と土層説明は第23図のとおりである。６Ｔ（第24図）で２ｍ×２ｍの深掘りを行い、段丘礫層までの層序を把握した。Ⅰ層からＸＶ層までを分層し、第５～７次調査のゾーン区分と対応させたのが第23図である。段丘礫層上部に砂とシルトの互層が堆積するのは共通しているため、本地域一帯は「緩急のある水流が絶えず流れていた環境」であったことを示している。本地点では、シルト層から黒色土への漸移層があり、上部：Ⅳ層（より黒色味が強い）と下部：Ⅴ層（より黄色味が強い）に分離できる。Ⅴ層には、土石流起源と考えられるクサレ礫や亜円礫が多量に混在する地点があり、遺物の出土は見られない。Ⅳ層は爪形文･押圧縄文土器等の包含層となる。なお、若干量ではあるがシルト層（Ⅵ層）からも押圧縄文土器と類似した胎土を持つ土器片が出土している。Ⅲ層は黒色土であり、ゾーンⅡに対応する。Ⅱ層も同じくゾーンⅡに対応し、栗褐色土層である。テフラ分析によって、本層から「As-UT（浅間－馬高）火山灰」が含まれることが判明している。しかし、栗褐色化する成因は未だ判然としない。Ⅰ層は表土層である。

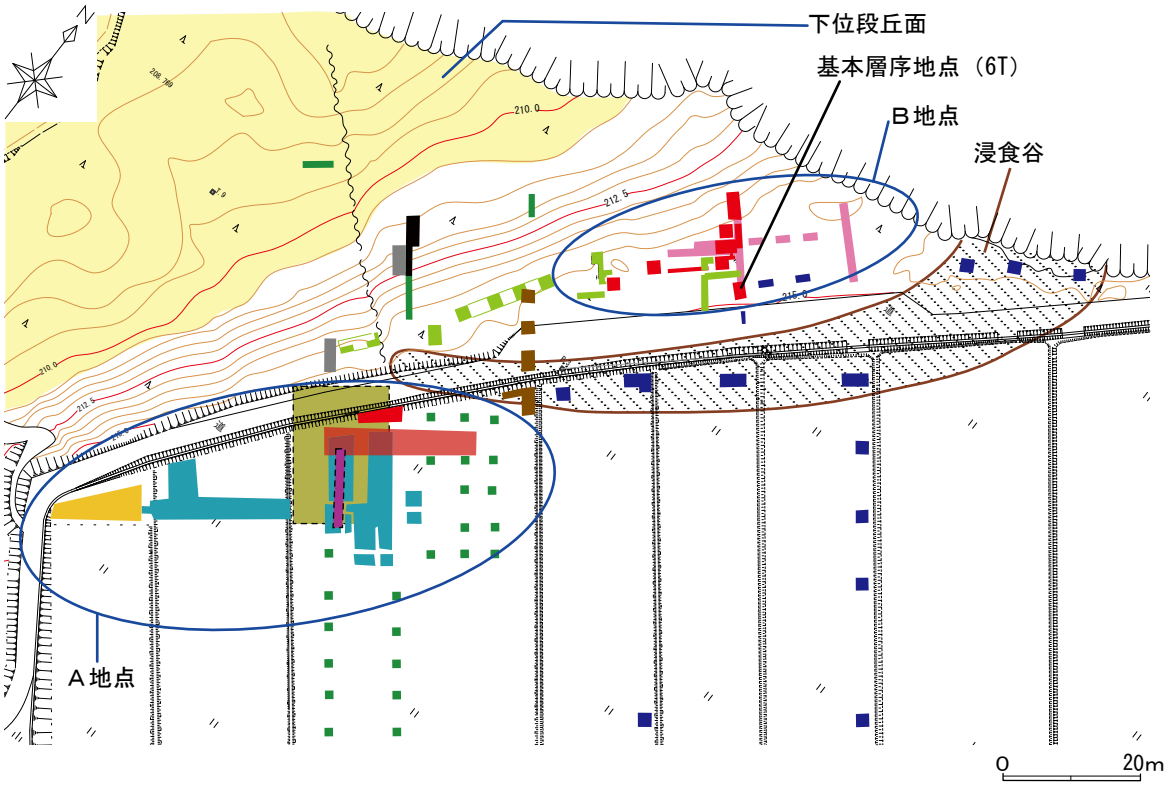


第23図　基本層序堆積状況とゾーン区分対比図（S=１/40）

また、地点によってはⅣ・Ⅴ層の間にＡ・Ｂ層が堆積している。Ａ層は、主にクサレ亜角・亜円礫で構成されるしまりの非常に強い褐色の土石流堆積物（崩落堆積物）で、Ｂ層は小礫などが若干混じるしまりの非常に強い黒褐色土である。両層は低地部分のみに確認できることが、調査によって明らかになっている。



第24図　Ａ・Ｂ層の堆積状況



紫……昭和31(1956)年調査（芹沢長介・中山淳子）
青……平成18(2006)年調査（本ノ木遺跡発掘調査団）
緑……平成19(2007)年調査（國學院大學）
黒……平成21(2009)年調査（國學院大學）
赤……平成22(2010)年調査（津南町教育委員会）
濃青……平成24(2012)年調査（津南町教育委員会）
濃黄……昭和32(1957)年調査（山内清男）
橙……平成18(2006)年調査（津南町教育委員会）
灰……平成20(2008)年調査（國學院大學）
桃……平成21(2009)年調査（津南町教育委員会）
黄緑……平成23(2011)年調査（津南町教育委員会）
茶……平成25(2013)年調査（津南町教育委員会）

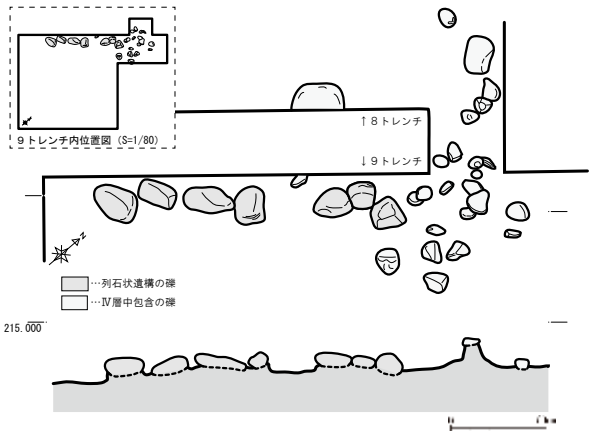
第25図　本ノ木遺跡の調査区

3　遺構と遺物

A　遺構

本遺跡からは、縄文時代草創期以降のピット類も散見されたが、ここでは最も特徴的な列石状遺構と立石状遺構の２点に絞って報告する。

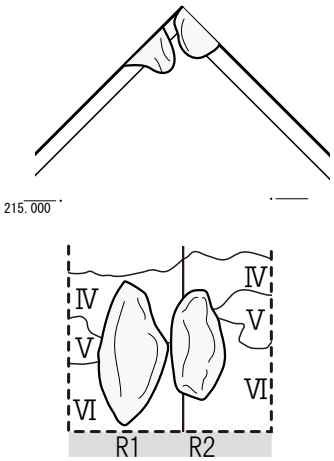
列石状遺構は、径20～25cm程の亜円礫で構成されている（第26図）。立石状遺構も亜円礫であり、Ｒ１が長径38cm×短径18cm、Ｒ２が長径28cm×短径14cmである（第27図）。Ｒ１の色調は赤茶けた褐色を呈し、Ｒ２は青味がかった灰色を呈し、視覚的には左右に「赤」と「青」のコントラストがうかがえる。これらに関しては、偶



第26図　列石状遺構（S=１：40）

発的な礫の配列だとする見解もあるが、現状では遺構と認識している。これらが遺構であれば、象徴的な配石遺構を縄文時代「草創期」に既に認めることとなる。その重要性を鑑みて、保存することとした。

縄文時代草創期において、明確な「配石遺構」と呼べるものは未だ認められず、東京都前田耕地遺跡では竪穴住居跡内に列石、十日町市貝野沢田遺跡でも列石状の配列が確認されている。前田耕地遺跡の事例は住居跡内に認められる点で、直接的生産活動の枠組みで捉えられる可能性が高い。その他の事例でも、縄文時代草創期の遺構は竪穴住居跡や集石遺構が多い傾向にある。これらに対して、本遺跡Ｂ地点にて確認された本遺構群は、直接的生産活動とは現状では結びつかない。すなわち、我々が機能を類推できないという点において、その他の事例よりも縄文時代中期以降の「配石遺構」に近い様相を持っている可能性がある。



第27図　立石状遺構（S=１：20）

Ｂ　遺物

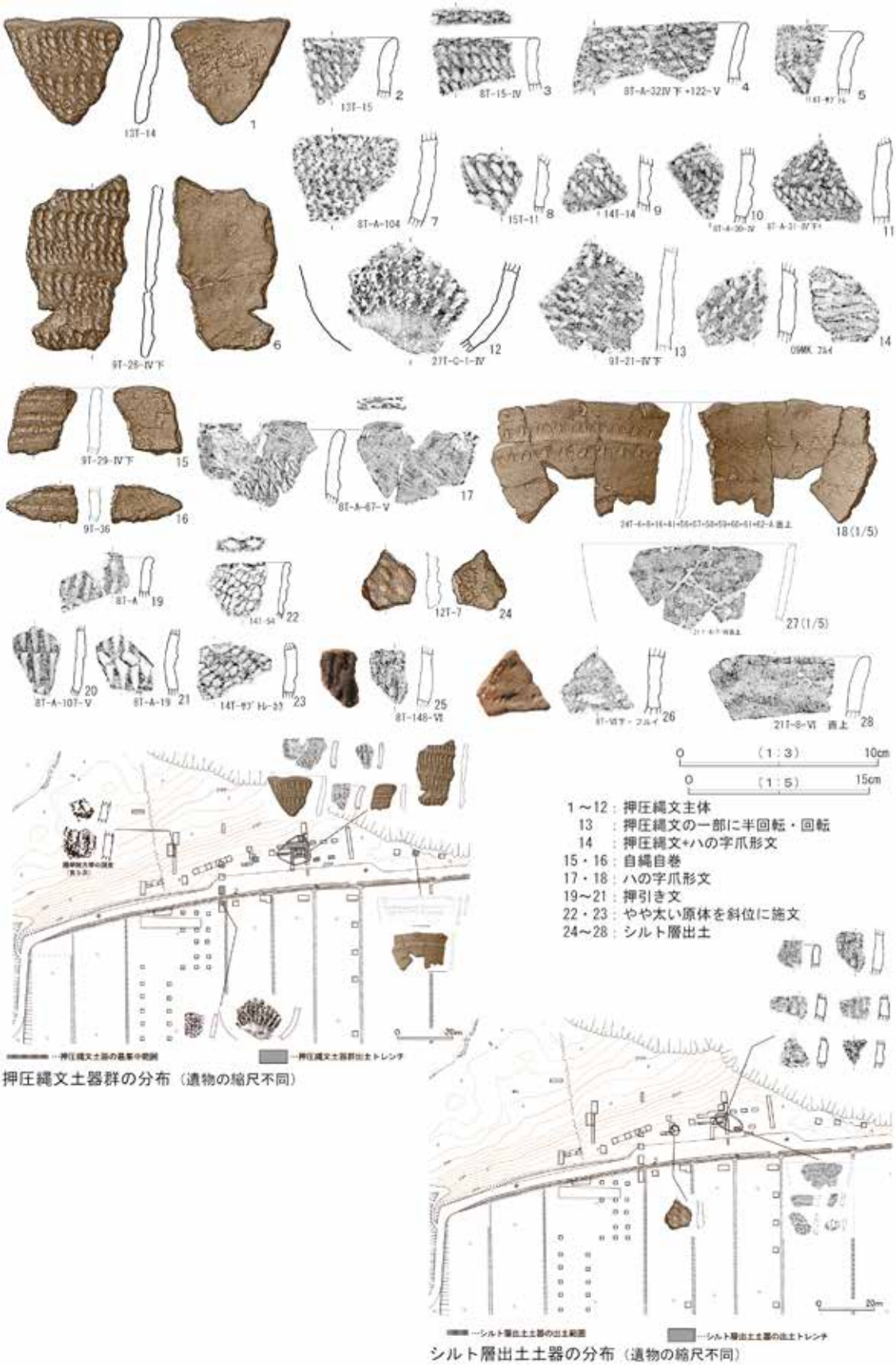
遺物に関しても、縄文時代草創期の出土土器・石器に絞って報告する。縄文時代草創期土器群は、押圧縄文土器群（押圧縄文・ハの字形爪形文・押引き文等）とシルト層出土土器群に分離できる。

押圧縄文土器群が最も顕著に出土した８トレンチ－Ａでは、上部漸移層から大半が出土している。下層のⅤ層は下部漸移層あり、クサレ亜角・亜円礫を含むことが特徴で、出土遺物はほぼ見られない。また、調査区内の一部では、Ⅳ層の下層にクサレ亜角・亜円礫で構成される土石流堆積物（Ａ層）が堆積している。24トレンチでは、Ａ層の層理面にハの字爪形文土器（10,825±30・10,605±30 ^{14}C yr BP）の大形破片が出土し、27トレンチ-ＡでもＡ層直上から押圧縄文土器が出土している。押圧縄文土器群の出土層位は、Ⅳ層中及びＡ層直上という結果から、土石流堆積物（Ａ層）の堆積以後と位置付けられる。杉林内にて押圧縄文土器群の集中範囲を確認したことにより、水田面の遺物集中部に対して、浸食谷を挟んだ杉林対岸を“Ｂ地点”と認識する（水田面側が“Ａ地点”）。この結果、遺跡範囲が拡大されたのみではなく、尖頭器石器群とは平面分布の重ならない押圧縄文土器群単一集中部の存在が明らかとなった。

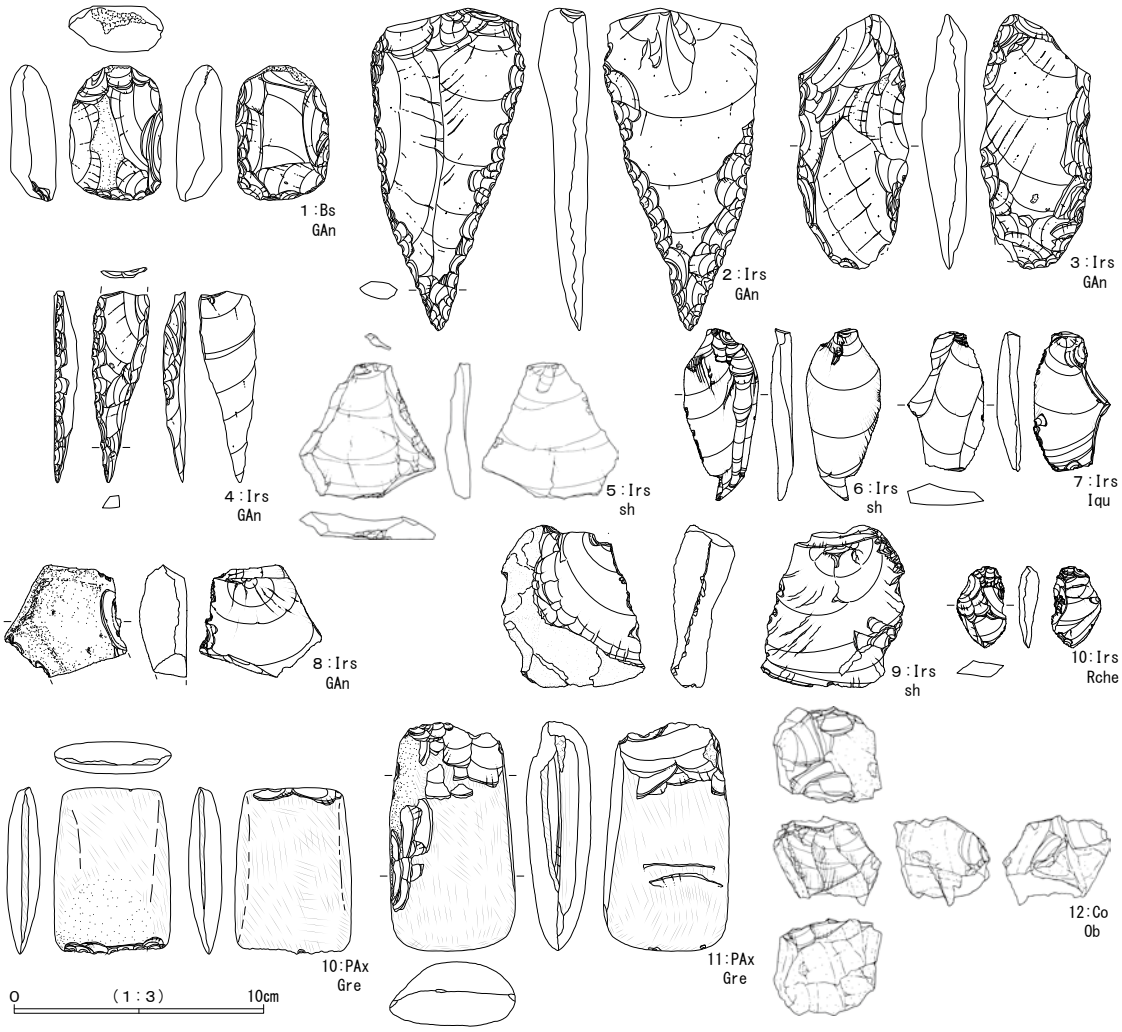
シルト層出土土器群は、押圧縄文土器群とは明らかに層位を違えて出土した一群である。本土器群は、前述したⅤ層及びＡ層を挟んで出土したもので、無文土器や押圧縄文土器などが混在している。２点の土器片で年代測定を行い、それぞれ11,070±35・11,165±35 ^{14}C yr BPと算出されている。

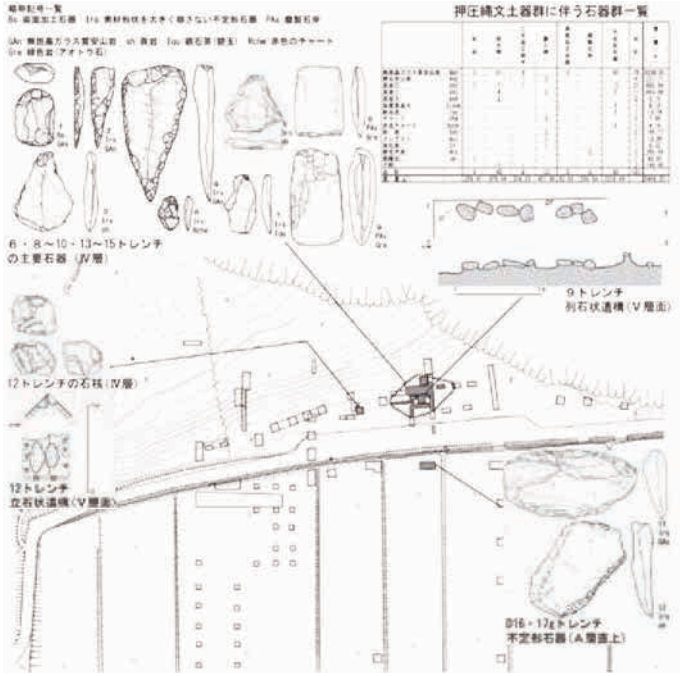
本遺跡からは、押圧縄文土器群におけるまとまりの中で、石器群の存在が確認されている。その組成は不定形石器を主とし、地層対比でⅣ層出土のもの、Ａ層（崩落礫層）直上出土のものを該期の石器群として認定している。それらの条件により認識された石器群の総数は131点で、主に不定形剥片を素材とした不定形石器が60点と最も多い。「定形石器」は基本的に認められず、アオトラ石製磨製石斧２点、石核が４点出土した。また、出土した不定形石器１点が、卯ノ木南遺跡第３次調査で出土した不定形石器と遺跡間接合している（第29図）。

石材組成は、無斑晶ガラス質安山岩が78点と最多で、頁岩が続く。これらの石材は近傍で採取可能なもので、守門山系の鉄石英も１点のみ組成する。非在地石材には、アオトラ石や黒曜石がある。



第28図　主要な草創期土器群と出土分布図





本ノ木遺跡と卯ノ木南遺跡の
遺跡間接合資料（S=1/3）

第29図　押圧縄文土器期の主要石器群と出土分布図

4　編年的位置付け

本遺跡は、尖頭器石器群と押圧縄文土器群の二者が共伴するか否かが問題となった経緯がある。今回の調査においては、明確に共伴・非共伴を示す層位的事例は確認できなかったが、以下４点により、両遺物群を分離する根拠の予察としたい（第30図）。

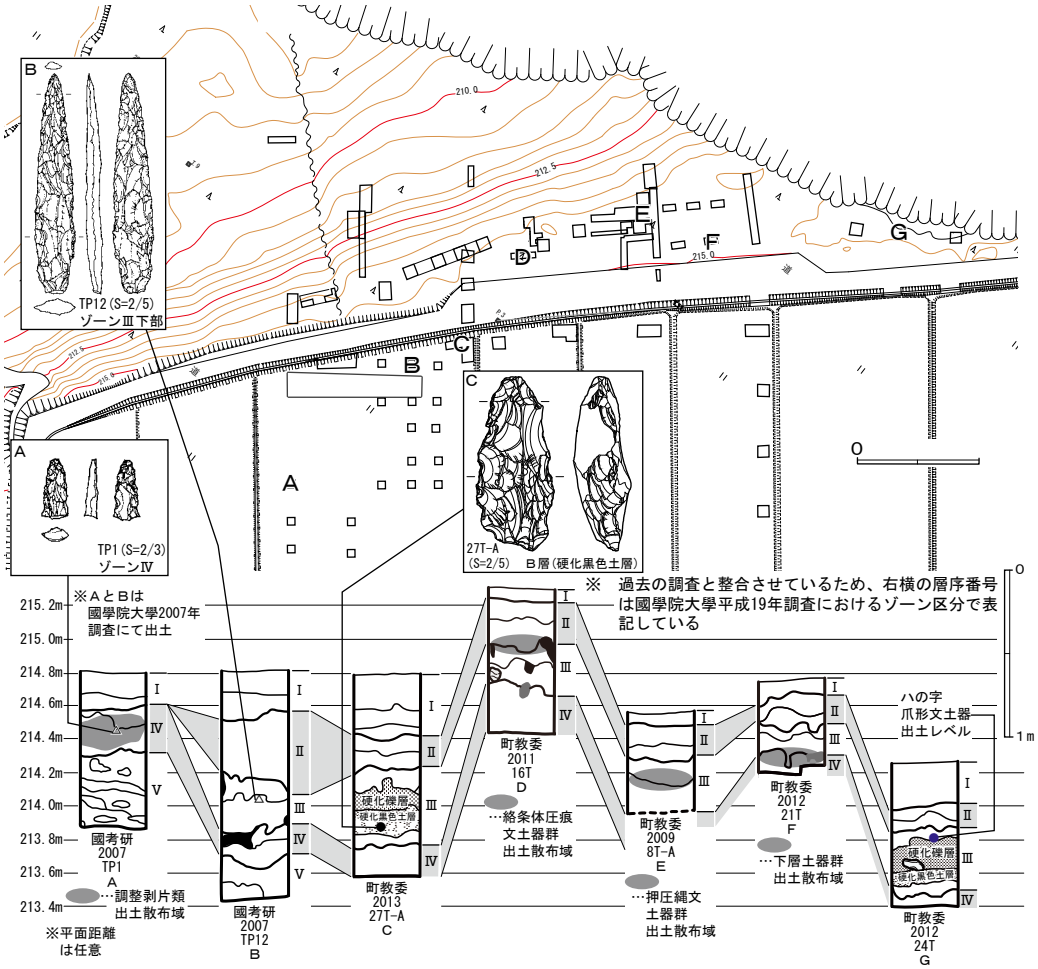
① 押圧縄文土器群集中範囲に尖頭器やポイント・フレークが伴わず、石器群の顔付きがＡ地点出土の尖頭器石器群とは大きく異なっていた点。

② 尖頭器石器群が出土する下部漸移層よりも上位に押圧縄文土器群が出土した点。

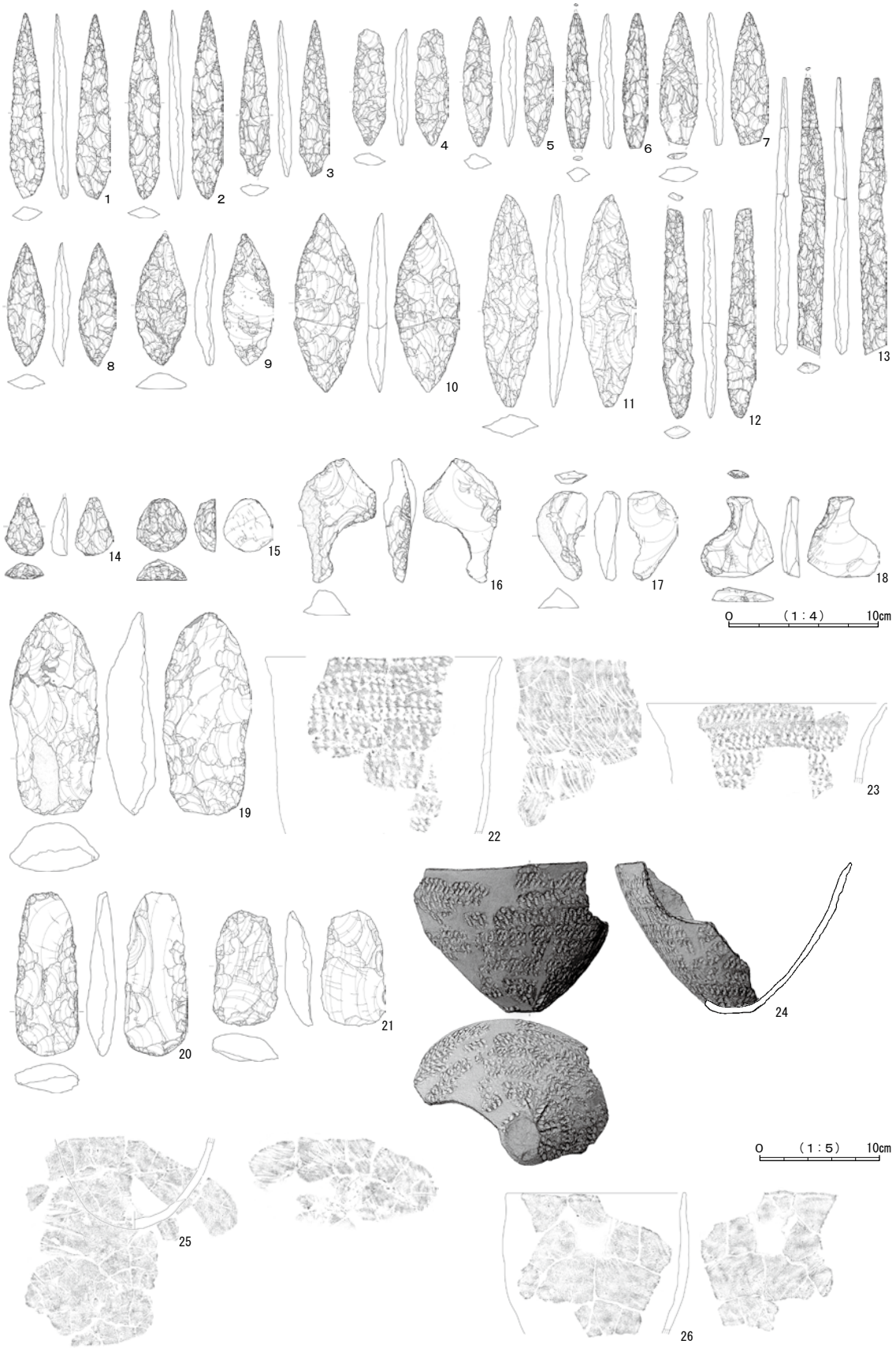
③ 低地部（浸食谷）において、下部漸移層（尖頭器石器群出土層位）と上部漸移層（押圧縄文土器群出土層位）の間に硬化礫層が挟在していた点。

④ 硬化礫層の直上に出土する不定形石器と卯ノ木南遺跡から出土する不定形石器が遺跡間接合する点。

Ｂ地点では草創期以外にも幾つかの土器群のまとまりが確認されている。縄文時代草創期ほどのまとまりをもった出土状況ではないが、早期中葉（押型文土器）・早期末葉（外内面に条痕調整を持つ土器・繊維を含む土器）・前期末葉～中期初頭の一群などが出土している。こうした他時期の遺物群は、第４～７次調



第30図　層序対比と主要出土遺物との関係

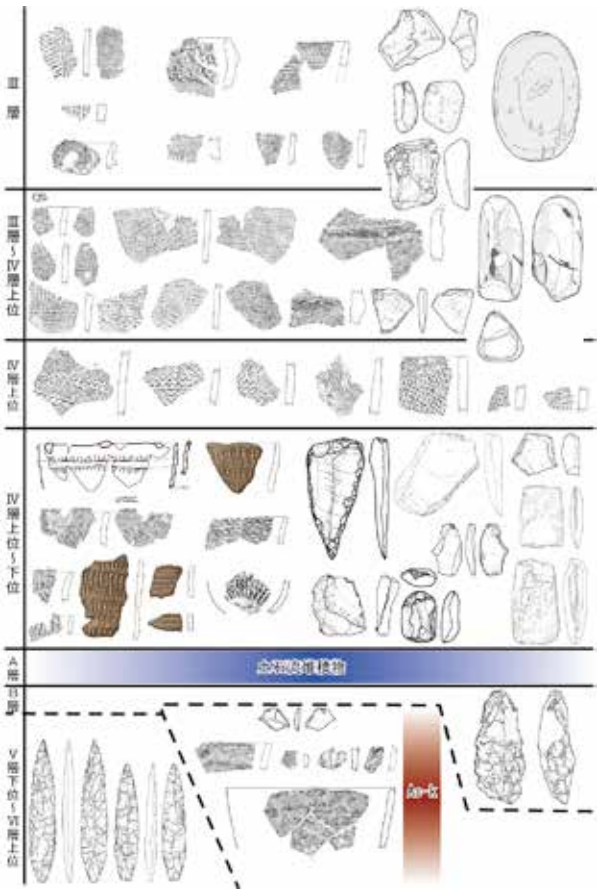


第31図　第１・２次調査出土の遺物（石器 S=１：４、土器 S=１：５）

査でも確認されている。他時期の明確な石器群は認識できないが、早期後半と推定できる三角稜磨石は各調査で１点出土している。

本ノ木遺跡の活動変遷を、層位と合わせたのが第32図である。Ⅴ層下位～Ⅵ層上位にAs-Kが堆積し、その上層に崩落礫層が堆積する。シルト層出土土器の地点には崩落礫層が明瞭な形で堆積しないため、崩落礫層との関係性は不明確だが、Ｂ地点のⅤ層中には崩落礫層がブロック的に混在していることを踏まえると、崩落礫層の下位と捉えられる。この理解に関しては、尖頭器石器群においても同様である。

崩落礫層を挟んだ上位には押圧縄文土器群やそれに伴う石器群が認められ、Ⅳ層上位からは押型文土器が散見される。Ⅲ層～Ⅳ層上位には絡条体圧痕文土器や無文を呈する条痕文系土器が出土し、Ⅲ層中からは前期末葉～中期初頭の土器群が出土している。本遺跡はこのように、多時期の活動痕跡が重複している。

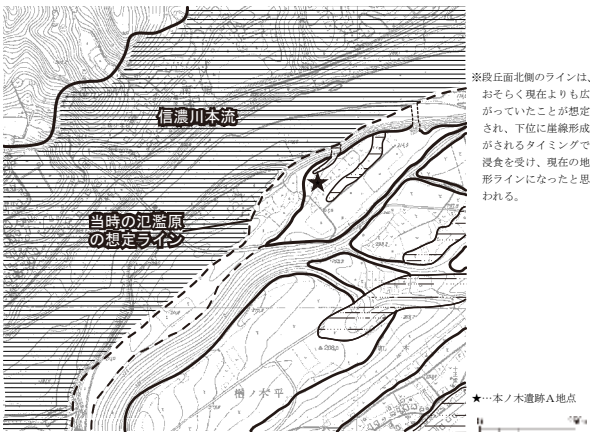


第32図　本ノ木遺跡の変遷図（遺物S=１/８）

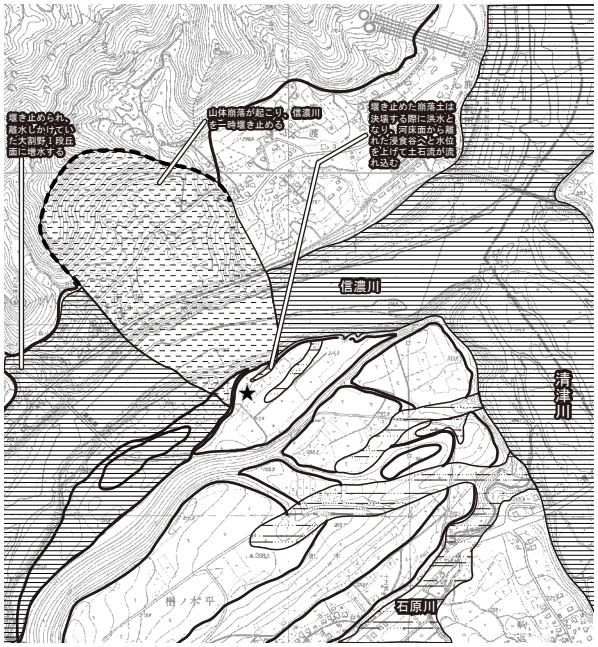
5　古環境と遺跡

A　本ノ木遺跡の古地形変遷

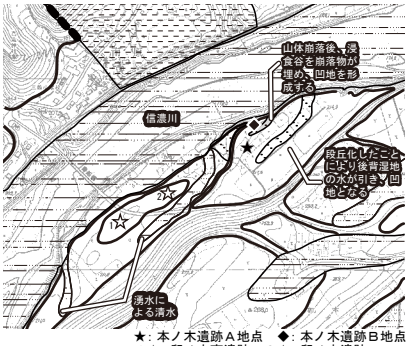
本遺跡にて確認されたクサレ礫を含む土層（崩落礫層）は､遺跡形成史を論じていくうえでの鍵層として注視されてきた。さらに、國學院大學の第７次調査によって約３ｍもの厚さを持つ硬化礫層が確認され、それが信濃川を一時期堰き止めるという災害的インパクトとも相俟って、本ノ木遺跡における時間的推移を語る重要な土層となっている。2012（平成24）年度の調査により、杉林内にのみ確認されていたクサレ礫を含む層が、様相を変えて水田面にも確認され、その分布範囲や当時の地形環境が問題視されている。



第33図　尖頭器石器群活動期（12,700±80・12,680±100 ^{14}C yr BP頃）の古地形想定図

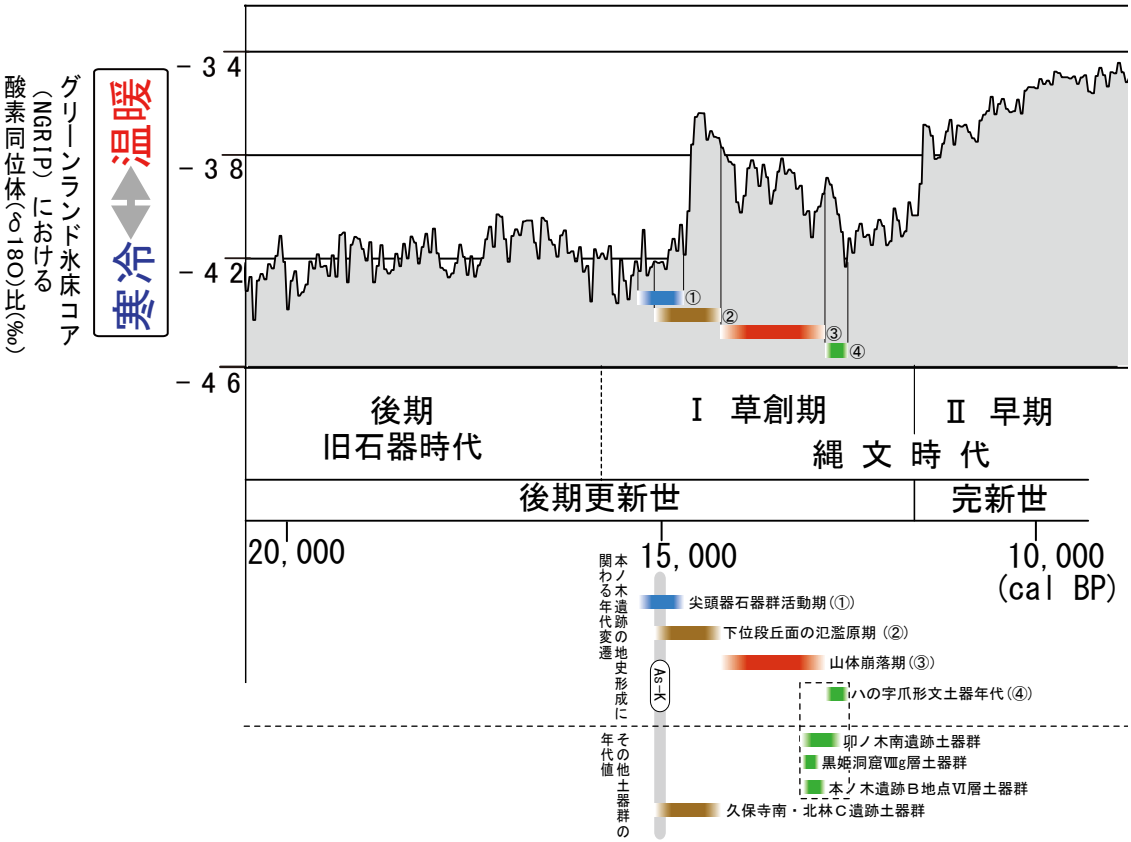


第34図　山体崩落期（12,755－12,530 cal yr BP以前）の古地形想定図



★：本ノ木遺跡Ａ地点　◆：本ノ木遺跡Ｂ地点
１☆：卯ノ木南遺跡　２☆：卯ノ木遺跡

第35図　押圧縄文土器活動期（12,755－12,530 cal yr BP以降）の古地形想定図



第36図　本ノ木遺跡の地史変遷と土器群の年代値

ここでは、崩落礫層の堆積状況や出土遺物・年代値から、古地形の推定復元を試みる。

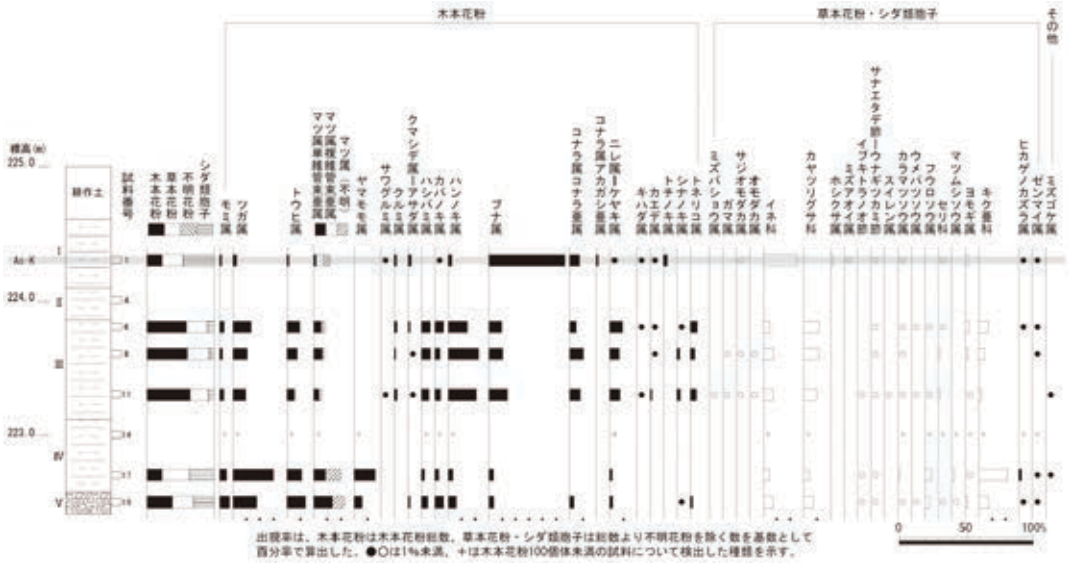
第33図は本段丘面が信濃川から離水を始めた頃で、およそ川辺で石器製作活動が行われていた。尖頭器石器群が集中出土するＡ地点は、過去の調査の結果、自然堤防状の微高地になることがわかっている。そして、その南側には後背湿地が広がっていたとされＡ地点以北には、浸食谷が開析されている。

第34図は、下位段丘面が信濃川からの離水を始め、氾濫原が形成されていく頃である。この氾濫原が、大割野Ⅰ段丘面の基礎となり、水が被るような環境であったと考えられる。人類活動的には隆起線文土器の年代と整合し、本ノ木遺跡での活動は認識されていない。その後、12,755－12,530 cal yr BPに先行して、信濃川対岸からの山崩れという大災害に見舞われる。この崩落堆積物は信濃川を堰き止めるように埋積し、対岸から下位段丘面の崖線際まで延びている。信濃川を堰き止めることにより、本ノ木遺跡よりも上流側は湖のような環境が形成されたと想定できる。この崩落堆積物は、確認できた地点で最大2.6mもの厚みを持ち、本ノ木遺跡側の崖線際付近では堆積が薄くなっていく。

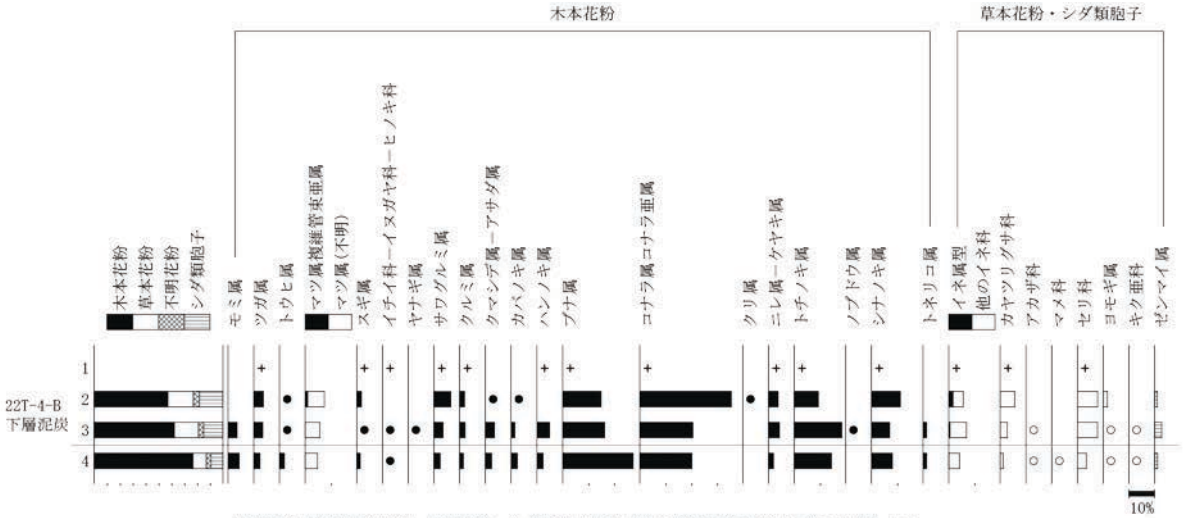
第35図は、大割野Ⅰ面が離水して陸地化し、卯ノ木遺跡や卯ノ木南遺跡において活動痕跡が残される頃である。およそ12,755－12,530 cal yr BP以降には、崩落で堰き止められた信濃川も河川浸食により開析され、本格的に大割野Ⅰ面が離水していく。その際に、ほとんどの堆積物は削平されてなくなるが、下位段丘面にのみ残る。“本ノ木遺跡Ｂ地点”における押圧縄文期の活動痕跡は丁度この時期にあたり、卯ノ木・卯ノ木南遺跡の面で段丘面が形成され、“本ノ木遺跡Ｂ地点”と類似する遺物群が出土している。

Ｂ　地史変遷と古環境の関係（第36図）

12,700±80・12,680±100 ^{14}C yr BPの年代値が、尖頭器石器群の年代を示しているならば、As-K降灰前後にあたり、古気候的には温暖期に至る前の寒冷期である。津南段丘における「卯ノ木低地」で行った花粉分析（第37図）によれば、As-Kテフラを含む層準から落葉広葉樹であるブナ属の花粉が多く産出している。針葉樹花粉は少なく、後に至る気候の変化と共に、冷温帯性落葉広葉樹林へと植生を変化させている。15,110－14,190 cal yr BP頃は、気候が温暖化する時期（ベーリング・アレレード期）の初期にあたり、津南段丘



第37図　卯ノ木低地の主要花粉化石群集の層位分布



第38図　卯ノ木南遺跡隣接地泥炭層の花粉化石群集

周辺の隆起線文土器群の年代値とほぼ整合している。温暖化と共に、植生は落葉広葉樹へと変化する。山体崩落期もこの温暖期にあたり、再び寒冷化する時期（ヤンガー・ドリアス期）のおよそ直前期まで年代幅が認められるが、明確なタイミングは不詳である。

およそ12,755－12,530 cal yr BP以降は、主に北半球で再び寒冷化が起こる。津南段丘での該期は、およそ寒冷化する初源期にあたる。植生は、卯ノ木泥炭層や卯ノ木南隣接地泥炭層（第38図）で、その様相が捉えられる。寒冷化するものの、植生が針葉樹へと戻るのではなく、ブナ属やコナラ属などの落葉広葉樹の花粉化石が多く産出されている。

6　歴史的価値

本ノ木遺跡の第３次以降の確認調査では、Ａ地点で第１・２次調査トレンチ位置を確認し、杉林である段丘北端部のＢ地点で遺物包含層の安定的な広がりを確認した。これらの範囲には､縄文時代草創期の尖頭器製作跡（Ａ地点）や押圧縄文土器期の活動域（Ａ・Ｂ地点)、Ｂ地点では人為的遺構と考えられる立石や列石を検出した。遺構の帰属時期は包含層位から押圧縄文土器期と考えられる。さらに、早期の小規模活動（Ａ・Ｂ地点）や前期初頭・中期初頭以降の小規模活動（Ｂ地点）が認められた。本遺跡は単一時期の形成ではなく､性格や時期が異なる活動の重複遺跡であり､それらの活動痕跡が地史変遷の中で理解されたことも成果の一つである。その中心的活動が、縄文時代草創期の尖頭器製作活動と土器による煮沸活動である。

本ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡・卯ノ木遺跡及び対岸の田沢遺跡・壬遺跡は、一部活動時期を重ねながらも、縄文時代草創期における活動変遷を連綿と繋げていくことができる。こうした小範囲で活動の変遷過程を追える地域は全国的にも認められず、これらの成果を織り交ぜることで、鮮やかで立体的な変遷過程を描き出すことが可能である。よって、これらの遺跡を「時間変遷で連鎖する遺跡群」と評価し、マクロ・ミクロな地形変遷史と活動動態の詳細な検討と共に、一体となる遺跡群として捉えるべきと考える。

第Ⅴ章　　田沢遺跡・壬遺跡

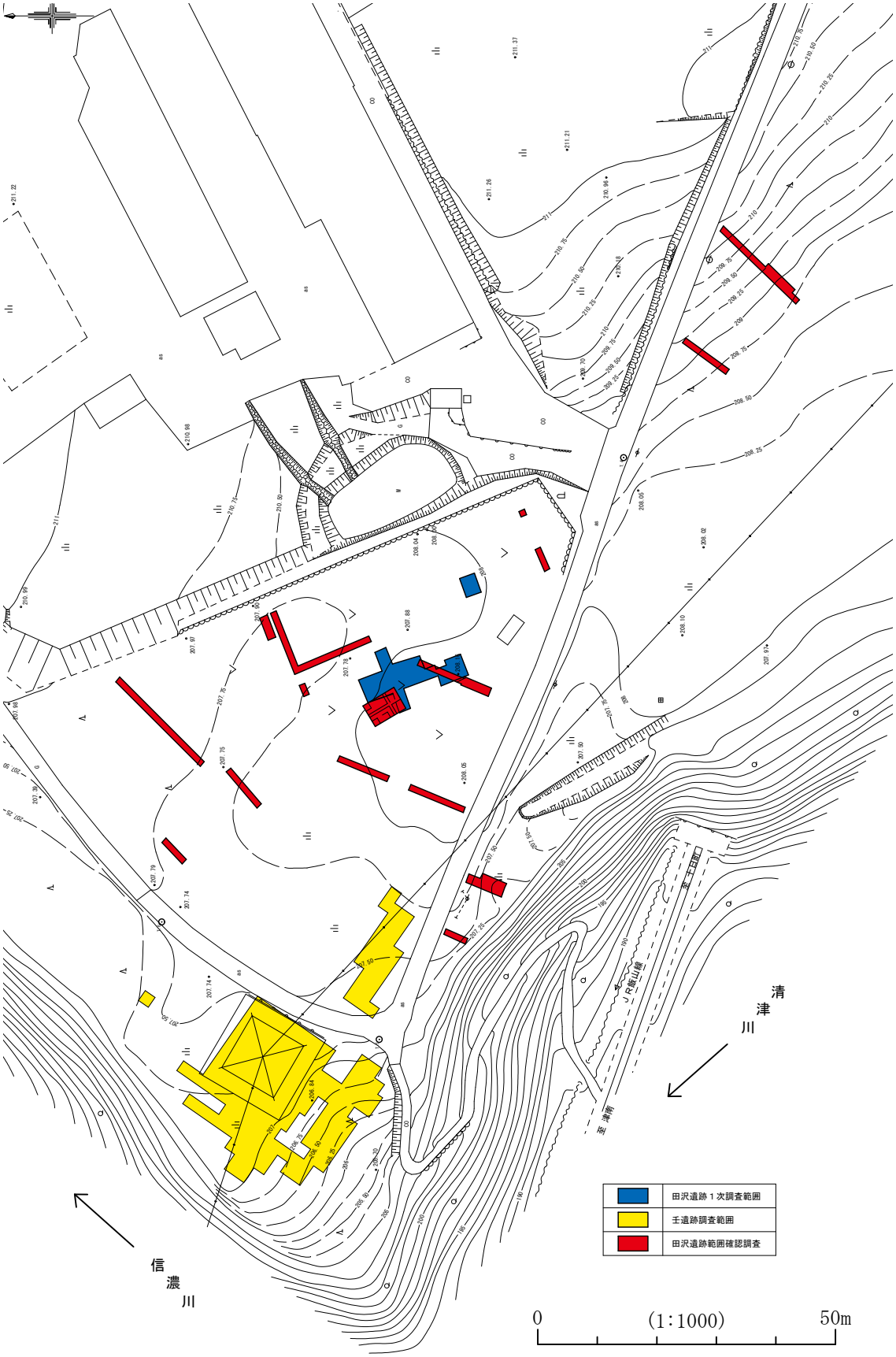
1　遺跡の立地

田沢遺跡は新潟県十日町市干溝字中林ニ431-６ほか、壬遺跡は新潟県十日町市干溝字中林ニ429-１ほかに所在する。信濃川と清津川の合流点から北東へ約200mの信濃川及び清津川の右岸段丘上に位置し、標高は約206～208m、信濃川との現河床面との比高差は約31～33mを測り、現況は畑地・山林である。田沢遺跡は北緯37度03分05秒、東経138度41分09秒、壬遺跡は北緯37度03分06秒、東経138度41分07秒である。両遺跡は隣接するが、約１mの段丘面の段差がある。

田沢遺跡と壬遺跡が立地する段丘面は変化の多い地形上にある。南東→北西方向に流れる清津川本流とほぼ平行に自然堤防上の微高地が観察でき、田沢遺跡の1968（昭和43）年の第１次調査範囲はこの自然堤防上にあることが確認されている。田沢遺跡の第２～10次調査では、自然堤防を一つの基準として、①１次調査範囲（自然堤防上）より内側の内陸範囲、②自然堤防上の範囲、③自然堤防上より外側の清津川に向う範囲、④中林遺跡に隣接する範囲、という４つのエリアについて調査を行った（第39図）。壬遺跡の調査範囲は約20×20mであるが、自然堤防、流路側傾斜地、陸側（滞水域側）など、狭い範囲で微地形の変化を確認できる。

2　基本層序

田沢遺跡と壬遺跡の基本土層は、段丘面が形成される複雑な過程で起伏を伴う変化点が見られたことから、統一的な堆積状況を示すことは困難である。大きくは清津川の流れによる100～200cmの礫を含む礫層が基盤となり、その上部に堆積した土層で分類される。清津川とほぼ平行して段丘中央に土砂と礫を含む自然堤防が形成され、黄色砂質土や褐色砂質土、黒色腐食土がその上に堆積する。草創期の遺物は自然堤防直上から褐色砂質土にかけて検出された。一方で、自然堤防より内陸側は後背湿地側の堆積状況で、数回の洪水による土砂の流入や浸食が見られ、灰褐色砂質土や黄灰色砂質土、灰白色シルトが基盤礫層の上に堆積し、その後に厚く堆積した黒褐色土や暗褐色土中に早期の遺物が包含されていた。自然堤防より清津川側は、本流の流れによる自然堤防の浸食や土砂の堆積による小規模な自然堤防の形成が見られた。小規模な自然堤防上に黄灰色砂質土や黄褐色シルトが堆積し、草創期の遺物が包含されていた。その後に黒褐色土中に土砂や礫を含む洪水堆積物が堆積し、その上部の暗褐色土や黒褐色土中から早期末から前期初頭の遺物が検出された。



第39図　田沢遺跡・壬遺跡の調査区

第40図　田沢遺跡・壬遺跡における遺物分布

3　遺構と遺物

A　遺構

田沢遺跡の第２～10次調査では、自然堤防内側の調査は１・２・９～13トレンチで実施し、１・２・13・12トレンチで焼土が計４基検出されている。検出面は基本土層Ⅱ～Ⅲ層中である。自然堤防上の調査は４・５トレンチで実施したが遺構は検出されていない。自然堤防外側の調査は６・７・14・15トレンチで実施し、７トレンチで柱穴が２基検出されている。検出面は基本土層５層上面である。中林遺跡隣接地の調査は８・16トレンチで実施したが遺構は検出されていない。田沢遺跡第１次調査においては、２か所の遺物集中範囲のほかに遺構は検出されていない［鹿又ほか2018］。壬遺跡ではピット状遺構７基、焼土12基、配石２基などの遺構が検出されている［小林編1981・1983等］。

田沢遺跡の第２～４次調査においては、①詳細な調査範囲がわからない第１次調査範囲を特定する、②遺跡の広がりを確認するため新たな遺物集中範囲を探索する、③遺跡が立地する範囲の地形や堆積土層を確認する、の３点を目的に調査を行った。第５次調査以降は、上述した②と③を主目的として実施した。調査にあたっては、縄文時代草創期の遺構が乏しいため、遺物を取り上げて遺跡の内容を知る必要があるが、そのことにより遺跡自体が消滅してしまうことにならないよう留意した。

B　遺物

田沢遺跡の第２～10次調査では、縄文時代草創期、早期、前期、中期の土器が出土し、多時期にわたる人々の活動痕跡が確認された。出土土器の総点数は414点で草創期323点、早期87点、前期３点、中期１点であり、草創期以外の出土遺物の点数は非常に少なく、小規模な活動痕跡を残しただけといえる。自然堤防内側の調査では、１・２トレンチから草創期の隆起線文土器１点、早期の押型文土器48点、尖頭器１点などが出土している。10・13トレンチの遺物の出土状況は散漫であった。９トレンチから早期の押型文土器１点、早期末葉の繊維土器２点などが出土し、11トレンチから石鏃未製品１点、加工痕のある剥片１点、縦長剥片２点が出土している。自然堤防上の調査では、４トレンチから草創期の隆起線文土器15点、草創期後半の押圧縄文土器１点、尖頭器７点、石鏃２点、加工痕のある剥片３点などが出土している。５トレンチから深掘りを行った範囲を中心に石器が集中して出土している。自然堤防外側の調査では、15トレンチから草創期前半の微隆起線文土器57点、彫器１点、石鏃１点、加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片１点などが出土している。７トレンチから草創期の微隆起線文土器１点、尖頭器１点、加工痕のある剥片１点などが出土している。６トレンチから草創期の爪形文土器61点、押圧縄文系土器174点、早期末～前期の土器１点、石鏃２点、加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片１点などが出土している。14トレンチから草創期の土器８点、早期末の土器36点、石鏃１点などが出土している。中林遺跡隣接地の調査では、８トレンチから草創期の隆起線文土器２点、前期の土器１点、中期の土器１点、加工痕のある剥片５点、使用痕のある剥片２点などが出土している。16トレンチから土器は出土しなかったものの、草創期に帰属する使用痕のある剥片１点などが出土している。主要な遺物を第43図に示した。田沢遺跡第１次調査では

縄文土器284点のほか、尖頭器28点、打製片刃石斧５点、スクレイパー10点、ドリル１点、石核７点、二次加工ある剥片５点などの石器が出土している（第42図）。土器は縄文時代草創期に帰属し、隆帯文土器と細隆起線文土器が特徴的である。他の時期の土器片は含まれない。

壬遺跡においては、縄文時代草創期、早期、前期、中期、後期以降の土器が出土し、多時期にわたり人々の活動痕跡があることが確認されている。中でも、縄文時代草創期前半～草創期後半の土器･石器が約9,000点出土している。土器では隆起線文土器、微隆起線文土器、爪形文土器、円孔文土器、押圧縄文土器などが出土し、全国的に出土例の少ない円孔文系土器約1,400点がまとまって出土したことは、特筆すべきことである（第44図）。石器では石鏃、有舌尖頭器、尖頭器、局部磨製石斧、打製石斧、磨製石斧、掻器、削器、矢柄研磨器などが出土している（第45図）。

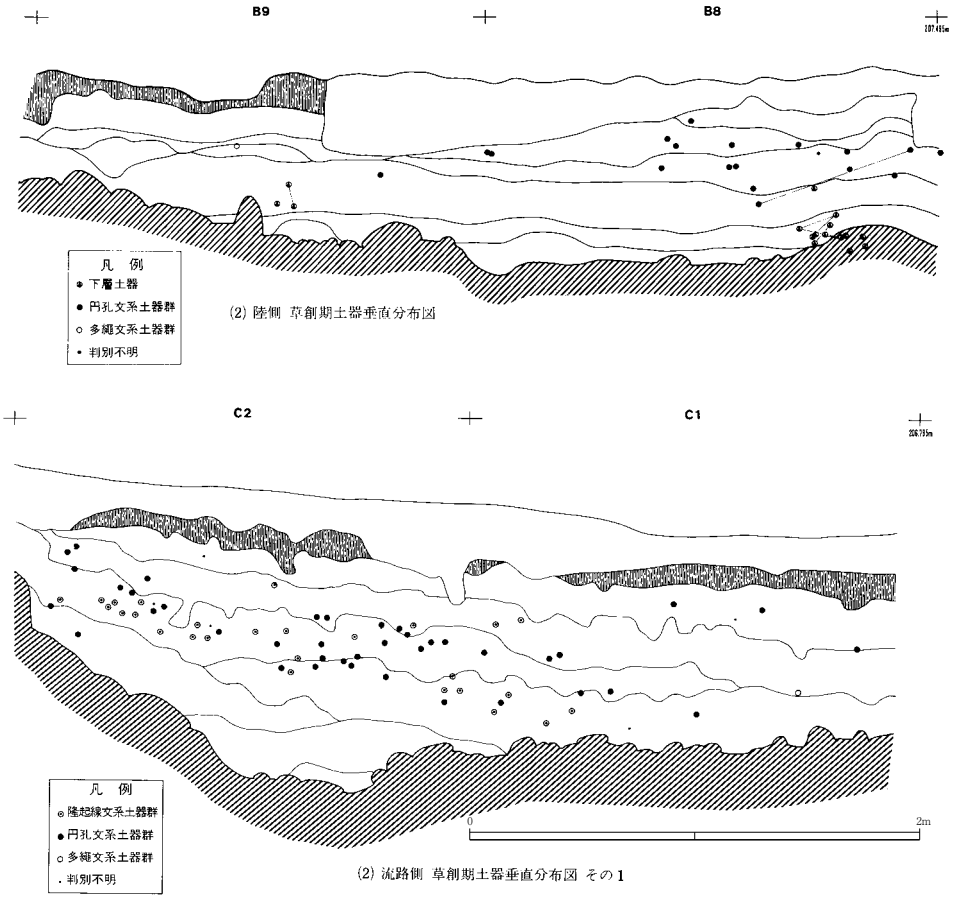
４　編年的位置付け

草創期の出土遺物は、隆起線文以前、隆起線文、押圧縄文系、多縄文系という概説的な区分に当てはめてみると、田沢遺跡では隆起線文以前と多縄文系の回転縄文以外は確認されていることがわかる。壬遺跡では基盤礫層直上で無文土器（壬下層土器）が出土し、間層を挟んだ上層部から隆起線文土器や爪形文土器、円孔文土器が出土している（第41図）。

隆起線文土器群は、佐藤雅一による４段階区分編年［佐藤・今井2011］で考えた場合、第１次調査で出土した特徴的な隆帯文土器や隆起線文土器、今回の範囲確認調査で出土した微隆起線文土器と、ほぼ隆起線文土器群は網羅されていると言えるだろう。また、微隆起線文土器に爪形文を文様要素として加える一群は、隣接する壬遺跡で見られ、今後より細分される可能性を残している。今回の調査で中林遺跡に隣接すると考えられる範囲（８トレンチ）から、新たな隆起線文土器が出土したことは重要である。僅か２点のみの出土であるが、そのうちの１点には貼付粘土紐の幅が8.4mmと幅広い隆起線文が貼付され、隆起線文上には何らかの加飾が施されていることが確認された。貼付粘土紐の幅は、第43図18のように隆起線文の幅が約8.2mmある「梯子状」と呼ばれるような隆帯文土器や、久保寺南遺跡同質個体１で見られるような貼付粘土紐の幅が約9.4mmと比べても遜色ない隆起線文であるが、加飾手法などは全く異なる。

第43図８は15トレンチから出土した鉢形を呈する器形復元可能な微隆起線文土器で、口径は約12.5cm、推定高は約8.8cmである。口縁から胴部までの一帯構成、口縁は２条１帯で１条目が加飾隆起線文、２条目が微隆起線文、さらに胴部にかけて２条目と交差させて垂下する多条密接の微隆起線文を付し、胴部中央以下は無文部となる。口縁の隆起線文への加飾手法は、工具等により文様主軸の上下斜め方向から刺突を行い波状隆起線文として表現している。全国的にも例を見ない文様構成といえる。

また、田沢遺跡の第２～10次調査において爪形文土器と押圧縄文系土器が約４ｍの範囲からまとまって出土したことは注目される。６トレンチで出土した押圧縄文系土器２個体（絡条体圧痕文と自縄自巻）と爪形文土器２個体が、考古学的時間差として捉えられるかどうかについても詳細な検討が必要である。



第41図　壬遺跡における土器の層位的出土状況［小林編1983］

草創期の出土遺物を見ると、土器、石器ともに田沢遺跡と壬遺跡には共通性が認められ、6トレンチや14トレンチの遺物出土状況などから同一の遺跡である可能性が高い。土器の種類によって分布域が異なっていると解釈するべきではないかと考えられる。壬遺跡では円孔文系土器群がまとまりをもって出土しているが、今回の田沢遺跡の範囲確認調査では出土していない。上述のように微隆起線文土器に爪形文を文様要素として加える一群が壬遺跡出土資料にあることも注意しなければならない。円孔文系土器の類例は、福井県鳥浜貝塚［鳥浜貝塚研究グループ編1985］、埼玉県西谷遺跡［栗原・小林1961］、埼玉県橋立岩陰［芹沢ほか1967］、埼玉県宮林遺跡［宮井1985］、栃木県大谷寺洞窟［塙1978・1979］、長野県湯倉洞窟［永峯ほか2001］、長野県仲町遺跡［鶴田・谷ほか2004］など、関東・中部地方を中心とした東日本一帯に広がりを見せている。谷口康浩［1988］は隆起線文→円孔文系→押圧縄文系という編年で位置付けている。爪形文土器の編年的位置付けやそれぞれの土器に伴出する石器群についても未確定であり、今後の検討課題である。

5　古環境と遺跡

田沢遺跡の第2～10次調査により、田沢遺跡、壬遺跡が立地する段丘面の古地形は非常に複雑であるこ

とが確認された。段丘面は平らではなく、段丘礫層上に自然堤防を形作る土砂の堆積・浸食、川の流水による土砂の安定した堆積、洪水等イベントに伴う土石流堆積物の堆積や浸食等、様々な要因の繰り返しで形成されることがわかった。信濃川や清津川の離水には土地の隆起や下刻作用など大きな要因が絡み、１ｍほどしかない比高差の段丘崖も同様の要因が関係していると推察される。

縄文時代草創期に絡む大割野Ⅰ面や本ノ木面など低位段丘面は特に動きのある複雑な古地形を示しており、その中で当時の人々は活動を行いやすい場所を占地したと考えられる。具体的には、河川漁撈などの活動が想定される［堤2005、鹿又ほか2018］。活動場所を示す遺物集中範囲は時期により異なることから、当時の人々の活動場所への意識の違いを伺うことができる。

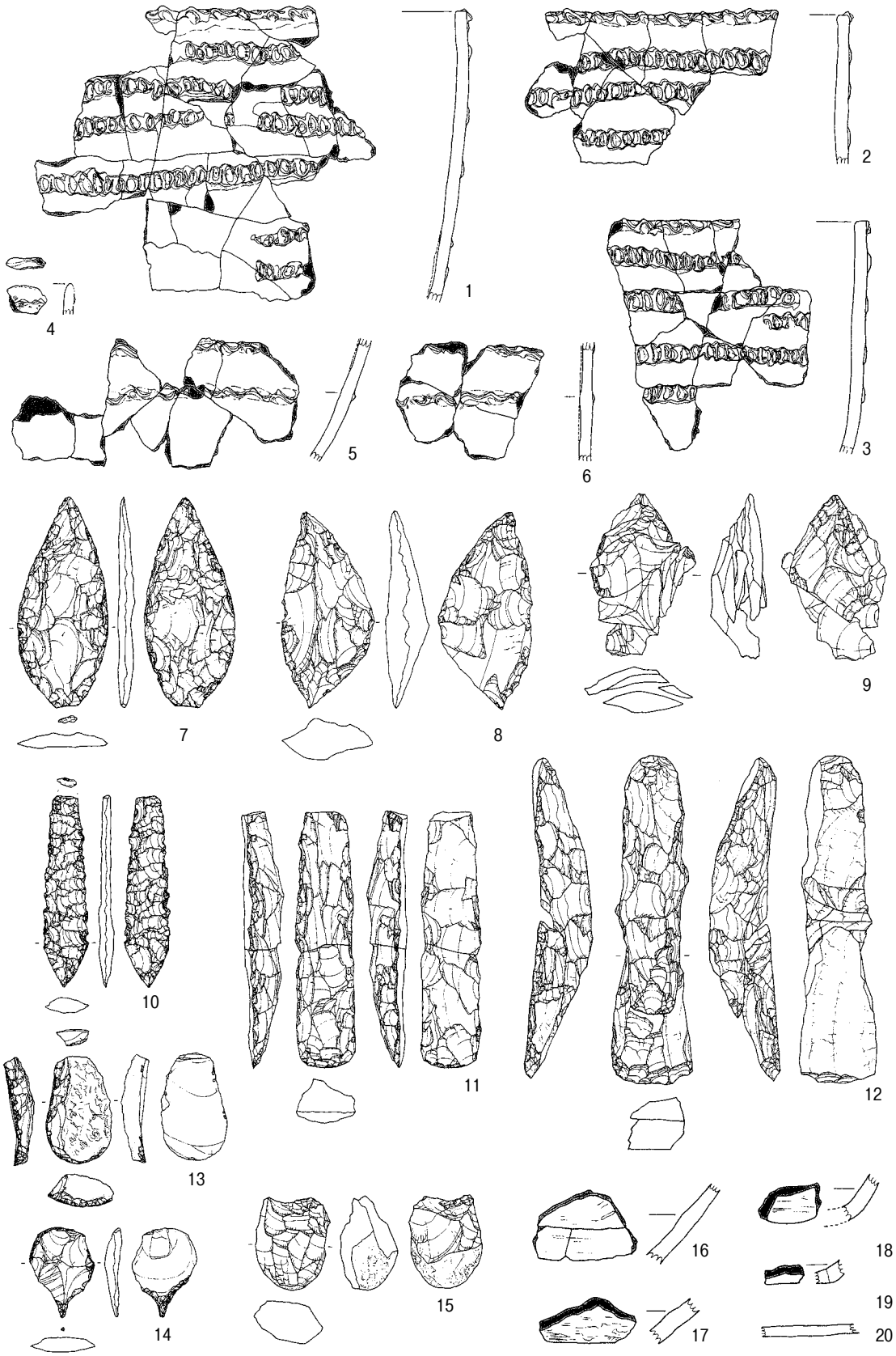
田沢遺跡の第２～10次調査では、ほぼすべてのトレンチから採取した堆積土の火山灰分析を行った。詳細は範囲確認調査報告書第Ⅴ章第１節に示したが、分析では明確な火山ガラスが確認できた堆積土はなかった［笠井・石原ほか2018］。壬遺跡の調査ではAs-YPKが確認されているが［小林編1983］、田沢遺跡では縄文時代草創期に関係するＡs-Ｋが二次堆積でも確認されなかったことから、段丘の離水時期についても今後さらなる調査と検討が必要である。

6　歴史的価値

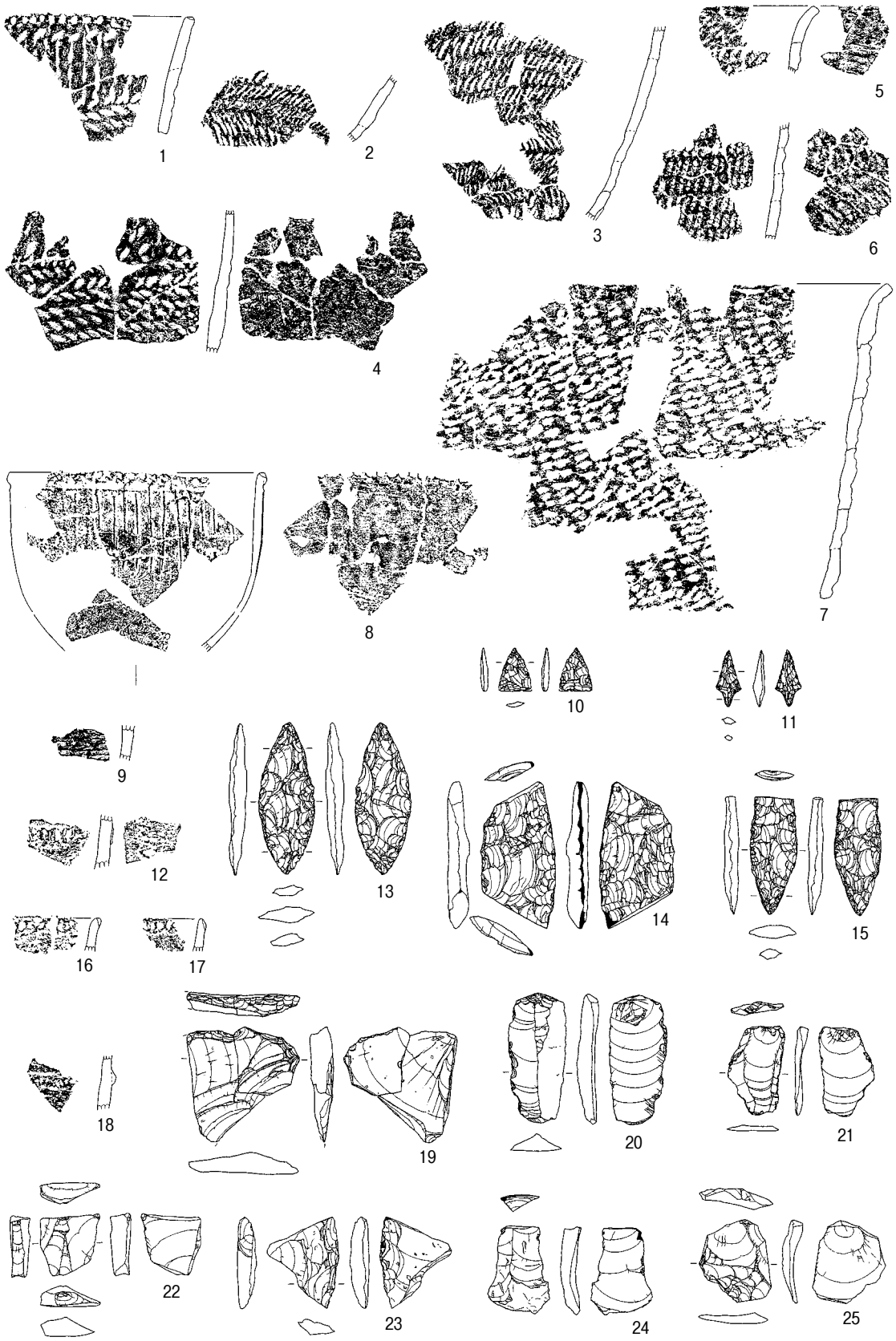
縄文時代の始まりは、人類史の革命と評価される土器出現にある。日本の草創期土器群は世界最古級の土器である。土器出現は縄文時代開始の文化的指標として評価され、時代区分の根拠となってきた。日本では約１万年以上の長きにわたり、縄文文化と呼ばれる大陸とは異なる新石器時代が展開している。縄文文化は自然と共生し、気候変動を経験しながらも緩やかな発展をとげ、後半期には高度な狩猟採集栽培社会へと成熟していったと評価されている。縄文土器の中核的な用途は煮炊きであるが、衛生的・栄養学的な効果が大きく、植物食のアク抜きや保存、魚貝類の大量処理などにも有効であったと考えられている。

土器出現期の遺跡立地に見られる特徴の一つとして、河川低地への強い指向性が挙げられ、信濃川上流域の草創期遺跡群はその傾向が顕著である。土器製作の技術革新が、いつ、どこで、何の目的で行われたのか。それがどのように展開し、世界的にも類を見ない独自な新石器時代をなぜ日本が歩んだのか。そのような課題について、土器出現期から多縄文系土器群までの変遷を追うことができる信濃川上流域の草創期遺跡群を通して調査研究を続けていくことが重要である。縄文文化の形成過程を知ることは世界史的にも重要な歴史的意義がある。1993年秋に新潟で行われた日本考古学協会シンポジウム「環日本海地域の土器出現期の様相」は大きな成果があったが､その後の調査研究の進展や資料蓄積はめざましいものがある。

その一つが田沢遺跡であり、遺跡の範囲や内容がより明らかになり、今日的な分析手法による情報を加味した遺跡形成についても理解が進みつつある。信濃川上流域草創期遺跡群は共通した環境条件下で形成されたものであるが、清津川を挟んで田沢・壬遺跡は十日町市に、本ノ木遺跡は津南町に、と２つの自治体に分かれて位置する。２つの自治体が連携し遺跡群として一体的に理解することで、各遺跡の在り方がより明確になると考えられる。その上で、周知活用においても広域に広がるこれらの遺跡の探訪ルートやイベントを企画・整備することで縄文文化の発祥の奥深さとその意義を一体的に発信することができる。

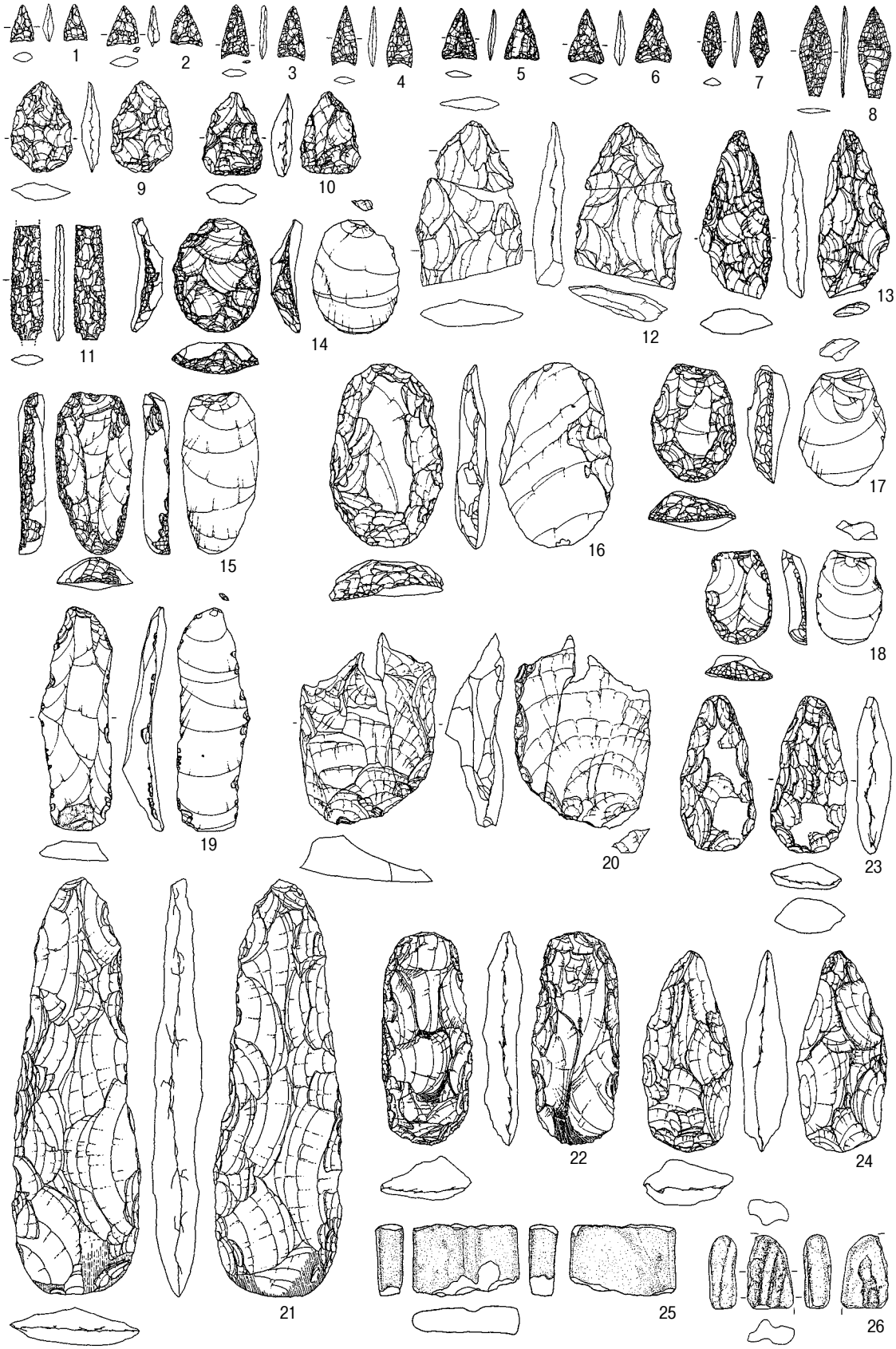


第42図　田沢遺跡　第１次調査出土資料（S=１：３）



第43図　田沢遺跡　第２～10次調査出土資料（S=１：３）

第44図　壬遺跡　出土土器（S=１：３）



第45図　壬遺跡　出土石器（S=１：３）

第Ⅵ章　　総　括

1　遺跡群の編年的位置と年代

A　本ノ木遺跡の位置付け

（1）第１次・第２次調査における遺物の出土層位

本ノ木論争の発端は、遺物出土層位の理解の相違にある。報告書の刊行によって、第１・２次調査の図面や記録等の基礎資料が提示され､その後の調査によって新たな情報がもたらされた。これらもあわせて、第１次調査と第２次調査における層位の捉え方を整理することとしたい。

第１次調査では、表土下層（２層）～準ローム層（３層）からポイント187点、其の他の石器28点、土器、ローム層（４層）からポイント25点、其の他の石器１点、礫層（６層）直上の黒色土からポイント４点、スクレイパー様の石器１点、石片15～16点が出土したとされる。その上で、２・３層から出土した石器と４層から出土した石器の接合関係が確認され、両者が「同じ条件のもとにあった」とした。さらに２～４層と６層直上の石器は何ら相違を示しておらず､「いまでこそ層位的に異ったあり方を示しているけれども、かつてはひとつの同じ文化層の中に含まれていたと考えられる。」と結論づけた。そして、礫層（６層）直上で部分的に認められた黒色土が「当時の生活面と何等かの関係を持っていたのであろうと思われる」とし、２～４層の遺物はここから後世の攪乱により地点・層位が変更されたと考えた。

第２次調査では､第１次調査と同様の堆積状況が確認されている。「表土下１ｍから２ｍのところに礫層がある。その上に40cmくらいの砂と粘土の互層があり、その上に１ｍ前後の黄色土層がある。この上に30cmくらいの表土がある。遺物は表土の下部に多く､黄色土層に10cmか20cmもぐり込んでいることもある。」と報告された［山内・佐藤1962］。この記載を第１次調査の記録を対比すると、「礫層」が６層、「砂と粘土の互層」が５層、「黄色土層」が４層、「表土」が２層に対応すると考えられる。なお、第１次調査の「ローム層」を「黄色土層」としているが、想定した形成年代の相違から、あえて「ローム」と表記しなかったのであろう。

そして､「当時の生活面は黄色土の上部から黒色表土の下部であって、この面には石器があり、河原から持ってきた石塊などがあり、木炭の細かい粉末が散在する。この面から下に黄色土に穴をあけたところがある。この中に遺物類が落ち込んでおり、黒色土と黄色土との混合したもので埋まっている。また同じく直径30cmくらいの小穴があり､この中には粘土が貯蔵されていた。この粘土はそれより下の礫層上の粘土層から取ったと思われる。この段丘の礫層との関連は全くない。」とし、礫層直上の遺物は、水田耕作時にあけられた穴に少量落ち込んだものとした。２度の調査の断面図では、ローム層または黄色土の上面から攪乱された痕跡を確認でき、この所見と整合する。

また、礫層直上の「黒色土」は他の調査では確認されておらず、その由来については慎重に評価すべき

であろう。ただし、芹沢が評価したように、礫層直上に遺物包含層が存在する可能性は否定できない。田沢遺跡や壬遺跡では、少数ではあるが礫層直上または礫層に食い込むように遺物が出土している。河原の段階または離水前後の段階の活動痕跡を想定しておく必要がある。

一方、ローム層・黄色土層と礫層との間には、シルトと砂の互層からなる水成堆積物が存在する。第１次調査で示された遺物の垂直分布図（第10図）では、ここにドットが記録されておらず、「遺物をほとんどふくまないロームと砂との互層がおおっている」とされる。第２次以降の調査でも、黄色土・シルトと砂の互層が記録されており、礫層が水成堆積に覆われたと考えてよかろう。芹沢がいうように、礫層直上の「多数」の遺物が、表土下部やローム層･黄色土層上部に持ち上げられたとすれば、この水成堆積物が大きく撹拌されるはずであるが、そのような痕跡を断面図からは確認できない。小林達雄［1975］が指摘するように、山内の層位認識がより実態に近いと評価すべきであろう。

したがって、礫層直上に遺物包含層が存在するのであれば、表土下部～ローム層・黄色土層上部のそれとは切り離して考えたほうが合理的に理解できる。この整理によって、尖頭器石器群と押圧縄文土器群が同層準から出土したことを推察できるが、両者の共伴関係について言及できるわけではない。

（２）山体崩落堆積物・浅間草津テフラと遺物包含層の関係

第６・７次調査では、信濃川対岸で発生した山体崩落による堆積物（ニセ礫層）が確認された。その厚さは３ｍにも達する部分もあり、信濃川を一時的に堰き止めた重大な災害であった。崩落堆積物は最初に発見されたＢ地点（段丘崖側の山林）のみでなく、Ａ地点（遺跡の中心部である水田）でも一部で確認されており（27Ｔ）、これを鍵層として検討することができる。

崩落堆積物の上位からは、押圧縄文土器群やハの字爪形文土器の出土が報告されているが、一方で崩落堆積物下位から出土した遺物は数少ない。第７次調査のＴ１で剥片［谷口･中村2013］、第７次調査の27Ｔで両面加工石器が出土したのみである。両面加工石器は尖頭器の未成品である可能性もあるが、現状では尖頭器石器群との明瞭な関係性をつかめるものではない［佐藤・佐藤・今井2018］。崩落堆積物を挟み、上下から遺物が出土することは確実なものの、下位から出土した石器の位置付けは明らかでない。なお、下位から出土した炭化物の年代測定結果は12,560±110 ^{14}C yr BPであり、山体崩落の発生時期を草創期に位置付けることができる。

縄文時代草創期の指標テフラである浅間草津テフラ（As-K）との関係についても詳細に検討された。第５次調査におけるAs-K検出レベルと尖頭器石器群の垂直分布を比較すると、尖頭器石器群の出土層位はAs-K下位と考えられる。崩落堆積物の下位からはAs-Kが確認されておらず、炭化物の年代測定結果を踏まえ、下位段丘面の離水時期はAs-K降灰以後、12,550 ^{14}C yr BP前後以前と推測された。

これらの調査成果を受け、範囲確認調査の報告書［佐藤・佐藤・今井2018］では「①押圧縄文土器群集中範囲に尖頭器やポイント・フレークが伴わず、石器群の顔付きがＡ地点出土尖頭器とは大きく異なっていた点、②尖頭器石器群が出土する下部漸移層よりも上位に押圧縄文土器群が出土した点、③低地部（浸食谷）において、下部漸移層（尖頭器石器群出土層位）と上部漸移層（押圧縄文土器群出土層位）の間に硬化礫層（山体崩落堆積物）が狭在していた点、④硬化礫層（山体崩落堆積物）の直上に出土する不定形石器と卯ノ木南遺跡から出土する不定形石器が遺跡間接合する点」を指摘し、尖頭器石器群と押圧縄文土器群を分離できる可能性を示した（第32図）。

以上のことから、尖頭器石器群と押圧縄文土器群は、異なる時期に位置付けられる可能性が高い。芹沢･

中山［1957］は、押圧縄文「土器と同型式のものを主体とする他の遺跡を調査したのち、はじめて正確な結論が与えられる」と指摘している。本ノ木遺跡と押圧縄文土器段階の卯ノ木南遺跡の間に、石器の接合関係が認められ、ある程度の時間的同時性が保証されたわけだが、卯ノ木南遺跡では尖頭器石器群が認められない。また、隣接地域における単純遺跡の様相［萩谷2017等］と比べても、両者が共伴するとは考えにくい。芹沢･中山は、「土器に伴う石器の有無をも検討すべき」と課題を指摘している。このことについて報告書［佐藤･佐藤･今井2018］では、押圧縄文土器群に伴う石器群に尖頭器は伴わず、不定形石器（スクレイパー類）を中心とし、わずかに両面加工石器やアオトラ石製の磨製石斧など加わることが示された（第29図）。押圧縄文土器に尖頭器石器群と異質な石器群が伴うことは、同時期の遺跡の状況とおおむね合致する。

ここで一応の結論を示したものの、第３次以降の調査成果と状況証拠の積み重ねによる仮説であることは否めない。これを、第１次・第２次調査で同層準から出土した資料に適用することには課題が残る。押圧縄文土器が､「この場所に一個体だけ発見された理由はわからない」という芹沢の疑問を解決できたわけではなく、恣意的に分離することで、土器と石器の「泣き別れ」［岡本2017］の状況を結論とするのは早計かもしれない。鹿又喜隆［2017］は、本ノ木遺跡における細身の本ノ木型尖頭器［橋本2012］の出土位置に関する検討を行い、押圧縄文土器との共伴率が高いことを指摘している。そして、本ノ木型尖頭器は押圧縄文土器に伴うと評価している。この所見は、第１・２次調査の成果を十分に読み解く作業の必要性を示唆している。これまで詳細が明らかでなかった第１・２次調査報告書の分析、単純遺跡の蓄積と検討に基づいた土器・石器の型式学的な検討、広域テフラとの層位関係の把握など、課題が残されていることを指摘しておきたい。

B　遺跡群の編年的位置付け

信濃川上流域には､清津川との合流点を中心に49か所の草創期遺跡群が密集する［佐藤2001］。これほど縄文時代草創期の遺跡が密集する地域は、全国的に見ても稀有であり、縄文時代の開始期を考える上で重要な地域といえる（第46図）。一方、本ノ木遺跡・田沢遺跡・壬遺跡・中林遺跡・卯ノ木南遺跡等、すべてが同時併存したわけではなく、時間軸の中で整理する必要がある。谷口康浩［2000］は、縄文時代草創期を１・２・３a・３b期に区分し、１・２期を前半、３a・３b期を後半とする。遺物群の変化の単位を極めてよく捉えた時期区分であり、これを参考に整理することとしたい（第47図）。なお、実年代は、１期が16,000-15,000 cal yr BP、２期が15,000-14,000 cal yr BP、３a期が14,000-12,000 cal yr BP、３b期が11,500 cal yr BP頃と考えられる［工藤2012］。

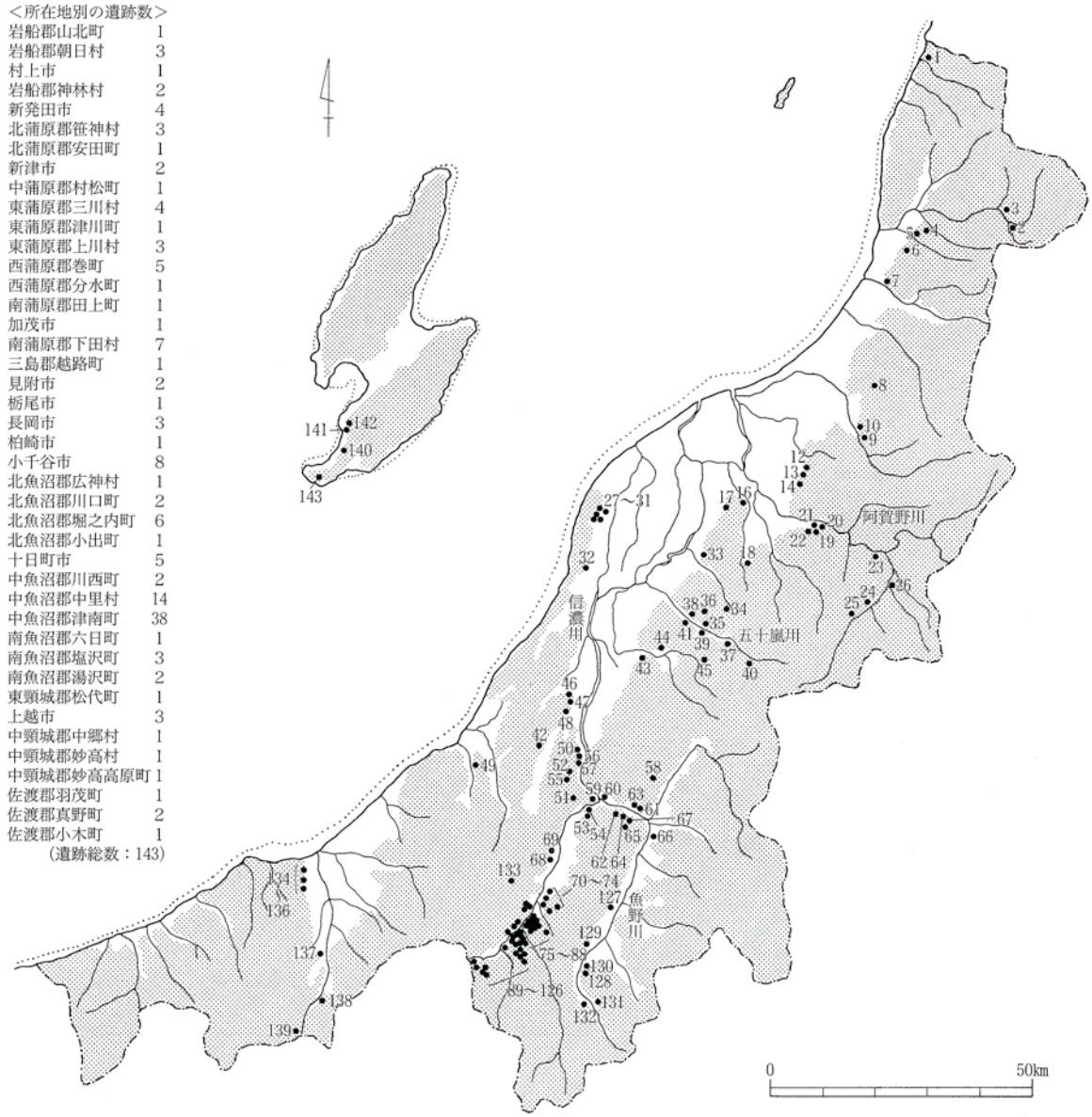
（１）１期　隆起線文土器段階以前

土器が伴わないことが多いが、無文土器が伴うことがある。石器製作技術は、石刃技術と卓越した両面調整技術が特徴的である。この技術構成は、先行する細石刃石器群、さらには尖頭器石器群からの脈絡の中で理解することができ［長沼2002、沢田2013a、佐藤ほか2017］、唐突に出現したものではない。いわゆる神子柴・長者久保石器群は、この段階に位置付けられ、細石刃技術が部分的に残存することもある。

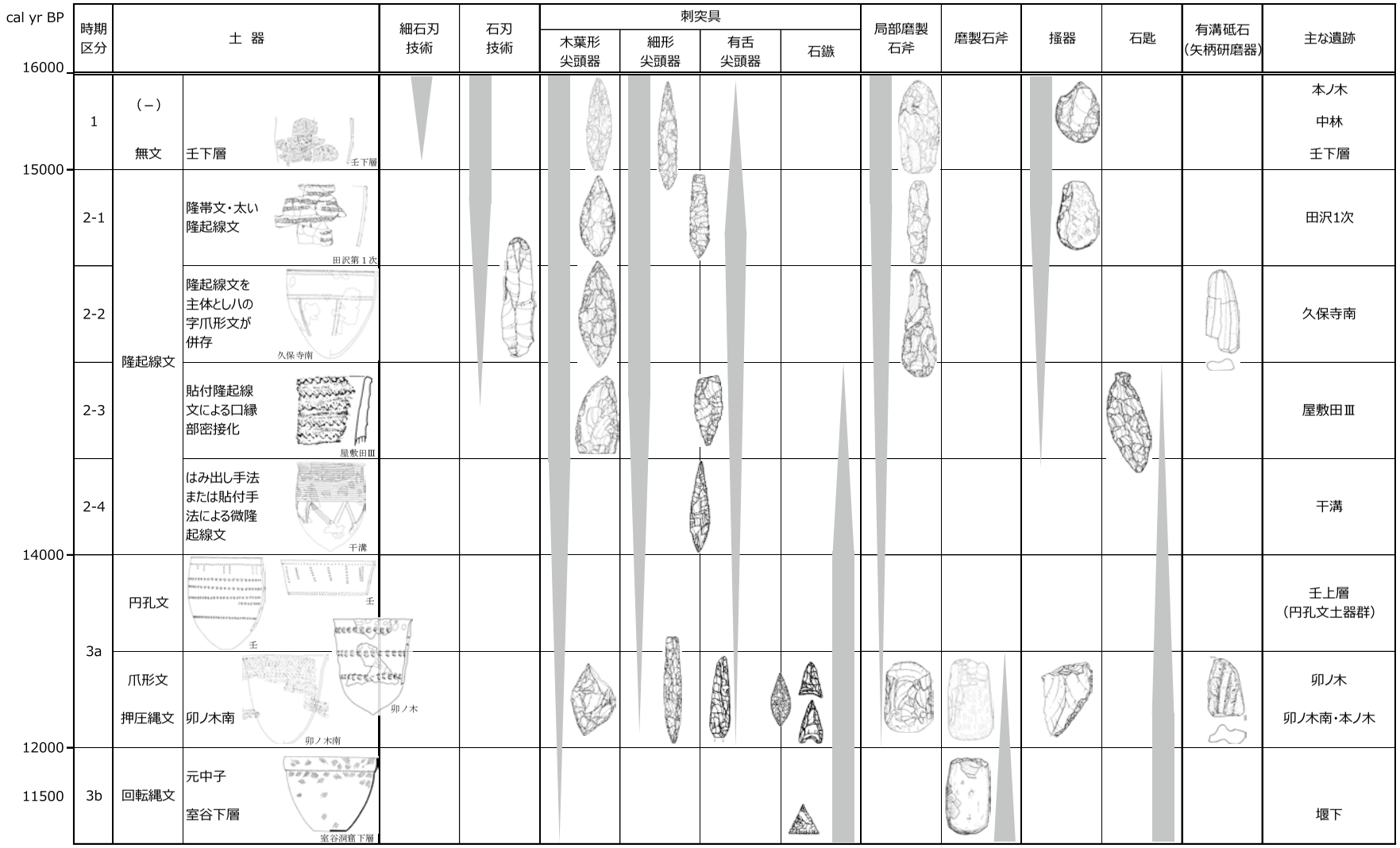
本遺跡群で、この段階に位置付けられるのは、本ノ木遺跡の尖頭器石器群と中林遺跡である。本ノ木遺跡・中林遺跡とも、尖頭器の製作に特化していることが特徴的である（第14･31図）。舌部を明瞭に作り出

した有舌尖頭器はまだ出現しておらず［岡本1999］、基部を逆三角形にした事例が目立ち、隆起線文土器段階以前に位置付けられる［白石2003］。尖頭器の製作に特化していることが特徴的であるが、槍の柄の加工との関連が想定されたノッチ（抉入石器）が特徴的に伴う。このほか少数ではあるが掻器や石斧が伴う［岡本1979］。

壬遺跡下層では、平底の無文土器が出土しており、「壬下層式」と呼ばれる（第44図21～25）。これが1期に伴う無文土器であるのか、有文土器の無文部の破片であるのか判断は難しいが、少なくとも壬遺跡上層（隆起線文土器・円孔文土器・爪形文土器）以前に位置付けられることは確かである（第41図）。また、田沢遺跡下層や屋敷田Ⅲ遺跡で出土している無文土器も、この段階に位置付けられる可能性が指摘されている［鹿又ほか2018、佐藤ほか2018］。



第46図　新潟県内における草創期の遺跡分布［小熊・立木2001］



第47図　本ノ木・田沢遺跡群における道具の変遷　（縮尺不同）

（2） 2期　隆起線文土器段階

隆起線文土器段階に入ると、遺跡数が急増する。本遺跡群では、田沢遺跡・壬遺跡・屋敷田Ⅲ遺跡・久保寺南遺跡等が、この段階に位置付けられる。佐藤雅一［2008b］の編年では4段階に細分しており、第1段階に田沢遺跡第1次調査（第42図）・壬遺跡（隆帯文・太い隆起線文）、第2段階に久保寺南遺跡（隆起線文を主体としハの字爪形文が併存・第48図）、第3段階に屋敷田Ⅲ遺跡（第20図）（貼付隆起線文による口縁部密接化）、第4段階に干溝遺跡と壬遺跡の一部（はみ出し手法または貼付手法による微隆起線文・第47図）をあてている。また、田沢遺跡（第2次以降）ではハの字爪形文を伴うものや微隆起線文も確認されており（第43図）、第1～4段階にまたがる幅広い時期の資料が存在すると考えられる。

石器製作技術は1期の技術を継承しているが、石刃技術は崩壊をはじめる。田沢遺跡は、土器の時期幅が広いと想定され、石器の様相も多様である。第1段階に位置付けられる第1次調査資料にまとまりを認めるのであれば、木葉形尖頭器・有舌尖頭器・石斧・掻器・石錐が組成の単位を示す（第42図）。このうち有舌尖頭器は、舌部が明瞭に作出されておらず、1期からの系譜の中で考えられる。剥片剥離技術は真正な石刃技術は認められないものの、縦長剥片を指向する。第2段階の久保寺南遺跡では、木葉形尖頭器を主体とする石刃技術が卓越しており、局部磨製石斧・掻器・有溝砥石（矢柄研磨器）を伴う。石刃技術は当期の資料の中では卓越しているものの、草創期後半に多い有溝砥石［栗島1986、橋本2018］が認められる。古相と新相の特徴が混在するような状況といえる（第48図）。第3段階の屋敷田Ⅲ遺跡では、石刃技術が明らかに衰退する一方、明瞭な有舌尖頭器が登場し、半月形石器・石匙・石錐が加わる（第20図）。1期からの技術の継承が薄れていることを示すとともに、縄文石器を代表する石匙が加わることは注目される。これらの石器群の様相は、佐藤雅一が示した土器編年と整合すると見てよかろう。

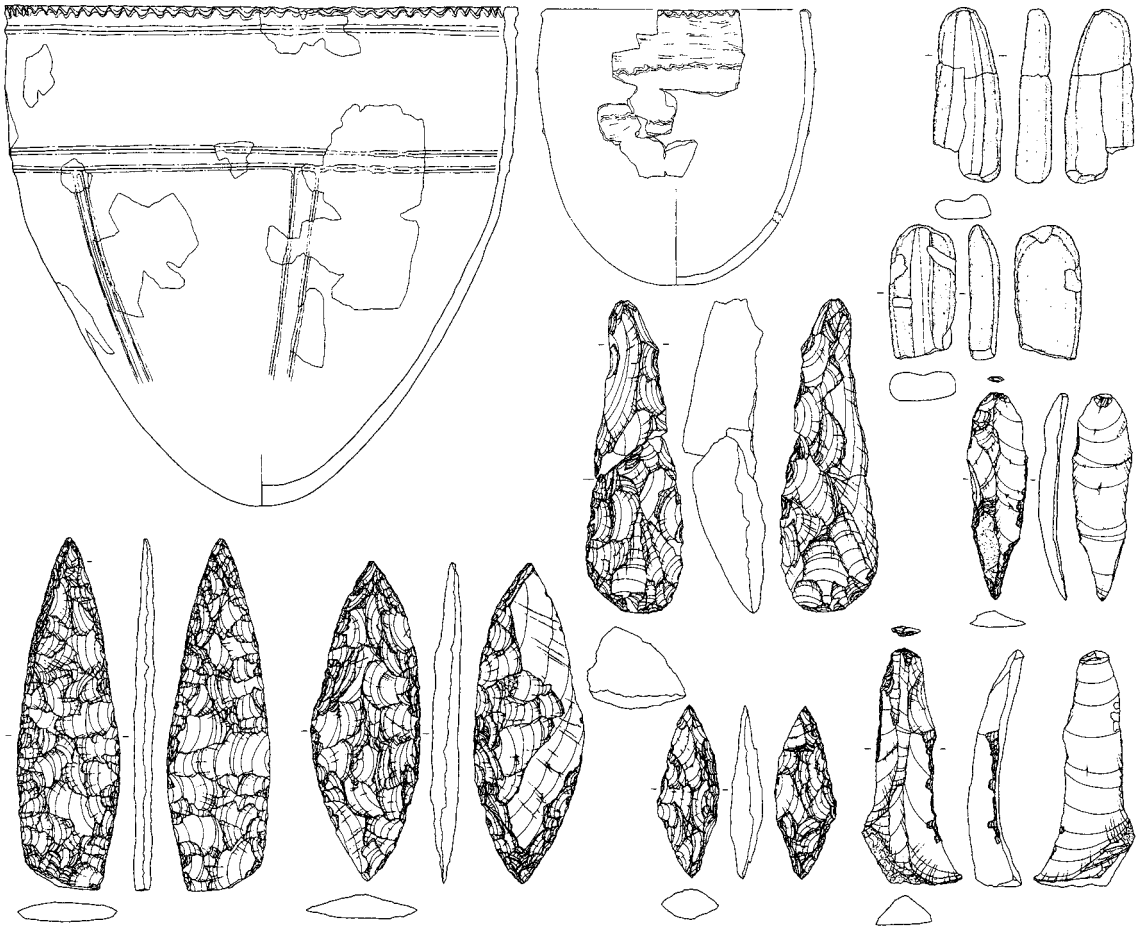
（3） 3a期　円孔文土器・爪形文土器・押圧縄文土器段階

当期の土器編年については、谷口康浩［1988・2008］が詳しい。円孔文土器は遺跡、福井県鳥浜貝塚、栃木県大谷寺洞窟における層位的出土例から隆起線文系に後続し、押圧縄文系に先行すると考えられ、「隆起線文系→円孔文系→押圧縄文系→室谷第Ⅰ群」という変遷観を示している。そして、爪形文土器の編年的位置に関して、押圧縄文土器との密接不離な関連性を指摘した。

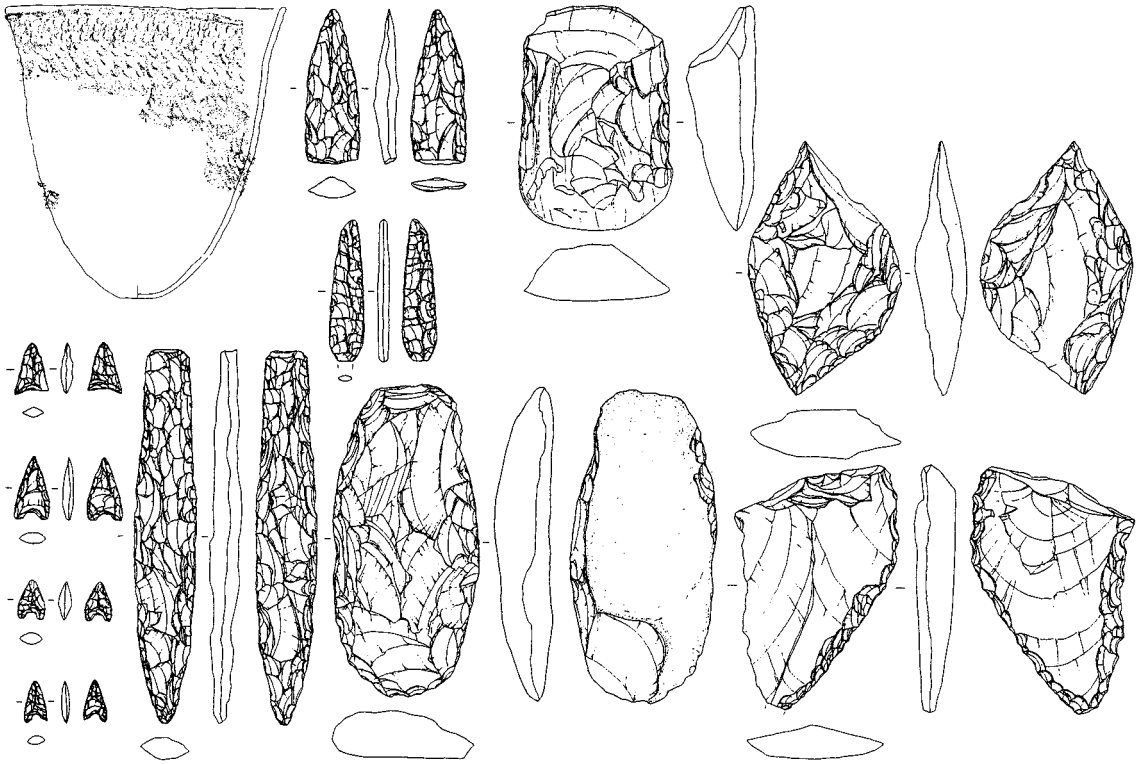
円孔文土器は、壬遺跡でまとまって出土している（第44図）が、全国的に見ても数の少ない重要な資料である。壬遺跡の円孔文土器は、ロシア・グロマトゥハ遺跡の資料と酷似しているという。口縁部にめぐる円形の貫通孔、プロポーション、製作手法、施文原体等が共通しており、両者の関係性が指摘されている［可児1992］。この土器群には三角鏃・長脚鏃・尖頭器・局部磨製石斧が伴出する可能性が指摘されている［小林編1981］。狩猟具に石鏃が加わる一方、尖頭器や局部磨製石斧といった先行段階の様相を残すことがわかる。

爪形文土器は、田沢遺跡・壬遺跡・卯ノ木遺跡等で確認されている。田沢遺跡では、爪形文土器2個体と押圧縄文土器2個体が近接して出土したが、共伴関係については検討を要する。

押圧縄文土器は、本ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡・卯ノ木遺跡・田沢遺跡・壬遺跡・おざか清水遺跡・小丸山遺跡等で出土している。佐藤達夫［1971］による「本ノ木式」で、微隆起線文土器と同じ型式学的特徴をもつものが含まれ、系統的な型式変化がたどれるとされたものである。谷口康浩［2008］は、押圧縄文土器を3段階に細分し、微隆起線文土器ないし円孔文土器に共通する型式学的特徴を残している一群を最も古い段階に位置付け、ここに本ノ木式が含まれるとする。押圧縄文とハの字爪形文が併用されることが



第48図　久保寺南遺跡　出土資料　（土器S=１：６、石器S=１：３）



第49図　卯ノ木南遺跡　出土資料　（土器S=１：６、石器S=１：３）

特徴とされ、本ノ木遺跡Ｂ地点と卯ノ木南遺跡で資料的まとまりがある。ここに伴う石器群は、本ノ木遺跡Ｂ地点では両面加工石器・磨製石斧・削器等（第29図）［佐藤ほか2018］、卯ノ木南遺跡では石鏃・細形の尖頭器・有舌尖頭器・局部磨製石斧・打製石斧・箆状石器・削器［笠井2008・桑原2017］とされる（第49図）。剥片剥離技術は、石刃技術や両面加工石器を石核とする技術は認められなくなり、旧石器時代から継続した技術構造が崩壊する様子を確認できる。なお、本ノ木遺跡Ｂ地点の磨製石斧は、北海道産のアオトラ石とされる（第29図10･11）。遺物群の系譜を考えるうえで重要な資料であるが、同時期に擦切技術は確認されておらず、慎重に取り扱う必要がある。

（４） ３ｂ期　多縄文土器段階

新潟県においては室谷下層式段階に相当する。この段階の遺跡は極めて少なく、当地域では堰下遺跡があるが、部分的な資料に留まる。県内で、資料的なまとまりをもって理解できるのは室谷洞窟下層である。この段階になると刺突具は「石槍や有舌尖頭器などが欠落し、石鏃に固定化し」、掻器は一定数あるものの不定形石器に比率が増加する。石斧や磨石類も少量ながら安定的に存在する［佐藤2007］。石斧は礫斧に変化しており、草創期に伝統的な局部磨製石斧は姿を消す。管理的な石器が減少し、臨機的な石器が急増することも当期の特徴といえる。変形を繰り返して使い続ける石器はほとんどなくなり、いわば「使い捨て」の石器が増加する。これと同時に、特定の石材（珪質頁岩・黒曜石）への固執は薄れていく。素材剥片の形態や剥離過程への「こだわり」が失われるとともに、在地石材でも対応できる二次加工重視の石器が台頭し、縄文的な石器製作技術［山田1985］へと移行する［加藤2016］。このような技術変化に伴い、石材の動態が大きく変化したことが推察される。当地域で遺跡が減少する背景は、技術変化に伴う石材動態の変化と関連して考えることができるかもしれない。

２　遺跡群の歴史的意義

Ａ　遺跡群周辺の環境

（１）立地環境

遺跡の立地環境については、本ノ木遺跡の第１次調査の段階から注視されてきた。芹沢・中山［1957］は、遺跡の形成時期を「本ノ木面の礫層が形成されていた当時」とし、「河原の比較的小高い部分が、彼らの住居地あるいは石器製作所となった」と指摘しているが、礫層直上に存在すると考えられた遺物包含層の再評価が必要となる。一方、田沢遺跡で礫層に潜り込むような状態で出土した石器は二次堆積資料と考えられるが、表面観察からは移動距離は長くないと推察される。すなわち、そこが生活拠点でないとしても、すでに生活領域の一部に組み込まれていたことを示唆する。壬遺跡においても、礫層直上から下層が検出されているが、遺物の点数は多くはないようである。これらを踏まえると、段丘礫層が形成された最終段階からその直後頃に、すでに土地利用が始まっていた可能性があるが、拠点となるような性格ではないと考えられる。

本ノ木遺跡では、礫層の上位にシルトと砂の互層が厚く堆積することが確認されており、その上位から大多数の遺物が出土したことは確かと見られる。礫層直上に遺物包含層が存在するとしても、遺跡の主体はシルトと砂の互層の上位にある。このことを踏まえると、河原の状態で遺跡が構築されたとしたとは考えにくい。「水成層に厚く覆われた段丘礫層直上に生活面が残されたという状況はほとんど考えられ」ず、「遺跡の形成時期を段丘礫層の形成直後ではなく、本段丘面が離水して直後」［谷口・深澤ほか2010］と考えることが適当であろう。

（2）古地形

本ノ木遺跡・田沢遺跡の確認調査では、古地形復元と遺跡立地の関係について検討がなされている［佐藤・佐藤・今井2018、笠井・石原ほか2018］。ここでは、その成果を要約し再掲する。

【本ノ木遺跡】

本ノ木遺跡では、遺跡と段丘の形成過程が詳細に検討されている（第33～35図）。尖頭器石器群の活動期（15,290-14,660 cal yr BP）に、本ノ木遺跡がのる段丘面が離水をはじめる。遺跡はその過程でできた自然堤防上に築かれ、尖頭器の製作が盛んに行われた（Ａ地点）。その南～東側には後背湿地が形成され、北側には浸食谷が開析された。尖頭器石器群の活動痕跡は、後背湿地と浸食谷の谷頭に挟まれた地点に当たる。15,110-14,190 cal yr BP頃には、信濃川の下方浸食と本ノ木面の隆起が起こり、段丘面北西際の崖線部が形成される。その結果、河床面とつながっていた浸食谷や後背湿地の開口部が河床面からやや離れる。下位段丘面が信濃川から離水をはじめ、氾濫原が形成されていく。この氾濫原が、大割野Ⅰ面の基礎となり、時折水が被るような環境であった。

12,755-12,530 cal yr BP頃には、信濃川対岸の山体崩落が発生し、本ノ木遺跡も影響を被る。この堆積物は信濃川を堰き止め、対岸（本ノ木遺跡側）の低位段丘面の崖線まで到達し、天然ダムが形成された。崩落堆積物は、下位段丘面と浸食谷を覆ったことが確認されている一方、卯ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡では確認されていない。崩落堆積物の直接的な影響を受けなかったとしても、天然ダムの形成により一帯が不安定になったと考えられる。この地域にとって重大な災害イベントであったといえる。

山体崩落以降、堰き止められた信濃川の河川浸食により、本格的に大割野Ⅰ面が離水していく。この頃に押圧縄文土器群の活動が展開される。

【田沢遺跡・壬遺跡】

田沢遺跡と壬遺跡が立地する段丘面の古地形は複雑である。段丘面は平らではなく、段丘礫層上に自然堤防を形作る土砂の堆積、川の流水による土砂の安定した堆積、洪水等のイベント堆積や浸食の繰り返しにより形成されている。古地形は、清津川とほぼ平行する自然堤防上に遺跡が築かれ、その背後には後背湿地があったと見られる。大きく見れば本ノ木遺跡と同様の地形復元ができる。なお、この段丘面では壬遺跡でAs-YPKが確認されているが、田沢遺跡の確認調査ではAs-Kは二次堆積でも確認されておらず、段丘の離水時期については、さらなる検討が必要である。

（3）古環境

旧石器時代終末から縄文時代草創期は、環境が大きく変動したことが知られている。工藤雄一郎［2012］を参考に、当期の環境変動を整理すると、最終氷期最盛期LGMの後半に当たるLGM-Cold 2（24,000-15,000 cal yr BP）から晩氷期温暖期LG Warm（15,000-13,000 cal yr BP）を経て、晩氷期寒冷期LG Cold／Younger Dryas（13,000-11,500 cal yr BP）に至る時期に相当する。この環境変動の区分と遺跡群の年代を対応させ

ると次のように整理できる。

LGM -Cold 2	1期：本ノ木遺跡・中林遺跡（尖頭器石器群）、壬遺跡下層（無文土器）
LG Warm	2期：田沢遺跡・壬遺跡上層・屋敷田Ⅲ遺跡（隆起線文土器）
LG Cold	3a期：壬遺跡上層（円孔文土器）、本ノ木遺跡・卯ノ木南遺跡（押圧縄文土器）

吉川昌伸［2016］等の分析によれば、LGM-Cold 2には亜寒帯性針葉樹林が卓越していたが、温暖化するLG Warmには亜寒帯性針葉樹林から冷温帯性落葉広葉樹林に急変しコナラ亜属が拡大するという。再び寒冷化し、「寒の戻り」と称されるLG Coldには中部地方の山地では亜寒帯性針葉樹林が小規模で拡大するが、寒冷化が弱く、植生変化が認められない地域もあったようである。その後、再び温暖化することに伴い、亜寒帯性針葉樹林は衰退し、コナラ亜属林が拡大または卓越するとされる。

本遺跡群は、水成堆積を基本とすることから花粉は淘汰されており、遺跡で採取した土壌の分析から古環境を復元することはできない。周辺の卯ノ木低地（第37図）［佐藤ほか編2014］、卯ノ木泥炭層遺跡［谷口編2012］、卯ノ木南遺跡の湧水点付近で発見された泥炭層（第38図）［佐藤ほか2018］、十二ノ木低地［千葉2016］等のデータとあわせて検討することが有効である。

卯ノ木低地の分析では、As-Kを含む15,000 cal yr BPの層準が確認されている。ブナ属の花粉が多く、トウヒ属・モミ属・ツガ属は少ないことが明らかになっており、亜寒帯性針葉樹林から冷温帯性広葉樹林への変化が指摘されている。卯ノ木泥炭層遺跡の調査では、隆起線文土器段階以後の3a期に相当する環境が復元されている。吉川昌伸［2012］は、段丘斜面から段丘などにはコナラ亜属のミズナラを主とし、カエデ属、シナノキ属、クマシデ属－アサダ属などを伴う落葉広葉樹林が形成され、斜面下部から河畔域にはトチノキやヤナギ属、クルミ属、ニレ属などが分布したと推定した。寒冷化する時期ではあるが、それに伴う著しい環境変化は見られないようである。これらのデータは、更新世末の環境を示す貴重な資料であるとともに、史跡整備を行う上で参考にすべき情報といえる。

B　遺跡立地と生業

本ノ木遺跡が河畔の自然堤防上に築かれた背景について芹沢［1966］は、「自然堤防は、彼らの簡単な住居の壁ともなり、同時にそこに容易に見出すことのできる礫層の露頭は彼等の石器作りの仕事場であり、かつまた鉱脈でもあったろう。さらに水辺に近く居を構えるのは、漁猟の場を手近かにひかえることでもあった。」とし、北西ヨーロッパの中石器時代の集落との共通性を指摘している。すなわち、石器石材の獲得と内水面漁撈という、２つの生業の可能性が指摘されている。本遺跡群は、信濃川と清津川の合流部の河川低地に立地しており、生業を考慮した立地であったことがうかがえる。

同様の遺跡立地は、縄文時代草創期に先行する細石刃石器群に特徴的に認められる。例えば、長岡市荒屋遺跡は信濃川と魚野川、三条市中土遺跡は五十嵐川と守門川、村上市樽口遺跡は三面川と末沢川の合流点に立地し、その優位性について論じられている［桜井1993］。本ノ木遺跡と同時期に位置付けられる東京都前田耕地遺跡も同様の遺跡立地にあり、細石刃石器群から草創期にかけての特徴といえる。遺跡形成時は河床面に近い高さであったと考えられるが、このことは河川の影響をより受けやすかったことを意味し、

水害リスクを伴う立地であったといえる。あえてこのような立地条件を選択したことを考える上で、河川資源の利用について考慮しなくてはならない。

山内清男［1964］は、太平洋側では利根川以北、日本海側では鳥取県以北の河川を遡上するサケ・マス類について「縄紋人がこれを知らないで通すはずはない」とする。アイヌや北米先住民の主要食糧のひとつであること、保存食とする地域があるとすることを紹介した上で、初夏にはマス、秋にはサケをとり、これを乾かして保存食としたと考えた。

岡本東三［1979］は、草創期の遺跡が河川縁辺に立地すること、この時期と系統関係にあるとしたセロヴォ期に漁撈が存在することから、狩猟に加え河川漁撈が開始されていたと考えた。

加藤晋平・松本美枝子［1984］は、シベリアから拡散した北方系細石刃石器群が、サケ・マス類といった河川開発を伴い、その天然遡上域まで南下したとする。この仮説は、北方系細石刃石器群・荒屋型彫器の分布と一致することからも、その蓋然性が示されており［橋本1989］、佐藤宏之［1992］も北方系石器群を持つ集団が、縄文化の過程において内水面漁撈を採用し定住化を促したと考えた。これらの研究により、北方系細石刃石器群と内水面漁撈の関係性が論じられており、その脈絡の中で本遺跡群の形成を理解することができる。ただし、加藤博文［1996］はシカ類の生態を検討する過程から、北方系細石刃石器群の関東への波及は、季節的移動を伴うシカ類の狩猟と関連するとし、内水面漁撈の採用に否定的な見解を示していることも付け加えておく。

このような河川資源の利用実態を知る上で、最も重要な比較資料となるのが東京都前田耕地遺跡である。多摩川と秋川の合流部の河川低地に立地し、埋没谷の谷頭付近の自然堤防上に立地する。本ノ木遺跡と共通する立地環境の遺跡といえる。遺構は住居跡２棟と炉跡１基が検出されており、このうち第16号住居跡の外周で認められる礫の配置は、本ノ木遺跡Ｂ地点で検出した「列石状の配石」と類似する。埋土からは無文土器・石器・動物遺体が出土したが、第17号住居跡の焼土から約10,000点の魚類の歯や骨が回収された。大量のサケ科の歯が同定され、60～80個体のサケの頭部が存在したと推定されており［加藤1985］、このほかにもクマを含む陸生哺乳動物も確認されている［東京都埋蔵文化財センター1992］。石器は、尖頭器2,303点、両面石器72点、削器169点、抉入削器97点、掻器70点、錐状石器３点、石斧２点、礫器11点、敲石２点、台石１点で、このほかに尖頭器製作に伴う膨大な資料があり［東京都教育庁生涯学習部文化課2002］、本ノ木遺跡の尖頭器石器群と近似した石器組成ということができる。

前田耕地遺跡の調査成果を受けて栗島義明［1986］は、本ノ木遺跡の形成が「シャケの遡上時期（季節）にあったことを窺わせている」とし、「遺跡立地の差異、すなわち生態系の差異がそこで行われた生産活動の差異へと結びつき、結果的に遺跡に残された石器組成の差異として顕在する可能性は十分に考えられる」とした。白石浩之［1990］も「鮭の習性を知った上での計画的な漁場関係の遺跡が形成された」可能性を指摘し、「前田耕地遺跡で検出された竪穴住居跡は居住の場と鮭を燻製にした場を兼ねていた」と推定した。

信濃川水系において、サケは重要な資源であったと考えられる。魚沼市黒姫洞窟では、草創期後半のサケの椎骨が２点出土している［植月2008］。時期は大きく下るが、後期前葉の魚沼市町上遺跡SK97でもサケ科魚類が集中的に出土しており、季節的な廃棄単位を反映する可能性が指摘されている［山﨑2013］。なお、町上遺跡においては、サケに偏重した動物骨の組成ではあるものの、哺乳類・鳥類・両生類・貝類も確認されており、特定の資源のみに依存したわけでないことを示している。前田耕地遺跡でも陸生哺乳動

物が確認されていることを踏まえれば、このような在り方が実態を示すと考えるべきであろう。

一方、卯ノ木南遺跡の押圧縄文土器について、炭素・窒素安定同位体を分析したところ、海産物のデータが得られており、海から遡上したサケの利用が想定されている［佐藤・渋谷2014、佐藤・佐藤・今井2018］。北海道大正３遺跡（３a期）の爪形文土器における炭素・窒素安定同位体分析の分析でも同様の所見が得られている［國木田ほか2012、Kunikita et al.2013］。鹿又喜隆は、このような分析結果を踏まえ、土器の使用機会が多い地域の背景にサケの豊かな漁場があるものと考えた［鹿又ほか2018］。また、大正３遺跡、福井県鳥浜貝塚（３b期）における土器残存脂質分析でも、魚類が同定されるとともに水産資源に偏重した在り方が指摘され、遺跡立地等の条件を踏まえてサケ類の可能性が指摘されている［Craig et al.2013］。信濃川上流域は、礫河床であることからサケの産卵地として適しており、これらの分析結果は、その利用を示唆するものといえる。

一方、信濃川上流域は、魚類をはじめ多様な動植物を獲得できる環境でもあり［佐藤2009b］、それらを含めて河川資源と考えておかなくてはならない。また、サケ漁の強調に目が奪われがちであるが、サケと遡上期が異なる夏から秋にかけてのマス漁も考慮しておく必要があろう［堤2005］。当然のことであるが、サケ漁の期間以外も、狩猟・漁撈・採集等による食糧獲得はなされていたはずであり、複合的な生業形態を想定しておかなくてはならない。

橋本勝雄［2012］は漁撈活動の活発化を肯定しつつも、本ノ木型尖頭器の分布、前田耕地遺跡の石器製作過程の検証から「漁撈一色」とはいかないとし、「内水面漁撈というよりも尖頭器に用いる石材の確保と、集中生産による狩場への石槍の供給」が重要であると考えた。尖頭器が集約的に製作されたことは確かであろうが、多くが破損しており、その要因に関する検討も重要な課題である。

本遺跡群の直下を流れる信濃川では無斑晶ガラス質安山岩、清津川では頁岩などの良質な石器石材が産出し、石器製作においては、それらの在地石材が多用される［佐藤信之2017］。恵まれた石材資源が活用されており、石器製作の拠点としての重要な要素を兼ね備えているといえる。旧石器時代から縄文時代草創期における石器石材の動態からは、東北地方の珪質頁岩・黒曜石が南下し、信州産の黒曜石が北上することが明らかになっているが、信濃川・千曲川流域はその重要な経路と見られる。当地域はこの往復運動において、東北地方の珪質頁岩産地と信州の黒曜石原産地の中間に位置し、かつ石材を補給する上でも重要な地域であったといえる［佐藤2003、加藤2009・2018等］。珪質頁岩・黒曜石の利用に固執する旧石器時代から縄文時代草創期において、当地域に遺跡が集中する一因と考えられよう。このような他地域との交流や移動の結節点としての位置付けについても検討が必要である。

以上のように河川低地に立地する背景として、河川資源の利用における優位性を挙げることができる。しかし、見えない情報が多くあり、単純な図式では示すことは適当でない。今後、研究方法の進展により、新たな視点で検討されることが望まれる。

C　開地遺跡と洞窟遺跡

小林達雄［1986］は、本ノ木遺跡の形成時期について「約230mの段丘面が氾濫原となりながら、次第に河原の状態から安定した陸に転換しようとしていた時期」とし、「本ノ木や壬遺跡が立地する面は陸化までに依然として不安定な地点を含んでいた」と見る。そして、「水際を求めて、頻繁に居を移していた」と考えた。その後の調査成果を踏まえても、的確な表現であるといえる。このような土地利用は、先行する北方系細石刃石器群からの脈絡の中で理解でき、河川資源の積極利用が想定される。

一方、草創期の遺跡は、河川低地の遺跡のみから構成されるわけではなく、中位段丘・高位段丘でも活動痕跡が認められる（第Ⅱ章３Ａ）。河川低地から離れた台地・丘陵・高原や山地の洞窟遺跡・岩陰遺跡（以下、「洞窟遺跡」とする。）など、多様な在り方が認められ［藤山2005］、これらを総合的に評価することで、本遺跡群の意義をより適切に考えることができる。

中でも、洞窟遺跡とは対照的な在り方を示しており、重要な比較対象となる。新潟県内には31か所の洞窟遺跡が知られている［石原1990］が、草創期の遺跡は３か所のみである。谷口康浩［2000］のいう１期の洞窟遺跡は今のところ明らかになっていない。このことは県内というよりは、全国的に通有の状況といえる。洞窟利用が本格化するのは２期以降である。全国的にも隆起線文土器段階の洞窟遺跡が多数発見されており、その代表的事例のひとつが小瀬ヶ沢洞窟［中村1960、小熊・前山1993］である。この時期にはじまる洞窟の多用は、生業・居住形態が変化していく過渡期的様相を示しており、狩猟・漁撈活動の時期や地点の固定化による一定期間の定着的居住、温暖化に伴う生業活動範囲の垂直的展開などが関与している可能性がある［森先2015］。その後も、３ａ期には小瀬ヶ沢洞窟･黒姫洞窟、３ｂ期には室谷洞窟下層［中村・小片1964］で活動痕跡が確認される。

小瀬ヶ沢洞窟では、尖頭器をはじめとする多様な刺突具が多数出土したほか、木材利用との関係が想定される石斧が94点、皮革加工に使用された掻器が156点、堅果類との関連が想定される磨石･石皿など、多様な器種構成からなる石器群が検出されている［橋詰2018b］。また、使用を経た破損品が多いことも特徴的であるが､動物骨が多数出土していることと関連付けて解体場のような性格を考えることができようか。また、遺跡内で石器製作が盛んに行われているが、両面加工石器を介したもので、原石からの一連の作業は認められない［橋詰2007・2018a・2018b］。室谷洞窟下層においても多数の石器が出土しているが、石鏃・石斧・掻器・削器・磨石・石皿などがあり、バラエティーに富む［橋詰2018b］。小瀬ヶ沢洞窟や室谷洞窟下層の状況は、本遺跡群と対照的にバラエティーに富み、より多様な活動が展開されたこと示唆する。一方､黒姫洞窟では隆起線文土器に伴う少数の剥片が出土しているのみである［佐藤ほか2017］。調査途中ではあるが、小瀬ヶ沢洞窟や室谷洞窟下層のような膨大な数量の遺物は今のところ認められず、一時的な利用に伴うキャンプ地のような性格が想定される。また、黒姫洞窟では隆起線文段階の炉が検出されており、洞内の空間利用を考える上で重要な資料である。

洞窟遺跡では、動物遺体の遺存状態が良く、生業を検討する上で重要な情報をもたらしてくれる。小瀬ヶ沢洞窟では、多数の動物遺体が出土している。哺乳類はツキノワグマ・ニホンジカ・カモシカ・ノウサギ・イタチ・テン・タヌキ・アナグマ、鳥類はワシタカ類・ヒシクイ・ガン、魚類はサケがある。中でもツキノワグマ・カモシカが目立ち、山岳地帯の狩猟相を反映する。一方、サケは河川資源の利用を想定させるものであるが、分析総数553点中２点と少なく、陸生動物の狩猟が主体であったと考えられる。また、

ウミガメや海産二枚貝もあり、海岸部との関係がうかがわれる［小野1993、新田･西本2000］。室谷洞窟でも動物遺体が多数出土しているが、その多くは早期以降（上層）のものである。草創期後半（３b期）に相当する下層段階（６層以下）の資料は32点あるが、ツキノワグマ・シカ・カモシカ・ノウサギ・ムササビ･サルが確認されている［西本2001］。黒姫洞窟では、ノウサギ約160点をはじめ、イノシシ･カワウソ･テン・ヘビ・クマ・サケ科が確認されている。サケ科椎骨は、完存２点と破片23点で、多くが被熱していたことが報告されている［植月2008］。小瀬ヶ沢洞窟･室谷洞窟と比べると、ツキノワグマ･カモシカが見られないのが特徴的といえる。サンプリング精度や、遺体の残りやすさ等の条件の相違を考慮する必要があろうが、現存の資料を見る限り、いずれも陸生動物が狩猟の主な対象であったと考えられる。河川資源の利用も想定されるが、比率はより低いと考えられよう。

このように、本遺跡群と洞窟遺跡とでは、石器組成の在り方、想定される狩猟対象において相違点が多い。これが意味することについて軽々に判断することはできないが、狩猟対象の相違は石器組成の相違に反映されたことであろう。あるいは、石器製作地、居住地、キャンプ地といった遺跡の性格の相違を反映するかもしれない。また、これまでに検討してきた生業形態を考慮すれば、季節性も検討しておく必要がある。

河川低地においてサケ漁が行われていたとすれば主な活動時期は晩秋から初冬である。一方、縄文時代中期～晩期・弥生時代中期を主体とする遺跡ではあるが、村上市長者岩屋岩陰遺跡では、カモシカ約30個体のすべてが冬の終わりから初春に死亡しているという［小野1987、石原1990］。洞窟遺跡が、山岳地帯における狩猟時のキャンプ地であるならば､主な活動時期を冬期と考えることができる。冬季の狩猟活動は、現存する狩猟法の特性を踏まえ、考慮すべき点といえよう［小野ほか1993］。すなわち、開地遺跡と洞窟遺跡では、活動時期（季節）や利用形態が異なる可能性があるが、今後、多角的に検討されることが望まれる。

また、一口に洞窟遺跡といっても、すべてがキャンプ地というわけではない。中でも室谷洞窟下層は、遺物量があまりに多く、特に土器は、復元個体５個体のほかに5,906点、21,845g［谷口1996］と同時期の遺跡と比べても群を抜いた数量である。このような状況を考えると、一過性のキャンプ地が集積したというよりは、居住に利用されたと考えるべきかもしれない。

洞窟遺跡の立地環境も多様である。「閉鎖型、開放型、里山立地、奥山立地などに細分する中で、それらの活動連鎖を考察する必要」［佐藤2009a］があろう。一方、河川低地の開地遺跡と洞窟遺跡は、一見、まったく異質な立地と見えるが、必ずしもそうとはいえない。栃木県大谷寺洞窟［塙1976］や福島県塩喰岩陰［芳賀ほか1994］の初期段階は、礫層直上で活動痕跡が認められる。いずれも河川の浸食により形成された洞窟であることから、離水後、間もない段階に利用が始まったと考えられる。また、塩喰岩陰や黒姫洞窟では、水害イベントを示す層位が見られることから、河川の影響を受けやすい環境下に形成されたといえる。すなわち、本遺跡群と比較的近い環境を想定することができ、河川資源の利用を射程とした遺跡立地といえるかもしれない。

D　遺跡群の歴史的意義

「日本列島における旧石器時代から縄文時代への移行は、自然環境と人類文化の両側面に見られた列島史上最大の歴史的画期と言うことができる。この変化は、全球的な大規模気候変動期である更新世（氷期）／完新世（温暖期）移行期に相当し、農耕の発生や文明・都市の勃興といった世界史的事件を引き起こす契機となった。」［佐藤2015］

本遺跡群は、このような激動期に形成された。縄文時代の開始期である草創期（16,000-11,500 cal yr BP）は、土器出現期と呼ばれることがあるように、土器が出現し普及する時期である。本遺跡群は、縄文時代の開始期をめぐる「本ノ木論争」の舞台となる。山内清男・佐藤達夫と芹沢長介の間で交わされた日本考古学史上、著名なこの論争は、旧石器時代の終末から縄文時代の起源に関する歴史観の相違から発生した課題である。

現在、放射性炭素年代測定の増加と方法の進展により、日本を含む東・東北アジアにおける土器出現年代は、確実に更新世に遡ると考えられ、世界的に最も古い年代を示している［Sato and Natsuki 2017］。土器の発明は、人類が初めて手にした化学変化の産物といわれている。その出現は革新的であったものの、草創期においては旧石器時代からの伝統を引き継ぎ、多様な道具を徐々に変化させ、新たな道具を開発していく。本遺跡群は、その様子を如実に表している。

土器の出現と普及は、やがて煮沸という機能を通して人類の可食範囲を著しく拡大し、大量処理を可能とした。この処理により食物の徹底的な殺菌と消化良好な状態をもたらした。幼児への哺養・病人への食餌を含め、全般的に人々の健康の維持と体質の改善をたすけ、寿命の平均的延長という重大な結果をもたらした［近藤1965］。人類史上、極めて重大な発明であったといえる。

土器が出現した頃、本遺跡群では、サケなどの河川資源の利用を目的として河川低地に進出し、狩猟具である尖頭器（槍・銛・ヤス）を大量生産した。サケの遡上は、晩秋から初冬に集中することから、短期間に大量に捕獲したと考えられる。しかし、そのままでは当面の食糧にしかなりえず、持続的な食糧とするために、加工や保存処理の技術が必須となってくる。天日干しや燻製などの保存技術の適用が想定され、それにより年間を通じて食糧を計画的に利用することができるようになった。土器の出現は、煮沸により魚類や動物質食糧の利用拡大を図り、他方では堅果類のアク抜きなどによる植物質食糧の新たな利用法の開発を促し、土器そのものも貯蔵の機能を兼ね備えていたとされる［堤2005］。また、土器を用いた魚油の抽出も想定されている［梶原1998］。草創期に相当する時期は、世界的に内水面漁撈が盛んに行われており［加藤1981］、その動向とも対応する。

このような食糧の計画的利用のはじまりとともに、定住化が促進されていく。大きな環境変動を乗り越えて、新たな技術と生活様式が確立されていく過程を、本遺跡群は物語っている。そして、人々の生活痕跡である遺跡と、自然環境や地形の変化を関連付けて捉えることができる全国でも稀有な事例といえる。12,000年以上の長きにわたり、自然と共生した縄文文化の礎を築いた頃の様子を示しており、きわめて重要な遺跡群ということができる。

3　遺跡群の保存と活用

A　保存と活用の基本的な考え

現状保存された遺跡の保存・活用は様々な手法で行われてきたが、2015年文化庁文化財部記念物課『史跡等･重要文化的景観マネジメント支援事業報告書』（以下、「マネジメント報告書」という。）で指針が示されている［文化庁2015］。史跡指定後は「保存活用計画の策定を行うべきとする原則の確立が不可欠」とされており、十日町市・津南町では遺跡群の性質・状況に応じた保存活用計画が策定されることとなる。具体的な保存・活用は計画策定時に検討されることとなるが、マネジメント報告を指針とし、本書作成で考えた保存・活用の在り方について記述する。今後の議論の一助となれば幸いである。

保存とは「史跡等の本質的価値を現在から未来へ確実に維持・継承し、その望ましい状態を創出すること」、活用とは「保存と調和しつつ地域に生きる人々が史跡の本質的価値と享受し、それを現代社会に活かすこと」であり、両者を合わせて保護とされる。保存・活用のどちらか一方に偏り生じた場合、調和のとれた保護が立ち行かなくなるため、両者は史跡の特性を考慮してバランスよく行う必要があり、その相乗効果を生み出す技術的な手法が整備とされる。いずれも、史跡の本質的な価値の把握が不可欠となる。

B　本遺跡群の保存と活用

（1）保存・活用の前提と本質的な価値

本遺跡群は、十日町市と津南町に分布する遺跡から構成されており、本県では希少な事例となる。保存･活用の前提として、発掘調査と同様に、市町が連携して一体的に取り組まなくてはならない。

保存と活用にあたっては、本遺跡群の本質的価値の把握が不可欠とある。現状では、旧石器時代から縄文時代草創期における遺跡群の変遷と信濃川の流路等を含めた地形の変遷を具体的に知ることができ、遺跡と自然環境・地形の変化を明確に把握できる全国でも稀有な事例と考えている。また、遺跡形成時とは地形が大きく変更されているが、豊かな自然環境の中で保存されていることも大きな特徴である。これらを確実に維持、継承していく保存が不可欠となろう。

（2）活用について

現　地　本遺跡群のように縄文時代草創期の開地遺跡では、土地を掘り込む遺構はほとんど発見されない。したがって、活用にあたって、遺構復元を基本とする整備方法は、そのままではなじまない。より訪問者のイメージ形成を容易にする工夫が不可欠である［森先2017］。これらの条件を勘案した活用として、①現地の公開、②施設の設置、③ソフト面の整備等に関する一案を示す。

本遺跡群の本質的価値を共有する活用として、地形と遺跡の立地を知る遺跡探訪ルートの設定が考えられる。河床から段丘面までを一体的に探訪することで自然堤防や段丘の形成過程を伝え、遺跡の位置付けを解説すれば河川との強い関係性を体感できる。本遺跡群を残した人々は、河川資源の利用を目的として低地へ進出するが、資源利用において優位である一方、水害リスクを抱えた。本ノ木遺跡・田沢遺跡・壬

遺跡では、段丘礫層形成後に洪水堆積物で覆われおり、リスクを抱えながら、あえて河川低地を利用したことがわかる。また、本ノ木遺跡で発見された山体崩落の痕跡は、信濃川を堰き止めた重大な災害イベントである。地域の災害履歴の把握は、防災・減災対策の基礎となることから、周知の機会を設けたい。

一方、本遺跡群では建物などの構築物は検出されておらず、他の史跡とは異なる発想での整備が求められる。その一つとして、遺跡形成時の環境復元が考えられる。離水後間もない、河原に近い環境下で遺跡が形成されたと考えられることから、河川との強い関係性を表現することが求められる。かつての景観を体感できる仕立てが必要となるが、現在は遺跡形成時と状況が大きく異なる。段丘崖の樹木を伐採し、信濃川と清津川の合流部を眺望できるように環境整備することは一案である。一方、現河床面とは30mもの比高があり、遺跡が立地する段丘面にかつての河床面が存在したことを想像させることは難しい。現在と過去の環境の相違を伝える手段として、ＡＲ（拡張現実）・ＶＲ（仮想現実）の活用は効果的であろう。

資料活用等　遺構がほとんど発見されていない本遺跡群では、出土資料の活用も重要となる。現在は市町に加え、田沢遺跡第１次調査資料は東北大学、壬遺跡出土資料は國學院大學で保管されている。これらの大学と連携して出土品の相互展示や里帰り展の実施、歴史的価値を共同で検討する機会の設置も必要となろう。2020年にリニューアルオープンの十日町市博物館、津南町農と縄文の体験実習館　なじょもん、整備中の津南町埋蔵文化財センターは、その拠点としての役割が期待される。

本遺跡群の形成において、河川資源が重要な役割を果たしたと考えられたが、その有力な候補となるのがサケ漁である。ダム建設・河川改修などの影響により、現在、当地域では天然遡上するサケの姿をほとんど見ることができない。しかし、かつてサケ漁が行われたことは、江戸時代後期における魚沼地方の生活を活写した鈴木牧之『北越雪譜』でも紹介されている。地域において、伝統的な生業であったことを伝えることも必要であろう。サケ漁に関する史・資料、民具資料などを併せて提示することは、見学者の理解を助けると考えられる。

かつて遺跡の周囲に広がっていた河床の礫も、当時においては重要な河川資源であった。河原の観察は、地域の地質を知るきっかけとすることができる。その上で、石器石材の適材を学び、石材を採取し、石器製作体験を一連で行うことで、石器づくりが当時の生活にどのように組み込まれていたかについて理解を深めることができる。石器の解説は、見学者にとって難解な用語や理論が多く、体験活動は理解を助ける上で重要である。

また、本遺跡群と対極的な在り方を示すのが洞窟遺跡である。両者を比較することで、本遺跡群の価値はより明瞭になる。これらを見学するツアー等の開催は、多大な学習効果が期待され、遺跡群への理解も深まると考えられる。

これまで述べてきた事項に加え、今後、実施予定の十日町市中林遺跡や津南町卯ノ木南遺跡等の調査は、重要な課題となる。調査成果を正しく評価するためには、最新の研究動向を踏まえつつ、遺跡群の本質的価値を更に追及する取り組みが不可欠となる。史跡を核とするまちづくり、地域づくり等についても、市町で十分に協議・連携し、本遺跡群の積極的な保存・活用が促進されることに期待したい。

引用文献

青木　豊ほか　1992 『壬遺跡』中里村教育委員会

麻生　優　1985 「層位論」『岩波講座　日本考古学Ⅰ』岩波書店

安斎正人　1996 「遊動から定住へ」『現代考古学』同成社

安斎正人　2002 「「神子柴･長者久保文化」の大陸渡来説批判－伝播系統論から形成過程論へ－」『物質文化』72　物質文化研究会

石原正敏　1990 「新潟県における洞穴・岩陰遺跡研究の現状と今後の課題」『新潟考古』第１号　新潟県考古学会

稲田孝司　1986 「縄文文化の形成」『岩波講座日本考古学６　変化と画期』岩波書店

稲田孝司　2018 「神子柴石器群の成立過程とその意義」『神子柴石器群とは何か？』浅間縄文ミュージアム・長野県旧石器研究交流会・明治大学黒耀石研究センター・八ヶ岳旧石器研究グループ

植月　学　2008 「黒姫洞窟遺跡第５次～７次調査出土の動物遺体」『黒姫洞窟遺跡－第２期発掘調査報告－』魚沼市埋蔵文化財調査報告第５集　魚沼市教育委員会

卜部厚志・渡辺秀男　2013 「信濃川流域の地質・地形と災害」『津南学叢書第22輯　大地の履歴から探る災害』信濃川火焔街道連携協議会・津南町教育委員会

岡本東三　1979 「神子柴・長者久保文化について」『研究論集』Ⅴ　奈良国立文化財研究所

岡本東三　1999 「神子柴文化をめぐる40年の軌跡－移行期をめぐるカオス－」『先史考古学研究』第７号　阿佐ヶ谷先史学研究会

岡本東三　2015 「「本ノ木論争」とは何か－列島石器時代をめぐる相剋－」『考古学ジャーナル』No.677　ニューサイエンス社

岡本東三　2017 「本ノ木論争－過去・現在・未来－」『座談会　60年目の本ノ木遺跡－要旨集－』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

尾田識好・森先一貴・岩瀬　彬・山崎　健・國木田大・佐藤宏之　2018 「旧石器・縄文移行期研究における前田耕地遺跡の意義」『研究論集』ＸＸＸⅡ　東京都埋蔵文化財センター

小熊博史　2001 『長岡市立科学博物館開館50周年記念展示図録　重要文化財考古資料展－火焔土器と小瀬ヶ沢･室谷洞窟出土品』長岡市立科学博物館

小熊博史　2006 「室谷洞窟」『東蒲原郡史　資料編１　原始』東蒲原郡史編さん委員会

小熊博史･立木宏明　1994 「新潟県における旧石器時代･縄文時代草創期研究の現状（２）」『長岡市立科学博物館研究報告』第29号　長岡市立科学博物館

小熊博史・立木宏明　2001 「新潟県における縄文時代草創期の遺跡と遺物」『長岡市立科学博物館開館50周年記念展示図録　重要文化財考古資料展－火焔土器と小瀬ヶ沢・室谷洞窟出土品』長岡市立科学博物館

小熊博史・前山精明　1993 「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会実行委員会

小野　昭　1993 「新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡出土遺物の再検討　骨器・獣骨」『環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会実行委員会

小野　昭･石原正敏ほか　1987 『人ヶ谷岩陰　第２次発掘調査報告書』上川村文化財調査報告書４　上川村教育委員会

小野　昭・石原正敏・小熊博史　1993 『長者岩屋岩陰　第１次・第２次調査報告』朝日村教育委員会

笠井洋祐　2008 「縄文時代草創期の石器製作技術－信濃川上流域中心に－」『津南シンポジウムⅣ　縄文文化の胎動－予稿集－』信濃川火焔街道連携協議会・津南町教育委員会

笠井洋祐　2015 「十日町市貝野沢田遺跡の調査成果」『新潟県考古学会第27回大会　研究発表会発表要旨』新潟県考古学会

笠井洋祐･石原正敏ほか　2018 『田沢遺跡発掘調査報告書－保存目的の範囲確認調査報告書－』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第63集　十日町市教育委員会

梶原　洋　1998 「なぜ人類は土器を使いはじめたのか－東北アジアの土器の起源」『科学』68（４）　岩波書店

加藤暁生　1985 「前田耕地遺跡出土の魚類顎歯について」『東京の遺跡』７　東京考古談話会

加藤晋平　1981 「旧石器時代の漁撈活動－先土器時代の経済活動を考える上で－」『信濃』第33巻第４号　信濃史学会

加藤晋平・松本美枝子　1984「日本細石器文化の源流」『史艸』25　日本女子大学史学研究会

加藤博文　1996「細石刃石器群における生業活動の検討－シベリアからの視点－」『古代文化』48（３）､48（４）　古代學協会

加藤　学　2009 「中部地方北部における細石刃石器群－南北二系の石器群をめぐる石材利用を中心に－」『旧石器考古学』72　旧石器文化談話会

加藤　学　2016 「中部地方北部における更新世末の環境変動と人類活動」『旧石器研究』第12号　日本旧石器学会

加藤　学　2018 「中部地方北部における後期旧石器時代の石材利用－黒曜石の動態に関する検討－」『東北日本の旧石器時代』六一書房

可児通宏　1992 「復元されたシベリアの縄文施文の土器－アムール川地域グロマトゥハ遺跡出土－」『季刊考古学』第38号　雄山閣

鹿又喜隆　2017 「東北地方における土器出現期の新資料－本ノ木論争と東北からの視点－」『座談会　60年目の本ノ木遺跡－要旨集－』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

鹿又喜隆･里村　静･木村　恒　2018 「旧石器時代から縄文時代への移行に関する実践的研究－新潟県十日町市田沢遺跡」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.17　東北大学大学院文学研究科考古学研究室

工藤雄一郎　2012 『旧石器・縄文時代の環境文化史』新泉社

國木田大・大貫静夫・Igor Shevkomud・山原敏朗・吉田邦夫・松崎浩之　2012 「アムール川流域および北海道における初期新石器時代の年代研究と食性分析」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』日本文化材科学会

Kunikita.D, Shevkomud.I, Yoshida.K, Onuki.S, Yamahara.T, and Matsuzaki.H 2013 Dating Charred Remains on Pottery and Analyzing Food Habits in the Early Neolithic Period in Northeast Asia. *Radiocarbon* 55（２-３）:1334-1340

栗島義明　1986 「「渡来石器」考－本ノ木論争をめぐる諸問題－」『旧石器考古学』32　旧石器文化談話会

栗島義明　1991 「「本ノ木論争」から学ぶもの（一)」『埼玉考古学論集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

栗島義明　2005 「列島最古の土器群－無文から有文へ」『地域の文化と考古学Ⅰ』六一書房

栗島義明　2010 「神子柴文化－移行期としての文化」『講座日本の考古学２　旧石器時代　下』青木書店

栗原文蔵・小林達雄　1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』第47巻第２号　日本考古学会

桑原　健　2017 「津南段丘における押圧縄文土器期の石器群に関する予察－卯ノ木南遺跡出土資料を中心に－」『座談

会　60年目の本ノ木遺跡－要旨集－』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

小林達雄　1975 「層位論」『日本の旧石器文化１　総論編』雄山閣

小林達雄　1986 「第二節　縄文文化の幕開け」『新潟県史　通史編１原始・古代』新潟県

小林達雄編　1980 『壬遺跡』國學院大學考古学研究室

小林達雄編　1981 『壬遺跡1981』國學院大學考古学研究室

小林達雄編　1982 『壬遺跡1982』國學院大學考古学研究室

小林達雄編　1983 『壬遺跡1983』國學院大學考古学研究室

小林達雄編　1987 『壬遺跡1987』國學院大學考古学研究室

小林達雄・岡本東三・佐藤雅一　2016 『本ノ木遺跡第一次・第二次発掘調査報告書－山内清男資料整理報告－』津南町教育委員会

近藤義郎　1965 「後氷期における技術的革新の評価について」『考古学研究』第12巻第１号　考古学研究会

桜井準也　1993 「細石刃文化遺跡と河川次数－内水面漁撈－」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ　細石刃文化研究の諸問題』佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ

佐藤達夫　1971 「縄紋式土器研究の課題－特に草創期前半の編年について－」『日本歴史』277号　吉川弘文館

佐藤達夫　1974 「黎明期の日本」『図説日本の歴史１』集英社

佐藤信之　2017 「本ノ木遺跡における石材利用及び遺跡周辺の石材環境について」『座談会　60年目の本ノ木遺跡－要旨集－』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

佐藤信之　2018 「石材環境」『本ノ木遺跡・卯ノ木遺跡・家ノ上遺跡』津南町文化財調査報告書　第73輯　津南町教育委員会

佐藤宏之　1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説－関東地方を中心に－」『法政大学大学院紀要』第29号　法政大学大学院

佐藤宏之　2015 「旧石器から縄文へ」『季刊考古学』第132号　雄山閣

Sato.H and Natsuki.D　2017　Human behavioral responses to environmental condition and the emergence of the world's oldest pottery in East and Northeast Asia: An overview. *Quaternary International* 441 partB：12-28

佐藤雅一　1992 『卯ノ木遺跡発掘調査概報』津南町教育委員会

佐藤雅一　1999 「縄文土器　草創期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

佐藤雅一　2001 「信濃川上流域の遺跡と遺物の様相」『長岡市立科学博物館開館50周年記念展示図録　重要文化財考古資料展－火焔土器と小瀬ヶ沢・室谷洞窟出土品』長岡市立科学博物館

佐藤雅一　2003 「遺跡の立地と集団の動き－新潟県・信濃川上流域における活動痕跡の様相－」『季刊考古学』83　雄山閣

佐藤雅一　2007a 「新潟県における縄文文化の胎動－縄文時代草創期～早期の事例－」『公開シンポジウム『縄文文化の成立－草創期から早期へ－予稿集』科学研究費補助金「日本列島北部の更新世／完新世移行期における居住形態と文化形成に関する研究」グループ

佐藤雅一　2007b 『卯ノ木南遺跡－第３次発掘調査報告書』津南町文化財調査報告第51輯　津南町教育委員会

佐藤雅一　2008a 「新潟県における縄文時代草創期後半の諸様相」『第21回縄文セミナー　縄文草創期後半の諸様相』縄文セミナーの会

佐藤雅一　2008b 「隆起線文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

佐藤雅一　2009a 「信濃川流域における縄文化の素描」『縄文化の構造変動』六一書房

佐藤雅一　2009b 「信濃川上流域における縄文時代草創期遺跡群」『縄文時代の考古学８　生活空間－集落と遺跡群－』同成社

佐藤雅一　2017 「信濃川流域における尖頭器石器群の様相」『座談会　60年目の本ノ木遺跡－要旨集－』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

佐藤雅一・石坂圭介ほか　1994 『干溝遺跡』中里村文化財調査報告書第６輯　中里村教育委員会

佐藤雅一・石坂圭介　2002 『貝坂桐ノ木平遺跡群（縄文時代編）』津南町文化財調査報告書　第39輯　津南町教育委員会

佐藤雅一・岡　修司ほか　1998 『堂尻遺跡群試掘調査報告書』津南町文化財調査報告書第24輯　津南町教育委員会

佐藤雅一・笠井洋祐　2001 『久保寺南遺跡』中里村文化財調査報告書第９輯　中里村教育委員会

佐藤雅一・佐藤信之・今井哲哉　2018 『本ノ木遺跡　卯ノ木南遺跡　家の上遺跡　信濃川上流域草創期遺跡群遺跡範囲確認調査報告書』津南町文化財調査報告第73輯　津南町教育委員会

佐藤雅一・佐野勝宏　2002 『正面中島遺跡』津南町文化財調査報告第37輯　津南町教育委員会

佐藤雅一・渋谷賢太郎　2014 「縄文土器の誕生ー縄文草創期とその土器」『魚沼地方の先史文化』津南学叢書第23輯　津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

佐藤雅一ほか　1994 『小丸山遺跡・おざか清水遺跡』中里村文化財調査報告書第７輯　中里村教育委員会

佐藤雅一ほか　1999 『卯ノ木遺跡第２次調査報告書』津南町文化財調査報告書　第29輯　津南町教育委員会

佐藤雅一ほか　2011 『北林Ａ遺跡・北林Ｃ遺跡』津南町文化財調査報告書　第58輯　津南町教育委員会

佐藤雅一ほか　2017 『黒姫洞窟遺跡－第４期発掘調査報告－』魚沼市埋蔵文化財調査報告書第13集　魚沼市教育委員会

沢田　敦　2013a 「本州島中央部日本海側における後期旧石器時代終末から縄文時代初頭の石器製作技術」『新潟考古』第24号　新潟県考古学会

沢田　敦　2013b 「渡来石器」『季刊考古学』第125号　雄山閣

信濃川段丘グループ　1968 「新潟県津南地域の第四系」『新潟大学教育学部高田分校　研究紀要第13号』新潟大学教育学部高田分校

信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ　2002 「信濃川津南地域における第４紀後期の段丘形成と構造運動」『第四紀研究』第41巻第３号　日本第四紀学会

島立　桂　1988 「「本ノ木論争」とその周辺」『旧石器考古学』37　旧石器文化談話会

白石浩之　1990 「本ノ木遺跡の意味するもの」『神奈川考古』第26号　神奈川考古同人会

白石浩之　2003 「石器と土器の出会いの世界－移行期の様相－」『季刊考古学』第83号　雄山閣

菅沼　亘　2004 「中魚沼郡中里村・津南町採集の尖頭器石器群について－石澤寅義・島田靖久コレクションの紹介－」『新潟考古』第15号　新潟県考古学会

菅沼　亘・小熊博史　2008 「十日町市田沢遺跡採集の縄文時代草創期資料について－石澤寅義・島田靖久コレクションの紹介－」『新潟考古』第19号　新潟県考古学会

芹沢長介　1957a 『津南町の石器時代』津南町教育委員会

芹沢長介　1957b 『津南郷古代文化寫真集第１集　付録－古代遺跡解説』

芹沢長介　1965 「周辺文化との関連」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房新社

芹沢長介　1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』第２集　東北大学日本文化研究所

芹沢長介・須藤　隆　1968 「新潟県田沢遺跡の発掘調査予報」『考古学ジャーナル』No.27　ニューサイエンス社

芹沢長介・中山淳子　1957 「新潟県中魚沼郡津南町本ノ木遺跡調査予報」『越佐研究』第12集　新潟県人文研究会

芹沢長介・吉田格・岡田淳子・金子浩昌　1967 「埼玉県橋立岩陰遺跡」『石器時代』第８号　石器時代文化研究会

谷口康浩　1988 「円孔文土器群とその編年的位置をめぐる問題」『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会

谷口康浩　1996 「室谷洞窟出土土器の再検討」『新潟県上川村神谷地区学術総合調査報告書　かみたに　人文編』上川村

谷口康浩　2000 「極東における土器出現の年代と初期の用途」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』Ⅺ　名古屋大学

谷口康浩　2008 「円孔文系土器　多縄文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

谷口康浩編　2012 『新潟県卯ノ木泥炭層遺跡の発掘調査による縄文文化形成期の古環境と生業の研究』國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩・深澤太郎ほか　2010 『本ノ木遺跡　2007年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩・深澤太郎・中村耕作ほか　2010 『本ノ木遺跡・卯ノ木泥炭層遺跡　2008年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩・中村耕作ほか　2013『本ノ木遺跡・卯ノ木泥炭層遺跡　2009～2011年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室

千葉博俊　2016 「津南地域における後期更新世の古環境－十二ノ木低地における自然科学分析結果を中心として－」『津南段丘の杉久保石器群』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

堤　隆　2005 「最終氷期末における内水面漁撈の導入をめぐって」『現代の考古学２　食糧獲得の考古学』朝倉書店

津南町史編さん委員会　1985 『津南町史　通史編　上巻』津南町役場

鶴田典昭・谷　和隆ほか　2004 『仲町遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書63　国土交通省関東地方整備局・長野県埋蔵文化財センター

東京都教育庁生涯学習部文化課編　2002 『前田耕地遺跡－縄文時代草創期資料集－』東京都教育委員会

東京都埋蔵文化財センター　1992 『縄文誕生』

鳥浜貝塚研究グループ編　1985 『鳥浜貝塚－1984年度調査概報・研究の成果』福井県教育委員会・若狭歴史民俗資料館

中里村史専門委員会　1988 『中里村史　通史編上巻』中里村史編さん委員会

中澤　毅・佐藤友子ほか　1998 『屋敷田Ⅲ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第88集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

長沼正樹　2002「両面調整石器群研究序説－更新世末期石器群理解の枠組み構築にむけて－」『考古学研究』第49巻第３号　考古学研究会

永峯光一ほか　2001 『湯倉洞窟－長野県上高井郡高山村湯倉洞窟調査報告－』高山村教育委員会

中村孝三郎　1960 『小瀬ヶ沢洞窟』長岡市立科学博物館研究調査報告第３冊　長岡市立科学博物館考古研究室

中村孝三郎　1963 『卯の木押型文遺跡』長岡市立科学博物館考古研究調査報告　第５冊　長岡市立科学博物館

中村孝三郎・小片　保　1964 『室谷洞窟』長岡市立科学博物館研究調査報告第６冊　長岡市立科学博物館考古研究室

新潟火山灰グループ　1981 「新潟県下のローム層について　その１」『地球科学』35巻６号　地学団体研究会

西本豊弘　2001 「室谷洞窟から出土した動物骨」『長岡市立科学博物館開館50周年記念展示図録　重要文化財考古資料展－火焔土器と小瀬ヶ沢・室谷洞窟出土品』長岡市立科学博物館

新田康則・西本豊弘　2000 「小瀬ヶ沢洞窟の骨－星野洋治コレクションの中から－」『越佐補遺些』第５号　越佐補遺些の会

芳賀英一ほか　1994 『六郎次遺跡・塩喰岩陰遺跡』福島県文化財調査報告書296集　福島県教育委員会・福島県文化センター

萩谷千秋　2017 「関東地方北部からの視点」『座談会　60年目の本ノ木遺跡－要旨集－』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

橋詰　潤　2007 「小瀬ヶ沢洞窟出土の「植刃」関連資料の再検討」『日本考古学協会第73回総会研究発表要旨』日本考古学協会

橋詰　潤　2018a 「新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡出土石器の再検討（２）－いわゆる舟底形石器と両面加工石器からの剥片石器素材の供給の検討－」『長岡市立科学博物館研究報告』第53号　長岡市立科学博物館

橋詰　潤　2018b 「小瀬ヶ沢洞窟遺跡および室谷洞窟遺跡下層出土石器群の再検討」『新潟県考古学会第30回大会　研究発表会発表要旨』新潟県考古学会

橋本勝雄　1988 「縄文文化起源論」『論争・学説　日本の考古学　先土器・縄文時代Ⅰ』雄山閣

橋本勝雄　1989「東日本の細石器文化－東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向－」『考古学ジャーナル』No.306

橋本勝雄　2012 「本ノ木型尖頭器総論－槍と植刃器とのかかわり－」『(財) 印旛郡市文化財センター研究紀要』9　財団法人印旛郡市文化財センター

橋本勝雄　2018 「「渡来石器」の時間的位置づけとその評価」『東北日本の旧石器時代』六一書房

塙　静夫　1976 「大谷寺洞穴遺跡」『栃木県史　資料編　考古１』栃木県

塙　静夫　1978 『大谷寺の歴史－洞穴遺跡と磨崖仏群－』天開山大谷寺

塙　静夫　1979「縄文時代」『宇都宮市史』原始古代編　宇都宮市

林　謙作　1973 「層序区分－その現状と問題点－」『物質文化』21　物質文化研究会

藤本　強・小林達雄・佐藤雅一・谷口康浩・岩崎厚志　2007 「新潟県中魚沼郡津南町　本ノ木遺跡第３～５次調査の概要」『第21回　東北日本の旧石器文化を語る会　予稿集』東北日本の旧石器文化を語る会

藤山龍造　2005 「氷河時代終末期の生活空間論－先土器 - 縄文移行期における遺跡立地分析の試み－」『古代文化』第57巻第１号　古代學協会

文化庁　2014 『適正な埋蔵文化財行政を担う体制等の構築について』（報告）

文化庁文化財部記念物課　2015 『史跡等・重要文化的景観マネジメント支援事業報告書』

森先一貴　2015 「晩氷期変動と生活構造の変化」『季刊考古学』第132号　雄山閣

森先一貴　2017 「旧石器時代から縄文時代草創期遺跡の保護」『月刊文化財』646号　第一法規

町田洋・新井房夫　2003 『新編火山灰アトラス』東京大学出版会

宮井英一　1985 「宮林遺跡」『大林Ⅰ・Ⅱ　宮林　下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集　財団法人埼玉

県埋蔵文化財調査事業団

山﨑　健　2013 「動物遺存体」『町上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第240集　新潟県教育委員会･財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

山内清男　1932 「日本遠古之文化２　縄紋土器の起源」『ドルメン』第１巻第５号　岡書院

山内清男　1960 「縄紋文化のはじまる頃」『上代文化』第30輯　國學院大學考古学会

山内清男　1964 「日本先史時代概説　Ⅲ縄文式文化」『日本原始美術』１　講談社

山内清男　1969 「縄紋時代研究の現段階」『日本と世界の歴史　第１巻』学習研究社

山内清男・佐藤達夫　1962 「縄紋土器の古さ」『科学読売』12巻13号　読売新聞社

山田昌久　1985 「縄文時代における石器研究序説」『論集日本原史』吉川弘文館

吉川昌伸　2012 「卯ノ木泥炭層遺跡の花粉化石群」『新潟県卯ノ木泥炭層遺跡の発掘調査による縄文文化形成期の古環境と生業の研究』國學院大學文学部考古学研究室

吉川昌伸　2016 「更新世末から完新世初頭の東北日本の植生史」『旧石器研究』第12号　日本旧石器学会

渡辺秀男　2000 「新潟県十日町盆地の津南段丘群の形成について」『地球科学』第54巻第５号　地学団体研究会

O.E. Craig, H. Saul, A. Lucquin, Y.Nishida, K. Taché, L. Clarke, A. Thompson, D.T. Altoft, J.Uchiyama, M.Ajimoto, K. Gibbs, S. Isaksson, C.P. Heron, and P. Jordan　2013　Earliest evidence for the use of pottery. *Nature* 496：351–354

報 告 書 抄 録

ふりがな	もとのき・たざわいせきぐんそうかつほうこくしょ
書名	本ノ木・田沢遺跡群総括報告書
副書名	県内遺跡発掘調査報告書
巻次	Ⅶ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第284集
編著者名	加藤学・髙橋保雄・滝沢規朗（新潟県教育庁文化行政課） 石原正敏・笠井洋祐（十日町市教育委員会） 佐藤雅一・佐藤信之・今井哲哉（津南町教育委員会）
編集機関	新潟県教育委員会
所在地	〒950-8570　新潟県新潟市中央区新光町４番地１　　TEL　025（285）5511
発行年月日	2019（平成31）年２月８日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
もとのきいせき 本ノ木遺跡	にいがたけんなかうおぬまぐんつなんまちおおあざしもふなとおつ 新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡乙235-１ほか	15482	8	37°03′00″	138°40′21″	20180411～20190208		史跡指定を目指した総括報告書の作成
たざわいせき 田沢遺跡	にいがたけんとおかまちしひみぞあざなかはやしに 新潟県十日町市干溝字中林　ニ431-６ほか	15210	338	37°03′05″	138°41′09″			
じんいせき 壬遺跡	にいがたけんとおかまちしひみぞあざなかはやしに 新潟県十日町市干溝字中林　ニ429-１ほか	15210	374	37°03′06″	138°41′07″			

所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
本ノ木遺跡	遺物包含地	縄文時代草創期	列石状遺構１基、立石状遺構１基	土器（押圧縄文土器）、石器（尖頭器・抉入石器・掻器・石斧・磨製石斧）	
田沢遺跡	遺物包含地	縄文時代草創期	焼土４基	土器（隆起線文土器・押圧縄文土器・爪形文土器）、石器（尖頭器、石鏃、石斧、掻器、石錐）	
壬遺跡	遺物包含地	縄文時代草創期	ピット状遺構７基、焼土12基、配石２基	土器（無文土器・隆起線文土器・円孔文土器・爪形文土器・押圧縄文土器）、石器（尖頭器・有舌尖頭器・石鏃・石斧・掻器・有溝砥石）	

要約

本ノ木・田沢遺跡群は、信濃川と清津川の合流点付近に分布する縄文時代草創期の遺跡群である。この周辺を含む信濃川上流域には49か所の草創期遺跡があるが、その数と密度は国内有数である。草創期に先行する旧石器時代においても多くの遺跡が集中的に残されているが、その背景には豊かな資源環境（食糧・石器石材など）が重要な役割を果たした。本遺跡群は、縄文時代の開始期をめぐる「本ノ木論争」の舞台となった本ノ木遺跡をはじめ、中林遺跡・田沢遺跡・壬遺跡・卯ノ木南遺跡などから構成される。これらの遺跡は、いずれも低位段丘上に立地することが特徴的で、離水後間もない河川低地への進出を示す。河川資源の利用と密接に関係する立地と推測され、サケなどの魚類、石器石材となる河床礫の利用が想定される。旧石器時代から縄文時代草創期における遺跡群の変遷と信濃川の流路等を含めた地形の変遷を具体的に知ることができ、遺跡と自然環境・地形の変化を明確に把握できる全国的に見ても稀有な遺跡群ということができる。

本書は、本ノ木・田沢遺跡群のうち、本ノ木遺跡・田沢遺跡・壬遺跡について、大学等の発掘調査、十日町市・津南町の確認調査の成果を集約し、その歴史的位置付けを行ったものである。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第284集
県内遺跡発掘調査報告書Ⅶ

本ノ木・田沢遺跡群総括報告書

2019（平成31年）２月７日印刷
2019（平成31年）２月８日刊行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒950-2022　新潟市西区小針１丁目11番地８号
電話　025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第284集『本ノ木・田沢遺跡群総括報告書』　正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	本ノ木遺跡　北緯	３７度０３分００秒	３７度０２分４８秒
抄録	本ノ木遺跡　東経	１３８度４０分２１秒	１３８度４０分３２秒